



教会学校教案誌

2005.7.8.9月号

日本キリスト改革派教会
中部中会教育委員会

No.18

2005年7～9月カリキュラム (第18号)

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単 元 の 目 標			
7月3日	第一戒 神を神とする	問43, 44	ウ小45-48、ハイデ94
		マタイ4:1-11	出エジプト20:3
神を神とする戦いに勝利された主イエスを仰ぎ、神の御前に生きる幸いに招く			
10日	第二戒 刻んだ像	問45, 46	ウ小49-52、ハイデ95
		出エジプト32章	出エジプト20:4a
像を用いることはもちろん内なる偶像礼拝をしりぞける。正しい神礼拝に生きる			
17日	第三戒 神の御名	問47, 48	ウ小53-56、ハイデ99-102
		マタイ7:21-23	出エジプト20:7a
神の御名を唱えることで過ちを犯さない。正しく神をたたえ、神に祈ろう			
24日	第四戒 主の日の安息	問49, 50	ウ小57-62、ハイデ103
		ルカ6:1-11	出エジプト20:8
主イエス・キリストを礼拝する主の日の喜びとその安息を分かち合おう			
31日	第五戒 父母を敬う	問51, 52	ウ小63-66、ハイデ104
		エフェソ6:1-3	出エジプト20:12a
与えられた人間関係を神の恵みとして受け入れる心を養おう			
8月7日	第六戒 殺してはならない	問53, 54	ウ小67-69、ハイデ105-107
		創世期1:20-31	出エジプト20:13
いのちの主なる神を示し、殺してはならない理由といのちの尊厳を学ぼう			
14日 (平和)	平和を創り出す	—	—
		イザヤ2:1-5	イザヤ2:4
平和主日として礼拝をささげる。平和の幻に生き、平和を創り出す者となる			
21日	第七戒 姦淫してはならない	問55, 56	ウ小70-72、ハイデ108-109
		創世期2:18-25	出エジプト20:14
いのちと性のかかわり、性の祝福、結婚の神聖を学ぼう。キリスト教「性教育」			
28日	第八戒 盗んではならない	問57, 58	ウ小73-75、ハイデ110, 111
		エフェソ4:48-29	出エジプト20:15
すべては神のものである。盗むことではなく、分かち合い、与えることへ			
9月4日	第九戒 偽証してはならない	問59, 60	ウ小76-78、ハイデ112
		使徒言行録5:1-11	出エジプト20:16
神の真実の愛にこたえて、私たちも神と人に真実を尽して歩もう			
11日	第十戒 むさぼりの禁止	問61, 62	ウ小79-81、ハイデ113
		マタイ18:21-35	出エジプト20:17a
恵みをむさぼることは偶像礼拝である。神に感謝して生きよう			
18日 (敬老)	神のおきてを喜ぶ生活	問63	ウ小85-90、ハイデ86-91
		詩編119:97-104	テトス2:14
恵みにより、善い行いに熱心な民とされている。神の御心に生きることに励もう			
25日	十戒の完成者キリスト	問64	ウ小82、ハイデ114
		マタイ19:16-30	ローマ8:1
神の民をつぐない、いのちを与えてくださる主イエスを信じる幸いに生きる			

も く じ

2005年7・8・9月カリキュラム

まえがき	中根汎信	4
巻頭説教	小野静雄	5
日曜学校・教会学校訪問		
新座志木教会教会学校の紹介	愛智直行	9
連載「日曜学校教師会のために」	相馬伸郎	14
第七戒連動企画 CSで性について話そう	長谷川はるひ	23

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例 25

7月3日	26	
7月10日	34	
7月17日	42	
7月24日	50	
7月31日	58	
8月7日	66	
8月14日	74	
8月21日	82	
8月28日	90	
9月4日	98	
9月11日	106	
9月18日	114	
9月25日	122	
成人科 日本教会史(第4～6課)	木下裕也	130

2005年10・11・12月カリキュラム	133
2005年度 年間カリキュラム	134
自由献金のお願い	136
編集後記・あとがき	137

まえがき

中根汎信（那加教会牧師）

CRC 日本ミッションのビジョン・ツアーに参加し、ゴ－宣教師に導かれて韓国の教会を見学する機会を与えられた。ソウル市にある高神派のハンヨン教会の教会学校を見学した。

まず私たち見学者がはじめに通されたのは、サラン（愛）部というクラスであった。ダウン症や自閉症などの障害をもった子どもたち・車椅子の生徒たち20名ほど（在籍数は28名とのこと）と、保護者・教会の奉仕者数10名、合計約70名のクラスである。午前9時から10時40分まで活動している。この教会では福音に接しやすい健常者の子どもも対象の教会学校より先に、まずこのサラン部を開設したとのことである。そこにもハンヨン教会の信仰の姿勢がみられた。神の愛（サラン）に満ちた雰囲気、言葉の分からない私たちにも豊かに伝わってきた。子どもたちの自立と就業のための訓練という課題にも取り組んでおられた。

次は各クラスに見学者がわかれて見ることになった。幼稚科・小下科・小上科・中学科・高校科のクラスがある。私は小上科を見学した。椅子や机はなく、小上科だけで約35名の生徒と、教師10名ほどがカーベットの上面に座っておこなう。初めは礼拝、その後7つの小グループに分かれて分級をする。同じフロアにところせましと丸く輪になっている。生徒たちも先生も、生き生きとして教会学校が楽しくてたまらないという様子であった。

教会学校教師は約100名、生徒は230名（サラン部を含む）。人口の3割がキリスト者という韓国では、けっして大規模の教会ではないが、この教会学校を見ていると大きな可能性を感じた。私立学校（キリスト教系の学校ではない）の建物を借りての伝道ということで、かなりのハン

ディがあるはずだが、逆に学校という利点をうまく生かしているように思えた。子どもが解散してから、10名ほどの教師と懇談した。キムチと御飯とスープの昼食をいただきながら、楽しく真剣な話し合いができた。多岐にわたる内容をかいつまんで記したい。

◇韓国の教会の成長は、1970年代・80年代に、教会学校教育に本気に取り組んだことが、大きな要因となっている。「1年先が心配なら種を蒔きなさい。10年先が心配なら木を植えなさい。100年先が心配なら人を育てなさい。」これは中国の諺を引用してのゴ－宣教師の言葉である。

◇何よりも生徒一人一人を愛し、子どもと本気になって向き合い、聖書のメッセージの生活への適応をチェックする。木曜日くらいには生徒全員に電話をし、霊的状态・生活の様子を把握し、教会学校の宿題の進み具合を聞いたりして、主の日の教会学校に備える。

◇日本と同様に、韓国でもいじめや犯罪の低年齢化、受験戦争といった問題がある。そういう子どもへの対応として、学校を利用していることもあり、教会学校が生徒のカウンセラーの役割を果たしている。受験戦争の中で、やはり中高生になると教会学校の出席が減少する。そういう中で信仰にたつか、この世的な価値観にたつか。親と教師はその生き方が、信仰に基づいていることを子に示さなければならない。

◇ハンヨン教会では、狭い伝道面に限らず、社会的・文化的な事柄をふくめて、子どもをとりまく教育全般に配慮してきた。

韓国の教会の成長は特別なことではなく、すべきことをきちんとやり、神がそれを祝福しておられる結果であると感じた。

「教えの初歩を離れ」

—ヘブライ人への手紙6章1～12節による説教—

小野静雄（多治見教会牧師）

だからわたしたちは、死んだ行いの悔い改め、神への信仰、種々の洗礼についての教え、手を置く儀式、死者の復活、永遠の審判などの基本的な教えを学び直すようなことはせず、キリストの教えの初歩を離れて、成熟を目指して進みましょう。神がお許しになるなら、そうすることにしましょう。一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかるようになり、神のすばらしい言葉と来るべき世の力とを体験しながら、その後に墮落した者の場合には、再び悔い改めに立ち帰らせることはできません。神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱する者だからです。土地は、度々その上に降る雨を吸い込んで、耕す人々に役立つ農作物をもたらすなら、神の祝福を受けます。しかし、茨やあざみを生えさせると、役に立たなくなり、やがて呪われ、ついには焼かれてしまいます。

しかし、愛する人たち、こんなふうに話してはいても、わたしたちはあなたがたについて、もっと良いこと、救いにかかわることがあると確信しています。神は不義な方ではないので、あなたがたの働きや、あなたがたが聖なる者たちに以前も今も仕えることによって、神の名のために示したあの愛をお忘れになるようなことはありません。わたしたちは、あなたがたのおのおのが最後まで希望を持ち続けるために、同じ熱心さを示してもらいたいと思います。あなたがたが怠け者とならず、信仰と忍耐とによって、約束されたものを受け継ぐ人たちを見做う者となってほしいのです。（ヘブライ人への手紙6章1～12節）

(1) 多治見教会は、この町で100年の歴史を刻むことができました。その恵みを、私たちは昨年とその前の年に、感謝しつつ記憶してまいりました。この東濃の地方都市で、イエス・キリストとその福音に生きることを、ひたすら学び続けた人々の歩みを、私たちは、どれほど感謝してもし足りないと思うのです。そして、先立って行った人々への感謝は、今の私たち自身ごどのような信仰に生きてゆくか、ということと深いつながりをもっております。過去の恵みを忘れる教会は、将来への歩みを心をこめて進めてゆくことができないからです。

しかし、同時に、教会の歩みは、過去の歩みに恋々としてそこに留まっていることではありません。私たちは、前進する神の民です。イエ

ス・キリストの教会は、地上を旅する神の民であります。地上を旅する神の民。この神の民は、何を目指して旅を続けるのでしょうか。それはもうはっきりしております。イエス・キリストに向かう旅です。イエス・キリストと共に生きる信仰の歩みです。教会が、イエス・キリストを目指す地上の旅人であること。その恵みを、もっとも深く描いた書物のひとつが、ヘブライ人への手紙です。イエス・キリストにおいて、ほかのどんな地上の宝にもまさる、掛け替えのない救いが完成しました。キリストご自身が、救いの完成者として、命の君として、私たちの地上の旅路の先頭に立ってくださいます。ですから、このイエス・キリストに目を注ぎましょう。「信仰の創始者また完成者であるイエスを見

つめながら、忍耐強く走りぬこうではないか」(12章1,2節)。イエス・キリストから目を逸らさないでいよう。それが、ヘブライ人への手紙の、終始変わらない訴えなのです。そのような、この手紙全体の脈絡の中に、今朝の聖書の言葉を置いてみます。そうすると、「教えの初歩を離れ」ということが、どういうことかが理解されてまいります。「成熟を目指して進もう」ということが、どのような訴えであるかが理解されてくるのです。

(2) ここで、ヘブライ人への手紙の著者が、「基本」とか「初歩」と言っているのは、どういうことなのでしょう。挙げられているのは、6つの教えです。「死んだ行いの悔い改め」「神への信仰」「種々の洗礼についての教え」「手を置く儀式」「死者の復活」「永遠の審判」など。これらは、どういう意味で「基本」とか「初歩」の教えと呼ばれているのでしょうか。ふたつの読み方があるようです。

ヘブライ人への手紙を受け取った人々は、もともとユダヤ人であり、旧約聖書に養われた人々です。旧約聖書によほど親しんだ人でないと、よく分からないような言葉や考え方が、この手紙にはしばしば出てまいります。そうしたユダヤ人でキリスト者になった人々にとって、ここに挙げられている言葉は、どれもユダヤ教徒の時代に、すでに学んでいたことでした。死んだ行いの悔い改め。神への信仰。死者の復活とか永遠の命さえも、旧約聖書の教えにすでに記されております。種々の洗礼。これはとくに、ユダヤ人に馴染み深いものでした。つまり、基本的とか初歩の教えと言われるのは、ユダヤ教からキリスト教への、最初の一步を踏みしめたときの信仰のことである。それがひとつの読み方です。

もう一つの読み方は、ここに挙げられているのは、どれも、今から洗礼を受けようとするときに、受洗の準備のために学ぶ信仰の教えだということです。ヘブライ人への手紙のあて先は、

おそらくローマにある教会、ローマにいるキリスト者の集いのために書かれたと思われます。そのローマの古い教会に伝わった、洗礼の準備のひとつに、キリストの名による洗礼に先立って、予備的な洗礼を受ける儀式があったことが伝えられています。それによるとここに記されている6つの基本的な教えは、洗礼を受けようとする人に教会が教える、洗礼準備教育の内容でだったと言われるのです。

以上ふたつの理解のどちらをとるにせよ、ここで「基本的」「初歩」と呼ばれている教えは、キリストへの信仰の、最初の一步を意味していることは疑いありません。この最初の一步は、もちろん全てのキリスト者にとって、生涯、決して離れることのできない信仰の一步です。ヘブライ人への手紙の著者は、こういう初歩の教えを、忘れなさいとか、捨ててよい、と言っているわけではありません。しかし、信仰の歩みは、ひとつのところに留まっていることはできません。新たに始まる信仰の戦いにそなえて、信仰の理解にも進歩と成熟が求められているのです。

(3) ヘブライ人への手紙には、信仰から離れて、この世の教えに舞い戻る人々のことが、何度も記されております。ユダヤ教から福音へと改宗した人々の中にも、もとのユダヤ教へ再び戻る人がいたようです。せっかく聖書の信仰を学んだ異邦人のキリスト者の中にも、この世の教えの方に心を奪われる人々がいたわけです。信仰から離脱してしまう、この世に迷い込んでしまう。そういう危険が、日々差し迫っているのです。それが、ヘブライ人への手紙の中に流れている、警告の響きです。この警告の響きを聞き逃してはなりません。洗礼を受けたときの、洗礼準備のときの教育だけで、わたしの信仰は十分だ、などと考える人はいないのです。赤ちゃんが、生まれたときには、まずミルクを飲んで育ちます。赤ちゃんに最初から、パンを食べさせたり、ご飯を与えるような親はいないでしょう。成長するにに応じて、まず柔らかいもの、そ

して少しずつ固い食物を与えるものです。一方、いつまでたっても、ミルクだけでよい、という子どもはいません。少しずつ固い食物を受け取るようになるからです（5章12,13節）。

さて、固い食物とは、必ずしも、難しい話ということではありません。実際、ヘブライ人への手紙を書いた人は、自分がどういう言葉で、どんな説明をしているかを、十分に弁えている人でした。9節「しかし、愛する人たち、こんなふうに話してはいても……」。自分が、どんなふうに話しているか。自分の言葉が、手紙を読む人々に、どんなふうに感じられているかを、十分に知っているのです。つまり、少し厳しい言葉を使っていること、これを読む人々が、ちょっとひるんでしまうだろうということを知っているわけです。教会で語ることを託される者たちは、いつでも、自分がどのような言葉で語っているかを、よく弁えていることが大切です。

(4) 4～6節に書かれているのは、相手をひるませるような言葉です。(中略)このような厳しい言葉を話しているが、あなたがたについては、もっと良いことがあると続けております。厳しい言葉を語りっぱなしにしないのです。「救いにかかわることがあると確信している」。つまり、本当に言いたいのは、あなたがたの救いが、どんなに確かであるか、ということです。その証拠を挙げているのです。それは、あなたがたが今までも、これから、キリストの教会に生きている、という揺るぎない事実だと言っております。「あなたがたが聖なる者たちに以前も今も仕えていること。神の名のために示した愛」。それを神様は決して忘れる方ではないのです。「聖徒の交わり」という恵みの中で、私たちが生きていること。互いに仕え合うことによって、神の恵みを分かち合っていること。それこそが、教会と信仰の宝であることを、読者によく理解してほしいと願っているのです。

「神の名のために示した愛」と言われます。私

たちが、教会に生きるということは、神の名のために生きることです。誰かの心に寄り添い、だれかのために祈り、だれかのために小さな奉仕の働きをさせてもらう。それは、けして自分の名のためではありません。牧師が、自分の名のために何かを始めたら、もう教会は教会でなくなるでしょう。当然のことです。長老や執事が、自分の名のために何かをしようとするれば、その働きから、おそらく本当の愛は失われるのです。私たちが教会ですることは、神の名のため、イエス・キリストの美しい名のためです。キリストが生きてくださるためにこそ、互いに聖徒の交わりに心を尽くしているのです。

そのように考えると、教えの初歩を離れることは、私たちが、地上を旅する神の民であることからくる、じつに自然な願いであることがわかります。洗礼を受けた当初の、初歩の教えだけでよいなどは、誰も考えていないのです。パウロは、エフェソの信徒への手紙3章18節に「キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり……」と言っております。聖書の教えは、たんなる知識ではありません。結局それは、イエス・キリストの内に表された、神の愛を知ることです。そしてその愛の中に住まうことです。いずれにしても、私たちは、洗礼のときの信仰と理解から出発して、さらに深く、さらに遠く、さらに大きな愛を知ることへと旅立ったのです。

(5) 初歩を離れるということの意味が、分かっていただけでしょうか。そして「成熟を目指す」のであります。12節には、「あなたがたが息け者とならず、信仰と忍耐とによって、約束されたものを受け継ぐ人たちを見倣う者となってほしい」。私たちは、決して信仰の歩みにおいて、焦ったり急いだりする必要はありません。じっくりと、いまの信仰の足場を固めてゆく、そして前進したいのです。焦らず、息けず、それが合言葉です。

ヘブライ人への手紙では、約束された人たち、といえども誰よりも、アブラハムのことを思うべきでしょう。(中略)そして、この信仰の道を、もっとも深く、誰よりも完全に辿ってゆかれたのは、主イエス・キリストであられます。信仰の創始者また完成者。それが、ヘブライ人への手紙の描くキリストです。キリスト以上に、この信仰と忍耐の道を、息けず、心を鈍らせずに歩まれた方は他におられません。ですから私たちは、信仰の目をいつでもイエス・キリストに向けるのです。キリストは、いったいどのようにして、地上の生活のなかで、信仰と忍耐を尽くされましたか。主イエス・キリストは、私たちの救いのために、どんな良いことをしてくださったのですか。そのキリストの恵み、キリストの献身を学ぶ上では、決して私たちは息け者であってはなりません。何よりも、キリストは、私たちの罪を神様に執り成すために、みずから永遠の大祭司となって、天の幕屋の中へ入ってくださいました。ご自分の流した十字架の血を携えるほどの、大きな深い愛をもって、キリストは私たちの大祭司となられたのです。これが、ヘブライ人への手紙が教える、成熟した信仰です。このような永遠の大祭司を、私たちは天にもっているのです。アブラハムが、誰よりも慕い求めたのは、この天の大祭司キリストでした。

これが成熟した信仰であれば、いったいだがそのような成熟を避けようとするでしょうか。

この成熟は、私たちすべてのキリスト者の憧れです。「成熟(を目指して)」と訳されているのは、「完全」という言葉です。ヘブライ人への手紙では、完全という言葉は、ただイエス・キリストだけに当てはまる言葉として用いられています(2章10節、5章8～10節)。成熟を目指す、ということは、なにか人間の知識や理解力の意味で、成熟してゆくとか、立派になるということではありません。それはひとえに、イエス・キリストの完全さ、イエス・キリストの救いの確かさに向かうことです。どんなことがあっても、キリストの愛から迷い出ない、という信頼と知識に生きることです。

今年、私たちの教会は、聖書の福音と、宗教改革の信仰告白への理解をいくらかでも深めることを願っております。聖書に込められた、神様の救いの教え。救いの教理。その全体を、少しでも深く豊かに学ぶことができたと願っているのです。その究極の目当ては、イエス・キリストです。キリストを知り、キリストに生きることであります。福音の教理とは、イエス・キリストご自身ですから、キリストを知ることにおいて、息けることを知らない者にされたいと思います。キリストを学ぶことに疲れを知らない人にされたいのです。神がおゆるしになりますから、私たちも、この一つのことにおいて熱心な者になれるのです。

(2005年1月30日、多治見教会主日礼拝説教、定期会員総会前で今年度の主題聖句に基づく)

新座志木教会教会学校の紹介

新座志木教会教会学校長 愛智直行

私たちの教会は1983年の伝道開始以来、子どものための教育に力を入れて参りました。1990年に教会独立した後もその姿勢に変わりはありません。現住培餐会員35名中CS教師が10名もの先生が教会学校奉仕に関わっております。その力の入れ具合と相反して、子ども礼拝の出席は山あり谷ありを推移しているのが現状でしょうか。レギュラー出席の大半が契約の子。しかも住んでいるのは、牧師の子どもたちを除いて皆地域外。契約の子どもの出席もままならず2004年度の平均子ども礼拝出席数は6名で、先生の方が多い状態がこしばらく続いている状態です。常に危機意識を持ってはいるが、何かがいけない……と、そう思いつつ様々な方法を模索してきました。今取り組んでいるいくつかのこと、今後の取り組みたいことについても少し加えて、

私たちの教会学校を紹介したいと思います。

1. 教会学校

○礼拝

日曜 午前9時～9時30分

教師は始まる10分前に集まり、その日の礼拝司会者が連絡事項と聖書箇所の確認、朗読、また、教師2名の祈祷をもって礼拝に臨みます。その日一日の一番はじめの礼拝となりますので、とりわけこの祈祷会の意味も大きいと思っています。礼拝のお話は教会学校教師が当然のことながら担当しますが、年に二、三回、通常のローテーションの合間に教師以外の会員の方にその働きを特に覚えていただく意味でお話をお願いしております。子どもたちにとっても、日頃の先生以外の方のお話とあって新鮮に感じるよう

午 課

- 1 あなたは、わたしの影に、影にのきも得てはせぬやいな。
- 2 あなたは、自分のために、色ざんだ髪をつくってはせぬやいな。
- 3 あなたは神、主の志を、おだりに進めてはせぬやいな。
- 4 なんとく目をあけて、これをせいとせよ。
- 5 あなたの涙と涙をうやませ。
- 6 あなたは、こうしてはせぬやいな。
- 7 あなたは、かんいんしてはせぬやいな。
- 8 あなたは、ゆずんではせぬやいな。
- 9 あなたは、隣人について、せしうしてはせぬやいな。
- 10 あなたは、隣人の涙をぬき去ってはせぬやいな。

主の祈り

愛にまじりてわれらの涙よ、おびわくは涙をながめさせたせよ、おくにきこた
らせたせよ、おこころの涙にゆるごとく、地にもおさしたせよ、われらの目
のかたき、おほいにおたえたせよ、われらに目をあかすせよ、われらがゆるごとく、
われらの罪をもゆるしたせよ、われらをこころにおかかせ、あくよりすくい
だしたせよ。

誰とちからとさかえとは、かざりゆくせんじのものをせねばなり。

アーメン。

しゅう ぼう
週 報




日本キリスト改革派 新座志木教会
 新座志木野3-19-8
 電話：048-474-9237
 牧師：菊岡雄光
 牧長：愛智直行

賛美テーマ
 「みんがでお祈りしよう」

新聖公会教会・日曜学校通 報

礼拝 午前9時

主の2005年4月3日
 教会 あいち 教会
 解 説 とあえ はるみ先生

1. 前奉 ・自筆とじてみせしむかにあつけて拝読をこころから礼拝する準備をしましょう
2. さんびか 3巻 (あお) ・心から拝読をさんびします。
3. お祈り ・先生の祈りの言葉を心に受けとめてください。
4. 干 紙
5. 信仰生活 冊 42
6. 聖書朗読 創世記1章1節
7. お話 「栄耀の冠」
 あらいし 先生 
8. さんびか 10巻 (あお) ・聖書の言葉を心算してさんびします。
9. 献金 ・毎週の献金の準備はこうです。
 (高) 毎週学校のため (茶) 毎週の 聖 書を借る 聖 書を返す
10. NABA DAILY 聖書の質
11. 主の祈り
12. 後奉 ・礼拝の準備を祈ります。
13. 報告

礼拝後分級に分かれます。それぞれ分級の先生の話をよく聴きましょう。

- 幼稚園 2階教室です。(担当: 船津みづ子先生、与安奈美先生)
- 小学年級 礼拝室です。(担当: 船津まど先生)
- 小学上級 礼拝室です。(担当: 沼津裕美先生)
- 卒業科 2階教室です。(担当: 船津裕美先生)

にちようがっこうニュース!!

- ① 4月にゆりばした1号白は通読式です。
- ② 葉書のハッピータイムは「春の礼拝」です。朝9時から花巻公園で礼拝をします。その後、公園で遊ぼう!の時間を取って下さい!
- ③ 奉迎の変わり目です。かぜやひかりのように、健康に学ぼう!をしましょう。

来週 予定

「アダムとエバ」お話: やまもと しんたろう先生
 (準備がえられるようにお祈りしましょう。)

今週のお祈り

- ・ 日曜日: 参道も拝読に使える聖書が出来ますように。今日の礼拝を必ず11に拝読にお祈りできますように。
- ・ 月曜日: 学校・幼稚園・お家のどこにいても拝読。導いて下さい。4月から始まる参道です。学校や幼稚園でも導かれますように。
- ・ 火曜日: 筆の準備が教室に来ることが出来るようにしてください。
- ・ 水曜日: 困っているお話を聞いて、助けをかけることができますように。
- ・ 木曜日: みんなの準備が導かれますように。真剣をしているお話を聞いて早くよく祈りますように。
- ・ 金曜日: 色紙の準備が導かれますように。そして、参道の色紙が早く導かれますように。また、地盤で困っている人たちがたくさんいます。拝読、どうかお話を聞いてください。
- ・ 土曜日: 船津は日曜日です。この準備をして教室に来ることが出来るように。また、船津お話を聞いて下さる先生をどうかお祈り下さい。

です。ローテーションは年末に一年分作成し、年報に載せています。

お話の時間はおよそ「10分」……と決めておられますが、つついそれぞれ先生の力が入ってしまい、15~20分位の話になってしまっています。「10分」は子どもが集中して臨めることを考慮して決めた時間ですので、今後も礼拝全体の時間配分は気を付けたいと思っています。また話もワンセンテンスを目安にということで決めておられますが、どうしても散漫になりがちです。それでも教材を使ったり、絵本を使ったりと、それぞれの先生が工夫を凝らしたお話でも楽しいです。教本は『成長』(CS成長センター)を使用。毎週校長が作る「週報」に基づいて礼拝が進められます。一昨年、私が岩の上教会にお邪魔した際にいただいた週報を大いに参考にさせていただいております。また、信仰告白として用いているのが中部中会教育委員会発行の『子どもカテキズム』で、毎週1問ずつ朗読して理解を深めています。讃美歌はお話担

当者が前日までに選定し、週報に載せます。

○分級

幼稚園科、小学校低学年科、小学校高学年科
 午前9時30分~10時

中高科 午前9時30分~10時15分

礼拝後報告があり、それぞれ分級に分かれます。担当の教師が『成長』のワークブックを用いて行きます。礼拝と連動していますので担当の先生たちは進めやすいと思いますが、自分たちが作ったものでないこともあり、自主的な分級にできていないところが課題でしょう。それでもそれぞれの先生は一生懸命子どもたちとの触れ合いを大切に、話に耳を傾け、共に祈りあうすばらしい分級です。

中高科は子ども礼拝には出席せず、その後の礼拝に出席するように勧めています。前年まで『私の道の光』(フレデリカ・デ・ヨング著、大会教育委員会訳)、今年からは『ウエストミンスター小教理問答案内』(鈴木英昭著、つのがえ

社)をテキストに用いて行っています。子どもたちが主体的な学びができるか大きな課題がありますが、年に2～3回試験を実施して理解を深めています。出席人数は5名前後です。

○ハッピータイム

今年から毎月第二日曜日の分級の時間を「ハッピータイム」として、地域の子どもたちにも門戸を広げ、工作や絵本・紙芝居の読み聞かせなどに充てています。実は毎月第二土曜日を「こどものへや」として、学校の「土曜休み」が始まった頃から同様の内容のものを企画して行っていました。やはり「子どもたちの礼拝を中心とした教育を実践する」という観点に基づき、礼拝と「セット」で楽しい時間を持つというところから改めて始めました。普段来ない子どもたちも礼拝から参加でき、一石二鳥!?で感謝です。年間でテーマを決め、事前に案内葉書を毎月出して地域の子どもたちに呼びかけています。因みに今年4月のハッピータイムは近くの公園で「やがきれいはい」を行い、その後公園で楽しく遊んでおやつを食べました。大きな声で賛美し、とても新鮮だったようです。ある幼稚園の子どもから「いつも教会だとつまらないもんねー！」と言われ、返答に苦慮しました……。今後の課題は行事のみ参加の子どもたちをどのように礼拝に引き込むか?です。



こどもイースター

○年間の主な行事(本年度)

- 1月 おしるこパーティ (ハッピータイム)
- 4月 進級式、こどもイースター
- 5月 母の日のプレゼント作り
(ハッピータイム)
- 6月 花の日 (病院お見舞い)
父の日のプレゼント作り
(ハッピータイム)
- 7月 夏期学校 (教会にて)
- 9月 アイスクリームパーティー
(ハッピータイム)
- 12月 こどもクリスマス

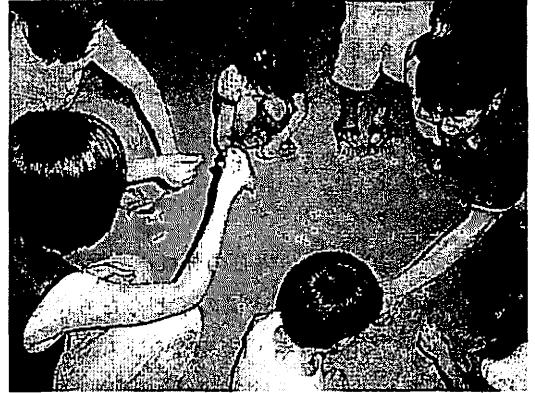
4月の進級式には、毎年、修了証とプレゼントを手渡します。こどもイースター、こどもクリスマスは毎年地域の子どもたちがたくさん訪れます。20名前後です。礼拝を行った後、祝会で腹話術や絵本の朗読、子どもたちの朗読劇や讃美、アニメ上映などを行います。今年は初めての試みとして、土曜日行っていたイースターを日曜日の午後行いました。地域外が多い契約の子の配慮からでしたが、それでも地域からたくさんの子どもたちが来ました。感謝です。

2. 教師会

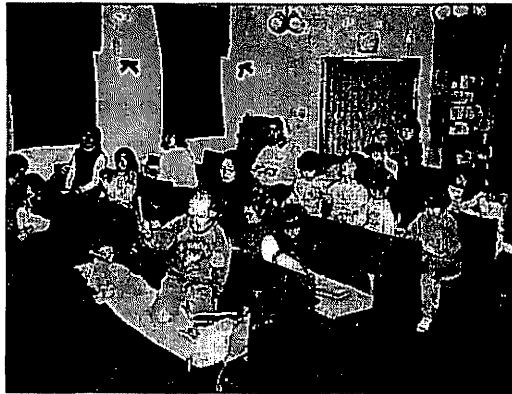
毎月第二日曜日午後から2時間前後教師会を行っています。校長が議長を務め招集します。教師会は時間があればあるほど話が尽きなくな



アイスクリームパーティー



夏期学校



こどもクリスマス

るので、議案書を作ってそれに基づいて会を進めています。会議を始める時に、毎回新しい「こどもさんび」を讃美して会を始めます。これはマンネリ化してしまう礼拝時の讃美選定にも大いに役立っております。

主な協議内容は

- ・ 前回（先月）記録確認
- ・ 次月お話内容確認。牧師先生が教本よりポイントをお話して学びの時としています。
- ・ 分級報告。担当の先生に毎週分級の記録を付けてもらっていますのでその記録を元に報告してもらいます。実際行った内容、子どもの様子や先生の感想などです。成長の記録として、今後の分級のあり方などを検討する資料としても使用します。
- ・ 議事。たとえば……行事の反省事項（これが大事！）、夏期学校内容検討、改善提案

など。

3. 教師研修会への参加

東洋宣教教会宣教師ゴー先生による教会学校教師訓練会（於：坂戸教会）への出席を推進しています。月二回くらいのペースで、金曜日午後7時30分から2時間行われています。私たちの教会からは私と妻（CS教師）、それと二人の兄弟姉妹が参加しています。とても素晴らしい学びの時間で、まさにいつも目から鱗で、満たされて帰路についています。4月から二学期ですが、一学期は「霊的な成長を目指して」を学びました。主に、

- ・ 霊的な成長とは
- ・ 子どもたちの視線にあわせて伝道をしているか
- ・ 子どもたちは何を求めているのか、どのよ

うな成長を描いているか
・目標、夢（ビジョン）を持って教育に当たっているか

……という内容の講義でした。ある意味、当たり前のことをおっしゃられています、それがとても新鮮なのです。逆にそれだけ「既存」概念に飲み込まれ、我々も麻痺してしまっているところがある……と実感できます。牧師も出席すれば改革派教会は変わるなあ、なんて思ったりもしています。先生は全国にもこの働きを広げたい考えがあるようですので、今後の支援と理解の輪を広げていくことを期待したいと思います。

4. 今後取り組みたいこと

……というか、ぜひ私が行いたいこととして、「家庭訪問」です。対象は地域の子どもだけでなく、契約の子にもです。昨今の状況を見ると、ただ子どもたちだけに呼びかけるのでは限界があると感じています。また、教師と保護者との信頼関係は絶対に欠かせません。子どもへの教育は家庭での生活とつながっています。それには私たちの教育方針のあり方が明確になっていないとなりませんが、しかし、まず神様から託された大切な子どもを私たちの祈りと熱心で支えているという姿勢をお見せすること、そして

それを実践しているという熱意を示しご理解いただきたいと願うからです。これは信者、未信者の親に関係なく、良好な関係を築く上で大切と思っていますので、どちらの家庭にもぜひ伺いたいと思っています。

それから、せっかくイースター、クリスマスにたくさんの保護者がいらっしゃいますので短い時間保護者の会の様なものを行い、そこでも信頼関係を築いていけたら、と思っています。

最後になりますが、大変嬉しいことにこの5月のペンテコステに高校生の信仰告白者が与えられます！ 近年では二人目となりますが、今年はあと一人希望者がいます。信仰告白予備軍がたくさんいますので、頼もしい限りです。それも子どもたちへの霊的な成長を親子と共に祈り、願い、小さな働きですが教会教育を通して着実に実を結んでいる、ということ強く思わされています。教会学校全体が神様から祝福をたくさんいただいている現れであるわけです……。そこまでにいたるアプローチに、我々教師のうれしさ、教育の楽しさがあるのではないのでしょうか。教師ひとりひとりがこれら恵みの実感に湧き出でて、尊い奉仕に参加させていただいているという自覚、それから責任の重大さを常に抱えていることが神様から求められているのだと思います。

第四回 日曜学校の歴史と日曜学校像

相馬伸郎（『教会学校教案誌』編集長）

日曜学校の歴史を考えると、大抵は、1780年、イギリスの印刷業者、ロバート・レイクスの働きから語り始められると思います。

レイクスはグロスターの出身で、21歳で、父親の事業を引き継ぎます。時あたかも、産業革命が進展していました。彼は、45歳のときに、労働力として幼少年の者たちが多数狩り出される現実、教育の機会を与えられず、道を迷う青少年を目の当たりにし、彼らの健全な成長を願い、毎日曜日に4つの学校を開きました。その学校に、女性教師を雇い、6歳から12・3歳の子どもたちに、いわゆる読み書きを教え、あわせてカテキズム教育を施したのです。日曜日の朝10時から夕刻5時半までの、この「日曜学校」が、急速に支持を集め、イギリス中に広まり、やがてアメリカに渡り、世界的な運動へと展開されて行きました。

その意味で、この「日曜学校」の働きと、私どもが今日、奉仕し、形作っている日曜学校とは異質のものであることが分かるのではないのでしょうか。そして、わたしは、みなさまとこの学びを通して、日曜学校を「自明」の事とせず、あらためて神学的に考えたいと思っています。

横道にそれますが、そこで、「神学的に考える」などと、牧師が言い出しますと、すぐに腰が引ける反応をなさる方もおられるかもしれません。かつて、「神学するとは何か」という題で講演したことがあります。（名古屋岩の上传道所のホームページに掲載。）

(<http://blog.livedoor.jp/iwanoue/>)

そのときに、キリスト者であれば、誰でも神学者であって、神学する営みなしに、キリスト者

として自覚的に生きることはできないと申しました。神の御言葉に照らして、今、自分がなしている営み（教会的奉仕）が、果たして御心になつてなされているのかどうかを検証する作業、自己批判する作業が神学することなのです。「日曜学校」も、これを分かりきってしまったものとしないうで、御言葉に照らし出してみる事が大切なのです。

その意味で、わたしは、いわゆる「教会教育」「キリスト教教育」の専門家ではありません。そのような者が、このような御奉仕に参加させていただくことは、「厚顔」であると叱責されるかもしれません。しかし、大胆に申しますと、素人でかまいません。日曜学校教師の皆様も、教育についての専門家でない場合が多いはずです。（もちろん、専門家がおられるなら、なおすばらしいに決まっています。）私は、専門家ではありません。しかし、「教会」の牧師なのです。皆様は「教会」の長老あるいは執事であられるかもしれません。そうではなくても立派な（！）信徒職務者なのです。「教会」教育の課題は、まさに自分たちの事柄であり、自分たちが主体的に考えてよいし、考えなければならないのです。

話を戻しましょう。最初の日曜学校運動は、伝道的、福祉的な動機、また、より良い労働者の確保という実利的な側面をも持ちつつ進展して行きます。アメリカにおいては、政教分離の原則のなかで、宗教教育のみを扱う場所として、教会の中に設置されて行ったようです。

そのおよそ百年後の、1889年には、「日曜学校世界大会」がロンドンで開催されます。ローマにおける第5回大会では、「世界日曜学校協会」

(Sunday School Association) が組織されます。つまり、日曜学校運動はその最初から、「超教派運動」であったのです。1907年には、世界キリスト教教育協議会と改称されます。

この運動の特徴や意義を挙げれば、①いかにして子どもたちを回心に導くか（魂の救い）に焦点をあてるというもの。②女性キリスト者が教会のなかで公的な働き場を見出すことに寄与したこと。③信徒のボランティアによる奉仕に担われたことによって、エキュメニカル（世界教会）運動として展開されたことなどでしょう。

見逃せない歴史的背景には、19世紀のリバイリズム（信仰復興運動）があります。神学的に教会の教育を考えた上での働きであるというより、むしろ伝道最優先の空気が流れ、信徒を中心とした熱意に支えられ展開されていたわけです。

そして日本でも、1920年（大正9・第8回）と1958年（昭和33・第14回）、東京で開催されました。

日本の日曜学校を神学するためには、簡略でも歴史を振り返ることは不可欠な作業です。（本誌所収の成人科をご参照下さい。）日本における日曜学校の歴史は、1872年、つまり、その最初の教会（日本基督公会・横浜基督公会）にまでさかのぼります。つまり、日本にとって、教会のスタートと日曜学校のスタートとは同じになされているのです。それほどまでに、教会の働きに不可欠のものであるという理解があったと言ってよいのではないのでしょうか。しかし、日曜学校伝道の先駆的働きを担った、田村直臣牧師（日本基督教会）は、その頃の日曜学校の状況を「教会の付録のごときもの」であり、「宣教師が外国の教会に日曜学校というものがあるということを教えてくれたから、子供の好きなキリスト者が物好きに子供に手を出し始めた。」と批判的に述べています。

しかし、たとえ思い思いに聖書の話をし、聖

画を見せ、カードを配る程度のものであっても、子どもへの伝道の熱い思いにあふれたこの働きは大変な勢いで進展して行きます。

1882年の東京宣教師会議録によれば、日曜学校49校、教師156名、生徒4060名。1888年は、267校、教師360名、生徒16820名、つまり、生徒数は6年間で4倍です。驚くべきことに、当時の教会数は206教会ですから教会より多いのです。つまり、60校は、教会の外で、分校として開設されたのです。日曜学校は、子どもへの伝道であることはもとより、開拓伝道の拠点でもあったわけです。

私どもの教会の歴史において必ず取り上げられなければならない植村正久という日本基督教会の最大の指導者がおります。彼の「日曜学校像」の一端をうかがい知ることのできる言葉をご紹介します。【「日曜学校を」宗教教育及び徳育をしくのに有力な機関たらしめなば、国家の利益、教会の勢力、キリスト教の声価いかにたかめらるべきか」。ここに「徳育教育」という言葉が記されています。簡略な紹介で、かえって誤解を生じやすいかもしれませんが、当時の社会状況（内村鑑三の不敬事件によって、国家権力からの厳しい批判がキリスト教になされた）から判断するとき、この徳育教育が、個人主義的な人格の修養を目指すような日本の日曜学校教育の余地をつくってしまったのではないか、さらに言えば、国家権力への対決姿勢を緩和させる信仰姿勢を教会に植えつけたのではないかと考えられると思います。

生い立ちが既にそうであるように、日本教会史と日本日曜学校史とは、そのまま一つの線で結ばれてゆきます。前述の1920年の東京における大会では、海外32カ国から1800人を迎え、開国以来最大の国際会議であったと言われます。財閥の渋沢栄一が募金委員を務めたように、日本の財界、政界から積極的な協力があつたのです。さらに、後日、日曜学校会館建築の際には、宮内省から千円が寄付され、キリスト教界は、

歓喜しました。徳育教育が国家体制の中にすでに絡めとられている現実を、当時の関係者は気づくことができませんでした。

そして、ついに1930年代に至り、37年には、日曜学校協会理事長が、日中戦争支持の姿勢を表明し、加盟校宛に「質素を旨とし、反戦思想ありと誤解されるごときなきよう」、主事名で通告します。38年には、雑誌「日曜学校」で、神社参拝に理解を示すように訴えています。さらに40年には、皇紀2600年記念日曜学校大会を各地で開催しました。諸教会が、日本基督教団に統合された際には、雑誌「教師の友」では、繰り返し、天皇の赤子としての使命、つまり天皇のため、お国のために従軍することこそ神の御心であるとし、これを鼓舞する説教がなされ続けます。

日本キリスト改革派教会は、このような状況を、「我等は之を神の御前に恥ぢ」と告白しました。私は、この告白を、神港教会の田中剛二牧師の教団脱退届の線で理解します。「一、教団成立は日本にある教会の信仰的妥協であったことを確信すること（悔改のためには教団を解体すべきである。）一、私の教団脱退は私の悔改である。」つまり悔改めです。（ただし、正確に申しますと、「理解したい」のです。少なくとも今日、この線上で立ち、さらに展開し、強固な姿勢を確立しなければならないと確信します。）

さて、戦後になり、空前のキリスト教ブームが到来しました。大勢の子どもたちを日曜学校に招き入れることになりました。しかしそのとき、ほとんどの教会は、自分たちの罪責について、社会に言明せず、子どもたちにも謝罪しませんでした。

このように戦前の日曜学校は、伝道的な側面（しかし内実は、徳育教育の結実による教会の声価を高め、子どもたちや周りの大人への会員獲得の手段）が強くありました。しかし、戦後、このあり方が深く問い直されるようになり、「日

曜学校」の呼称の変更すら求めるほどのものとなりました。それが「教会学校」なのです。

これは、明らかにこれまでの日曜学校の営みを神学的に再検討する試みに基づいてなされたものです。1947年にGHQ宗教顧問として来日したP・H・ヴィースは、翌年、「キリスト教教育の定義と目標」を發表します。そしてカリキュラムを整備して行きます。これは、それまでの「自由主義神学」への反省、つまりこの世の知恵、教育哲学を安易にキリスト教教育に導入したことへの自己批判に基づきます。具体的には、「神の言葉の神学」の影響を受けたことの実りでした。

ちなみに日本キリスト改革派教会も、「教会学校」という名称を重んじています。礼拝指針第四章に明かです。しかしながら、それは、戦後の「教会学校」運動の影響によるものであってはなりません。私どもの理解は、前号にも記しましたが、教会そのものが神の学校、御言葉の学びの家なのです。つまり、私どもも、あのレイクスの日曜学校運動に影響されて、感謝のうちに営んでいるのは紛れもない事実なのですが、日本キリスト改革派教会の教会理解に沿って、営んでいるのです。営まれるべきなのです。

紙数の関係上、日本キリスト改革派教会日曜（教会）学校像の詳細は他日に譲ります。いずれにしる、私どもの教会の自己理解即、日曜学校像です。私どもの教会論に基づく、聖書的な日曜学校像の確立を共に求めて参りましょう。

主要参考文献

奥田和弘、『キリスト教教育を考える』、日本基督教団出版局、1990年。『教会教育ガイド』、日本基督教団教育委員会編、1982年。『キリスト教教育講座』、新教出版社、1958年。ジャック・シーモア、『キリスト教教育の現代的展開』、新教出版社、1987年。R・ヘンダーライト、『教会教育の神学』、日本基督教団出版局、1968年。

第五回 子ども礼拝式の捧げ方

相馬伸郎（『教会学校教案誌』編集長）

「祈りの法則が信仰の法則を定める」

いにしえより、教会に言い伝えられてまいりました真理を伝える珠玉の言葉は、大抵の場合、ラテン語です。「コーラム・デオ」（神の御前で）とか、「ソリ・デオ・グロリア」（ただ神の栄光のために）とか、ご存知の方も多いのではないのでしょうか。上述の言葉のラテン語は、「レックス・オランダィ、レックス・クレデンディ」です。「祈りの法則」という言葉の「祈り」とは、個人の祈禱（生活）のことを意味しているわけではありません。主日礼拝式、公的礼拝式のことです。そして、信仰の法則とは、教理や制度のことです。つまり礼拝が信仰を生むのです。

主イエスが、エルサレム神殿から「わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである」（マタイ 21：13）として、商人たちを追い出した出来事を思い出してください。主が、どれほど激しく、御自身の礼拝に対して関心を注いでおられるのか、一目瞭然です。ひるがえって、今日の神の民である私どもも、この神御自身の礼拝式への熱心に迫られて、私どもの全身全霊を傾けて、主の日の礼拝式を捧げることに熱中しなければならぬのは当然であります。

そもそも、私どもの個人的な日々の祈りとその生活は、主の日の礼拝式の体験によってこそ、真実に生み出され、養われてまいります。しかし、現実には、主日の説教で養われないという悲しい声、説教への失望が叫ばれています。多くの敬虔主義者たち、分派を生み出した歴史的な事実がここにあります。これを、彼らの責任に帰すことは容易ですが、説教者こそ、「自ら」真っ先に問わなければならないことです。

私ども福音主義（プロテスタント）教会は、

主日とともに週日の祈禱会をも重んじてまいりました。それは、主日礼拝式の不足を補うために「ではなく」、主日礼拝式のさらなる充実を求めるためにこそなされるものです。もちろん、週日も、教会は「あり」ますが、主日礼拝式によってこそ、キリストの体の「輪郭」は、世界に鮮やかに示されるのです。ですから、牧師とは、その全存在を主の日のために集中して生きる人間と申して構いません。日々のあらゆる奉仕の営み、弊誌の編集発行なども含めて……、すべては、主の日の礼拝式を整えるためにこそなす業なのです。なぜなら、神が、御自身との会見、交わりを、その民にお与えになられたのは、神の民の祈りの家、教会の、「祈り」「公的礼拝」においてだからです。教会の営みは、礼拝に始まり、礼拝に終わるものだからです。

家庭における礼拝、個人の祈りも、この言わば「大きな祈り」と結ばれるとき、真のものとなってまいります。

たとえば、私どもの重んじておりますウエストミンスター信仰基準が、教会政治や礼拝指針の制定後に整えられて行ったという事実もまた、あの「祈りの法則」の真理性を証するものと言えるでしょう。

煩をいとわず繰り返します、私どもの営みのすべては礼拝から始まり、礼拝へと帰ってゆくのです。私どもの教理教育、カテキズム教育もまた同じです。礼拝体験に裏打ちされて始めて、真に実を結ぶもの、真の礼拝をつくるものとなって行くのです。分級に分かれて、子どもたちの顔を見、膝を突き合わせるようにしてなされる学びは、礼拝体験に根ざしてのみ正しく結実することができます。つまり、再び、子らを「礼

拝」へと向かわせる力となるわけです。

補足すれば、その真の実りのなかには、伝道も含みます。主イエスの恵みを受けた者は、自分ひとり礼拝に向かって済ませることはできなくなるからです。お友達と共に日曜学校に行きたい、イエスさまのところに誘うべきだという伝道、証も生まれてくるのです。さらに、それは、主日礼拝式だけに限定しません。礼拝的生活へと向かわせ、形作らせる力ともなるのです。

横道ですが、私が、子ども礼拝「式」と記すのは、大人の「礼拝」が、礼拝指針に規定されるような、もともと、典礼（リタージ）であるべきなら、子どもたちのそれも、基本的にはまったく同じであると考えからず。

日曜学校は子どもの礼拝共同体=教会である

上述のように、日曜学校の営みとは、「分級中心より、礼拝式中心」（第17号「本誌の基本方針」参照）なのです。そうであれば、日曜学校とは、子どもの礼拝共同体であることも明らかにされてくるのではないのでしょうか。さらに、「日曜学校は、子どもの教会」という表現もなお許されているのではないのでしょうか。ただし、「子どもの教会」という表現は、真の礼拝式を成立させる必須要件である説教が、「子どものため」とはっきりと相手を定めて、「正しく」語られているというところのみ許されるものであり、そのような意味で用いるべきものです。なぜなら、言うまでもなく、一つの教会のなかで、子どもの教会、大人の教会、高齢者の教会というように、年齢別の教会があってよいわけがないからです。そのような教会論は、聖書があまり知らないところでは。

個人的なことで大変恐縮ですが、筆者は、キリスト教主義の高校で、「学校礼拝」「教室礼拝」の経験があります。未信者の教師が聖書を開いて、感話を述べるのを聞く……。そのときには、何も感じませんでした。後年、自分がキリスト者になってから、キリスト教主義学校の教師

になって、伝道しなければと考えました。それは、この現実への問題意識、批判があったからでした。礼拝を演じて見せることはできませんし、キリスト不在の礼拝になど、重的には、何の意味もありません。

詳しくは次回に譲りますが、日曜学校の説教は、洗礼を受領した教師が担います。もとより、日曜学校の礼拝式では、聖餐を祝うことはありません。しかし、教師たちは、言うまでもなく洗礼受領者、聖餐受領者たちなのです。彼ら二人、三人が子らの罪の赦しのために、広く解釈すれば、礼拝のために集まれば、そこにキリストの御臨在は約束され、確保されているのです。（マタイ18：20）

ですから、教師たちこそ、子ども礼拝式の真実の中核です。子どもの礼拝共同体である日曜学校の主体は、教師たちなのです。日曜学校の礼拝式が成立する要は、教師たちにこそあるのです。それは、長老主義教会が、礼拝式の中核を小会、つまり長老たちに置いていることを思い出していただければ、了解していただけるのではないのでしょうか。ヨーロッパの教会では、長老たちの席が、きちんと設けられているそうです。あるいは、皆さまの教会では、——これはアメリカ型なのでしょう——講壇が設置されている壇上に、司式者席、長老たちの席を設けている教会もあるのではないのでしょうか。本来、礼拝を主宰しているのは小会、長老たちなのですから、全員が壇上に登っても良いわけです。

もちろん、日曜学校の教師たちは、壇上に登る必要はありません！ しかし、もしも、教師自身が、子どもたちにきちんと礼拝「させる」ように見守るイメージで、礼拝式に臨んでいるのなら、それは、厳しく正されなければならないと思います。よき子ども礼拝式の捧げ方を問う前に確認すべきは、「先ず」教師自身の礼拝姿勢が問われているということでもあります。

子ども礼拝式の捧げ方の一例

さて、このように記しますと、うっかりすると大きな過ち、畏にはまる危険性がないわけではありません。つまり、主人公は誰なのかという基本が逆転することです。子ども礼拝式は、教師たちの「存在」にかかっているのですが、教師たちは徹底的に、子どもたちに向かい、彼らに奉仕するのです。その意味での主人公は、子どもたちなのです。

ここで具体例として、私どもの日曜学校の営みを紹介させていただきます。名古屋岩の上伝道所の日曜学校の紹介は、既に4年前になってしましますが、本誌第3号に所収されていますので、ご笑覧下されば幸いです。

現在は、朝8時45分の中高生たちの礼拝式から始まります。ここでは、司会(式)は、子どもたちが順番で担います。説教は、ほぼ毎週わたしが担います。他に3人の教師たちが列席し、平均、7~10名ほどの子たちが、30分の礼拝を捧げます。

説教の終わり頃になると、ロビーには既に、次の礼拝式を待つ、平均20名余りの小学生以下の子どもたちが集まり始めています。同じテキストから、小学生のためにも語り込みます。ただし、そこには、幼児たちもおります。わたしの技量が足らず、その子たちの現実に語りこむことは、正直、お手上げ状態です。しかし、説教の言葉は分からなくとも、礼拝式の中に、彼らの居場所はあると考えております。

私どもの教会では、カテキズムを工作によって表現いたします。教師である司会(会)者は、「カテキズム工作・図・絵」を見せながら、子どもたちに「答え」を読ませたり、言わせます。時に、自分の言葉で、カテキズムの解説を短くします。このような仕方は、幼い子どもたちにも、興味と関心を引き付けるのに役立つように思います。(説教学的に申しますと、絵やそのような類を利用することはふさわしくありませんが、教師方には、許されると思います。)

毎週、週報が作成され、通信や、式次第と暗唱聖句と子どもカテキズムなども書き込まれています。賛美は、教会員がつくったものを中心に、子ども向けの賛美を歌います。司式者が祈り、皆で、主の祈りを唱えます。その後、カテキズムをし、暗唱聖句も行います。説教者が聖書朗読をし、説教します。説教が終わると、すぐに分級に移動します。つまり、献金はありません。説教後の賛美、頌栄もありません。その意味では、礼拝式が分断されている状況とも言え、なお検討の余地があります。

第一主日には、お誕生会をし、誕生月の子らのために、牧師が祈ります。子どもたちからの質問を求め、答えてもらいます。担任以外の教師たちも、その子を知るよい契機となります。

私どもの子ども礼拝式は、お世辞にも、模範となるとは言えません。しかし、努力を重ねています。最近では、少しずつ、賛美の声も全体に大きくなってきました。もし、私どもの礼拝式に、良いところがあるとすれば、司会者の努力にあると思います。子ども礼拝式は「式」ではあっても、子どものためのものですから、子ども達の現実に即す、自由さ、聖霊のお働きを信じて、主イエス・キリストを賛美し、感謝し、頌栄的な雰囲気をつくり出すのか、それにかかっているように思います。

そしてそのためにこそ、教師会があるのです。教師会は、礼拝式の主宰者、中核です。この交わりが、子どもたち同士にも波及し、子どもたちを捕らえ、ひきつけるのです。この貧しい論考をたたき台にして議論を深めていただければ幸いです。毎主日毎主日、新鮮な、生き生きとした礼拝式をと、共に励んでまいりましょう！(原理原則に紙数がとられ、具体例をきちんと挙げられませんでした。連載計画を立て直し、最終回に、具体例、提言などをまとめたいと考えています。「改革派の牧師は、言うだけで……」とのご批判に答えたいと思います。皆様の今月の営みの上に祝福を祈ります。)

第六回 礼拝と説教（作成）

相馬伸郎（『教会学校教案誌』編集長）

誰が説教を担うのか（説教の重要性）

最初に、第四回の学びを思い起こしてください。そこで明らかにされたことは、日曜学校の歴史は、信徒のボランティアな奉仕によって担われてきたということです。しかし、今回、あらためてその現実から検証してみたいと思います。皆様の教師会には、当然、牧師が出席しておられるでしょう。しかし、実際に日曜学校の奉仕者としての関わりについては、いかがでしょうか。おそらく、少なくない教会が、その大部分を日曜学校教師たちが担っているのではないのでしょうか。また、その逆もあるかもしれません。

しかし、改革教会は、「キリストの臨在」を、①正しい説教がなされ、聴き従われること。②正しく聖餐が祝われる（執行され受領される）こと。この二点に見ます。そこに真の教会があることを信じています。それゆえ、この二つを担う、教会の仕え人を立てるため、古より、教会は職務制度の整備に力を注ぎました。候補者に訓練を施しました。私ども日本キリスト改革派教会は、教師候補者に、通常、3年余りの訓練を施し、試験を課した上、憲法に従って任職し、説教と聖礼典を執行させます。どれほど説教者を養成することが教会にとって最重要課題であるかがお分かりいただけるかと思えます。

ですから、もしも、私どもの心のどこかで、「子どもの説教（『程度』）であれば、牧師でなくても担える」という思いがあれば、実は、その人の教会理解そのものを改めて問い直さなければならないほどのものだと思います。（これは、教師たちへの言葉であるより、むしろ、牧師たちへの言葉であるにご理解くださいませ。）

洗礼受領者（信仰告白者）は説教者になれる

さて、ここまで読まれますと、「そうか、牧師先生が説教をしてくださればよいのだ。私たちは、出る幕はないのだ。ああ、助かった……。」とお考えになられる方。反対に、「牧師しか日曜学校の説教はできないなんて、おかしい。自分は、使命感と召命をもって奉仕しているのに！」とご立腹なさる方もおられるかもしれません。

教会の職務に就くための絶対条件とは何でしょうか。それは、イエスを主と告白し、洗礼を受けて教会員となることです。ローマ・カトリック教会では、「叙階の秘蹟」と言い、ミサを執行する職務者は、信徒と違う存在（身分）になります。しかし、私どもは、そのような秘蹟を認めません。私どものような牧師も、礼典としては、洗礼以上のものを受けてはおりません。つまり、洗礼を受け、イエスを主と告白したあなた、しかも日曜学校教師として就任したあなたは、間違いなく説教する資格をそこで与えられているのです。

横道にそれますが、議論を深めてまいりますと、このような問題も見えて参ります。政治規準第二十章では、「説教免許」に関する条項が扱われます。教会の公的礼拝における説教は、中会の試験を課し、免許を取得しなければならないとするのです。それなら、日曜学校の「説教」は、どうなるのでしょうか。やはり、信徒には説教ができないのでしょうか。女性信徒であれば、なおさらのこととなるのでしょうか。

本誌は、創刊以来、説教展開例と表記し、力を注いで参りました。子ども礼拝式は、キリストの臨在したもう真の礼拝であり、それは、「お話」によってではなく、御言葉の解き明かして

ある説教によって成し遂げられるからです。

説教作成までの道のり

ここで挙げるのは一例です。一人ひとり、説教作成のプロセスは違っていると思います。牧師たちもまた、固有のプロセスを長い年月をかけて獲得するものです。また、そのプロセスそのものを新たにさせられるような厳しい自己変革をも求めているのです。ですから、教師歴の深淺によって、説教作成の道のりが異なってくるのは当然かと思えます。

これまでの議論は、遠回りのようですが、説教作成に至る道のりの「大前提」を確認するために記してまいりました。説教奉仕の務めの重み、厳かさを常に、真摯にわきまえていただきたいのです。説教者が、「土の器でしかない私に、神が、ご自身の言葉を語ることを許し、お命じくださっている。罪人である私が、神の言葉を語る口、聖霊の通路、奇跡の御業の証人とされている」という、畏れおののく「自覚」「姿勢」を抱いて、子どもたちの前に立ち、語るとき、おそらく、最もリアルに彼らに生ける神を指差すことになると思います。

以下、具体的に記して参ります。

①祈禱

蛇足ですが、説教奉仕のある週であろうとなかろうと、日曜学校のために祈ることは不可欠です。これなしに、いかなる奉仕も実を結びません。自分の能力を根拠にして神礼拝に奉仕することは、偶像礼拝でしかありません。

何を祈るのでしょうか。まず、子どもたちのためです。そして、子どもたちを顧みてくださる主イエス・キリストを仰ぎ見るのです。そのとき既に、子どもの心を「読む」ことと、神の御心を「読む」こと、つまり説教のまさに急所となる部分の作成が始まっているのです。

②新共同訳聖書の当該テキストを読む

仕事、学業に追われ、忙しい教師の現実を踏まえるとき、まず、とにかく、教会で採用して

いる日本語の聖書をよく読むことです。そこで、大切なことは、まず、焦らないことです。つまり、何を教えてあげようか、何を伝えようかと、答えを出すことをここではしないのです。むしろ、一人のキリスト者として、御言葉の恵みを受けてください。自分が、どのような慰めを受けることができたのが大切なのです。祈りつつ、「自分のために」神との対話を深めて下さい。

③「子どもカテキズム」を読む

現在は、「子どもカテキズム」のカリキュラムですから、教理説教となります。弊誌は、教理をできうる限り、生き生きと物語るようにと、説教執筆者にお願いしています。そこで、テキストは、基本的には福音書における主イエス・キリストの御業を中心にして選ばれてまいります。与えられたテキストと教理条項との関連を考へることが求められます。(編集者は、日曜学校教師方に、大変な神学的素養の研鑽を強いることになっていることに、申し訳ない思いを抱いております。教理条項とテキストとの関係性を明白にすることが困難な場合もあると思うからです。)

④教案誌の「単元のねらい」、「聖書研究」、「カテキズム研究」を読む

いよいよここで、弊誌執筆者たちの文章をお読み下さい。もし、不明の点があれば、牧師に尋ねることも大切です。時間が許されれば、信頼でき、自分に使いやすいその他の解説書、「注解書」「聖書辞典」「教理解説書」などをお読みくださったらなお良いと思います。

この作業の最後の部分で、「説教展開例」をお読みくださる方もおられるかと思えます。それが助けになるのであれば、それで構いません。しかし、それでご自分の説教作成が終わってしまうくらいに影響を受けるのであれば、次の段階まで読まないほうが良い場合もあります。

⑤説教原稿づくり

②の作業で、与えられた恵みの言葉、メッセージは、③、④を通して補強され、あるいは修正

されたかもしれません。そのようにして、ここでは、子どもたちにどうしても伝えたい「福音」を、鮮明にする作業を行います。その過程で、子どもたちにイメージが膨らむような豊かな言葉の連なりになるようにめざします。さらに、実際の子どもたちへの「語りかけ」として整えて行きます。

説教は、語りかける、語りこむ行為です。必然的に対話が生じています。しかしそれは何も、説教のなかで、「君はどう思う？」と質問することを求めているわけではありません。説教全体が対話なのです。説教原稿をつくるこの過程でまさに彼らと対話するのです。(そうならば、ふさわしい説教者が、子どもたちと向き合っている人、つまり日曜学校教師こそが最適任者であることも分かっていたかと思いますが。その意味で、もしも、日ごろ、子どもとまったく向き合っていない(祈っていない)牧師が、そのときだけ、説教するようでは、真実の意味での説教とはなりがたいのです。)

この作業のなかで、「説教展開例」をも参照し、ここから学んでください。説教とは、慰めの言葉です。福音こそが子どもたちの現実を慰め得るのです。説教者は、福音の主体である主イエス・キリスト御自身がここに臨在しておられることを生き生きと物語り、証します。また、説教は、福音が生み出す「倫理」をも語ります。しかし、キリストの現臨が鮮明にされ、神のみ前に出させられる説教(礼拝式)であれば、ことさら、倫理的勧告をしないでも良いのです。いずれにしろ「福音」とこの伝えたい、分かって欲しいという「思い」さえあれば、それは、必ず子どもに共鳴します。

説教は、できうる限り完全原稿に整えることをお勧めいたします。それは、語る言葉を厳密に吟味させる修練になるからです。

⑥説教中

説教原稿の作成が終われば、正直、一安心なされると思います。しかし、問題は実際に語られ

る説教にあります。原稿をただ読みあげるだけでは、子ども礼拝式ではほとんど通用しがたいでしょう。子どもの目を見て、語る必要があります。大抵の場合は、子どもの注意力、関心をひきつけることはできないからです。(ただし、かつて、弊誌展開例をほぼそのまま読まれた方がおられましたが、子どもたちはよく聴いていました。展開例に説教者が心から共鳴していれば、それも十分に可能なのです。)基本は、(精神安定上)完全原稿を傍らに置きつつも、それに頼らないことです。むしろ、その場で与えられて行く言葉を語ることです。原稿をすべて暗記する達人もおられるかもしれませんが、むしろ、伝えようとする枠組みをしっかりとさせ、メモ程度を携えて語るの方が良いのです。その意味で、経験の浅い教師であれば、背伸びせず、「お話」の基本である「起承転結」に基づいて説教を作成することから始めることで、十分であると思います。

最後に説教は、日曜学校教師会の作品です。孤独な作業ではありません。つまり、教師会の交わり(祈り、共同研修)に支えられて準備した奉仕担当者が語るのです。皆で、奉仕者のために祈ることが不可欠です。祈っている人は、実を乗り出して聴くでしょう。その教師たちの姿勢が、子どもたちにじわじわと伝わるのです。

⑦説教後

教師会で、ときに、牧師の指導を受けることも大切です。説教は、共同の作品であり、公的な言葉です。ですから、謙虚に牧師や仲間たちからの指導を仰ぐことが大切です。

推薦図書

加藤常昭、『子どものための説教入門』、西部
公会教育委員会、2001年

CS で性について話そう

長谷川はるひ（関キリスト教会日曜学校教師）

教会学校で性について話す、これは、かなり緊張します。年齢が低い子どもに、どこまで話していいのか？ 性的な興味を持ち始めている子どもに、どんな風には話せばいいのか？ 「性について話す」ことそのものが、自分にとっても生徒にとっても「性的な刺激」となって有害ではないか？ いったい自分は性について誰かに教えることができるのか？ そもそも自分は性について何か教えられて来たのだろうか？

こんな???が飛びかかってしまう先生たちもいると思います。???以前に、単純に恥ずかしいと感じる先生たちもいるでしょう。

そんな先生方に、一つの提案をしたいと思います。あくまで提案ですので、そのまま鵜呑みしないで吟味選別して、自己責任においてご利用いただければ幸いです。

性とは、

- ①創造された時には極めて良かった。
- ②墮落によって破壊された。
- ③あがないによって回復された。
- ④終末に向けて完成されつつある。

ということ、話していただきたいと思います。

発達年齢によって、どのように話すのかは異なります。ここでは、大きく「性についてまだ知らない時期」と「性についてある程度興味や関心がある時期」の二つに分けて記します。

1. 年齢の低い子どもたちへの話し方

低学年の子どもに、無理して性について話そうとする必要はありません。たとえば、ヨセフとポティファルの妻の話、幼稚科や小学科低学年に話すなら、「いっしょに悪いことをしましょう」「いやだ、悪いことなんかしない」で、十分

です。「悪いこと」の内容なんて、質問されるまでは説明する必要はありません。

〈①創造された時には極めて良かった〉については創世記2章18～25節を、〈②墮落によって破壊された〉についても同3章を、難しい解釈なしでそのまま話せばいいのです。余分な説明ぬき、聖書の物語そのままを、適当なテンポと間の取り方、声の大きさ、言葉の抑揚、顔の表情、身振り手振りで物語るとき、子どもたちは話の中に引き込まれて、あたかも自分が体験したかのように、聖書の物語を追体験します。「神様が人を男と女に創造されて、二人は一体でよかったなあ」「どうしよう、神様との約束を破って、とんでもないことになってしまった!」と、子どもが心から思えたら、大成功。

〈③あがないによって回復された〉については、「どうしよう、困ったねえ。でもイエスさまが十字架について復活して下さったから大丈夫だよ」と請け合っただけで十分です。どのように大丈夫なのか、ということは問題ではありません。それは、言葉で説明されることではないのです。毎週CSで心から歓迎されることによって、子どもが感じ取る安心感・安堵感が「大丈夫」の実現なのです。

だから、そのようにイエスさまによって救われた私たちだから、神様を知らない人々の中で神様のものとして「聖別されて生きる」ことを命じる戒めを守るのです。

「姦淫してはならない」という戒めを毎週唱えるとき、このようなイメージを年少の子どもたちが持つことができたなら、その子どもたちは〈④終末に向けて完成されつつある〉性を生きていると言えるでしょう。

2. 性的な興味を持ち始めているかもしれない年齢の子どもたちへの話し方

性について、ある程度理解できる年頃の子どもたちに話すのは、さらにまた困難を感じます。

まず、どの程度まで知っているか、確認することから始めてはいかがでしょう。

〈①創造された時には極めて良かった〉について、聖書の言葉の意味内容をいっしょに考えることによって、どの程度、性的な事柄について知っているか、興味を持っているかを知ることができます。また、この年齢になると、言葉を言葉で説明することが可能になります。「二人は一体となる」という言葉なら「一心同体」「ベターハーフ」「伴侶」などという別の言葉で言い換え、そのイメージをふくらませましょう。

〈②墮落によって破壊された〉について、現代の性に関する諸問題を話し合うことができます。ここでも、情報収集をしようと思って子どもの話を聞くといいです。その子にとって、その子が違わされている「この世」において、性の問題がどのようなものであるのか、どのような問題を認識しているのか、あるいは認識していないのか。その子が問題だと思っていないものが、実は聖書に照らすと問題である場合もあります。それらを聞き出せたらいいですね。

〈③あがないによって回復された〉について、出エジプト記の十戒からレビ記、申命記などを、まず先生方が丁寧に読まれることをお勧めします。「姦淫してはならない」という戒めについて、レビ記や申命記では、細々とした細則が述べられます。「以上のいかなる性行為によっても、身を汚してはならない。これらの行為によって、この土地は汚され……この地はそこに住む者を吐き出した」（レビ記18章24～25節）など。

ハイデルベルグ信仰問答にしてもウェストミンスター信条にしても、第七戒の要約は「聖潔」です。なるほど、「姦淫してはならない」という戒めは、私たちクリスチャンが神様を知らない人々の中で神様のものとして「聖別されて生き

る」ことを命じる戒めなのだな、と納得です。

高校科の生徒なら、いっしょに聖書を読んで納得感を共有できたらいいですね。

中学科は、ハ信仰問答 Q108、Q109か、ウ大教理 Q138、Q139（ウ小教理 Q71、Q72より、大教理の方がお勧め）を学ぶと、ストレートに理解してくれると思います。

小学科高学年は……「イエスさまが十字架について復活して下さったから大丈夫だよ」でいいかも。「どう大丈夫なの？」って質問してくれたら嬉しいなあ。もちろん、「どう大丈夫なんだと思う？」って聞き返して、いっしょに考えるんですけど。小学科高学年の子どもが考える「あがないによって回復された性」って、どんなんでしょうね？ わくわくします。

〈④終末に向けて完成されつつある〉性について、終末の時代にあって、自分は、具体的にどのように「与えられた性」を生きるのか……ということを、如何にして聖書に聴いていくかを話せたらいいですね。

私たちは、人生のある局面では聖書に聴き、別の局面では聖書には聴くべきことがないと考えてしまいがちです。そして、性の問題を、後者に分類しがちです。しかし、性の問題こそ、聖書に聴かなければ、罪ある人間にはまったく分からないのです。もちろん罪ある人間は、聖書に聴くという点においても間違いを犯します。だからこそ、CS 奉仕を通して子どもたちに寄り添う機会を与えられた私たちが、聖霊なる神様のお働きを心から信じましょう。

そして、子どもたちと共に祈りましょう。「私の罪を赦し、聖なる者とならせて下さい」と。

〈執筆者プロフィール〉

長谷川はるひ

中3、中2、小3の母。養護学校、小学校の特別支援学級などで産休・育休・病休の補充講師を勤める。日本キリスト改革派関キリスト教会日曜学校教師。著書に『のんちゃん&おおかあさん 性について話そう』（あるむ、2002年）がある。

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

テキスト マタイによる福音書4章1節～11節

(1) 三つの誘惑

このところに三回にわたって主がサタンに誘惑されたことが記されています。その誘惑は、出エジプトにおける荒野でのイスラエルが直面した試みを想起させます。イスラエルはこの試みに直面した時、ことごとく失敗しているのです。それに対して主イエスは、確固たる信頼を持ってその試みに応じ、神のことはどのような存在であるのかを明らかに示されたのです。

(2) 第一の誘惑

第一の誘惑は空腹という肉体的な苦しみの中で襲ってきます。出エジプトの時、荒野においてイスラエルの空腹は神様からマナが送られることによって満たされました。マナが与えられた事実は神様の一方的な恩恵です。しかし、マナが与えられた背景には、イスラエルのつぶやきがあるのです。そのつぶやきは、全てを与えてくださる神様に対して、信頼していないために出てきたのであって、彼らの不信仰から出たものなのです。

しかし、主イエスはここで「人はパンだけで生きるものではない。……」との言葉をお語りになります。それは人が食物によって生きているのではなく、神様の御意志によって生かされているのであることを示しているのです。人が生きるも死ぬも神様のまったくの御意志によるのであるということです。この事実は主イエスが完全に神様により頼んでおられることを明らかにしています。

(3) 第二の誘惑

第二の誘惑は神殿の屋根の端から飛び降りて神様を試せというものでした。主が申命記6章16節を引用なさっていますが、このメリバの出来事は出エジプト記17章1節～7節に記されています。そこでイスラエルは「『主は我々の間におられる

のかどうか』と言って、モーセと争い、主を試した」のです。

しかし、主イエスは神様を試みることを拒絶なさるのです。それは、神様に対して信頼をしていなかったからではありません。むしろ、神様を尊敬し、心から信頼していたからこそ、そうしなかったのです。なぜなら、神様を心から信頼することは、神様を試みるというような、神様を操作しようとすることを排除するからです。

(4) 第三の試み

第三の試みは偶像礼拝です。イスラエルは出エジプトのときに限らず、度々この試みにあい、そして偶像礼拝に走って行きました。

しかし、主イエスは偶像礼拝を完全に拒否し、第一の者を第一としたのです。つまり、「神である主を拝み、ただ主に仕え」られたのです。

(5) 真の神を神とする

このところで主イエスが遭われた誘惑の根本は、神様を神様以下の方として取り扱うということなのです。つまり、神様を人間の思い通りに操作できるものとして取り扱うことだったのです。この誘惑は日々私たちも遭っている誘惑です。私たちは全てを与えてくださる神様に対して不信を抱くことがあります。苦しみの中で神様の助けを疑問視することがあります。偶像礼拝の誘惑は常にそこら中に散らばっています。そのような中で、神様のみを礼拝し、神様だけに仕えることは非常に難しいことです。

しかし、主は私たちと同様にその誘惑に遣い、神を神とする戦いに勝利してくださったのです。そして、その勝利してくださった方が、私たちの大祭司として、この方に結ばれている私たちを執り成して下さっているのです。 (春名義行)

カテキズム 子どもカテキズム問43,44

子どもカテキズム

問43 第一戒は何ですか。

答 「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」、です。

問44 第一戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 私たちの真の神さまだけを心から礼拝しなければならない、ということです。

これをもっとも大切な戒めです。

ですから、私たちは喜んで礼拝をささげます。

証拠聖句 マタイ4:10、歴代上28:9

参考教理問答 『ハイデルベルク』94、『ウ小教理』45～48

1. 神を知り、神を認める

第一戒は、第二戒から第十戒までの全ての戒めの土台です。

第一戒は、偽宗教、迷信、多神教などの言葉によって表される一切の偽りの信仰に対して、真の神のみを拝すべきことを要求します。ここでは、真の神以外のものを神として礼拝することを禁止しています。

私達の先祖アダムが堕落したために、神との健全な交わりが絶たれてしまいました。神は、人の心に「永遠を思う心」(コヘレト3:11)を与えておられます。人は、生まれながら神を求める心を植えつけられています。しかし、罪によって、創造主なる神を神として認め崇めることができなくなりました。真の神以外の異教の神々、死者を礼拝したり、迷信行為を行うことはもちろんのこと、金銭万能主義、自分の欲望のままに生きようとする享楽主義など貪欲も、偶像礼拝です。(コロサイ3:5)

「わたしをおいてほかに神があってはならない」とは、「わたしと並んで」と「わたしに逆らって」という二つの意味があります。世には様々な神々が存在しています。しかし、それらをイスラエルの神、まことの神と同じ水準においてはいけないのです。さらに、神の御意志に逆らって、他の神々を神としてはならないということです。多く

の神々と呼ばれるものが存在していても、それらは人間が想像して作り出したものですから、無数にあるように見えて実は、なきに等しいものなのです。神ならぬもの、被造物を神とし、崇め、礼拝してはいけません。

ローマ帝国では、皇帝が最高神として礼拝されていました。かつて日本でも、天皇を現人神(あらひとがみ)として崇め、礼拝の対象としていました。いくら世界を支配下におく征服者であっても、神と並んで崇めたり礼拝の対象とすることはできません。

2. 神礼拝と神の栄光

私達は創り主なる、まことの生ける神だけを神として礼拝し、神の栄光をあらわさなければいけません。

私達が、イエス・キリストを知り、信じるようにされた目的は、私達がもはや自分のために生きるのではなくして、私達の罪のために死んで復活して下さった方のために生きるためです。私達にとって、主の日の礼拝だけが礼拝ではありません。私達は、日常生活の全ての領域において、神を喜んで、神に仕える生活、神の栄光をあらわす生活を送らなければいけません。神はあらゆる場所で、あらゆることを通して仕えられるべき御方なのです。(久保浩文)

テキスト マタイによる福音書4章1～11節
カテキズム 子どもカテキズム 問43,44

〔単元のねらい〕

主の戒めの言葉が、実は私たちを生かす言葉に他ならないことを学び取りたい。そのためには、戒めの言葉を知らずにいることの悲しさを思い巡らす必要もあるだろう。口を広く開けよ、と命じておられる主の招きを覚えよう。

「立ち返って、平安を得よ」

今日から十戒の一つ一つの戒めの言葉について学んでいきます。

そこで初めに、なぜ神様は私たちに戒めの言葉、つまり「あれをしなさい」とか「これをしてはならない」と命じられるのかを考えておきましょう。誰でも、あれをせよ、これをせよ、それをするな！と命じられるのは嬉しくありません。何だか不自由な囲いの中に押し込められるように感じられるからです。しかし、神様は私たちを縛りつけるために戒めの言葉を与えられたのではありません。反対に、自由と平安を与えるためだったのです。

例えば、三人の羊飼いと羊のことを考えてみましょう。一人目の悪い羊飼いは、羊がどこへ行ってもお構いなし。囲いの中に入れることは考えもしません。そのために、群れからはぐれて谷底に落ちてしまう羊や、狼に襲われてしまう羊が次々と出てまいります。二人目の羊飼いや羊の世話も嫌いです。そこで、小さな囲いを作って羊たちを閉じ込めてしまいました。羊たちは窮屈で仕方ありません。ところが、三人目の良い羊飼いは違いました。羊たちを集め、夜ともなれば囲いの中に呼び入れます。もちろん、一匹一匹のことを心に掛けています。羊飼いですから囲いの中は広々です。そして、この中にいるのなら迷い出してしまう心配はいりません。狼が近付いて来ても入ることは出来ません。これで羊たちは伸び伸びとして安心です。そう、この囲いには良い羊飼いの優しさがぎゅっと詰まっているのです。

同じように、真の神様は迷い出やすい私たちを安全な場所にとどめ、また外敵から守るために戒めの言葉を下さったのです。ですから、戒めの言葉にとどまるならば、恐れからの自由と安らぎを得ることが出来ます。

そこで今日は、第一戒が私たちの心に自由と平安を与える言葉であるという視点から、これを学んで行きましょう。

まず、第一戒が私たちに求めていることについて確かめておきましょう。第一戒が求めていること、それは第一に、神でないものを神とするあらゆることを避け、拒否することです。神々と呼ばれるもの（偶像）をあなたの神としてはなりません。第二に、唯ひとりにいます真の神を正しく認め、この方のみ依り頼むことです。

では次に、使徒言行録17:16～23を開けてみましょう。ここには、第一戒を知らずに生きていた人々、囲いの外にいた人々が出てきます。場所はギリシアのアテネです。当時のアテネは最高の文化水準を誇る世界の文化都市でした。芸術・建築・政治あるいは哲学の面でも、どの分野をとっても第一級の世界に名だたる文化都市でした。ところが、このアテネにまた別の顔があったのです。至る所に偶像があるという別の顔です（16節）。偶像崇拜のあるなしは、文化水準とは関係がありません。そして、アテネの例が証明しているように、人々は常に依り頼むものを求めずにはられないのです。

さて、造られた神々の像は、金や銀や石など高価な材料で出来た見事な物ばかりです。人々は、それらの像に向かって手を合わせ、頭を下げます。では、それらの像はアテネの人たちの心を満たすことが出来たのでしょうか？ いいえ、出来ません。パウロは言っています。「道を歩きながら、あなたがたが拜むいろいろなものを見てみると『知られざる神に』と刻まれている祭壇さえ見つけたのです」(23節)。何と、町は偶像で一杯であるにもかかわらず、それでもまだ「知られざる神に」と刻まれた祭壇まであったのです。つまり、これまで人々には知られていない、それ故に人間によって崇められたことのない、しかし、見逃されるべきではない神々がおられるかもしれない、という訳なのです。もしも、これまでに造られたどの神々によってでも、心満たされているのなら「知られざる神に」という祭壇が造られるはずはありません。人々の埋められることのない不安が、この祭壇を造り出させていたのです。

そう、町中を偶像で一杯にしても人々の心は満たされず渴いたままなのです。それは丁度、群れからはぐれた羊のようです。家に帰ることを切に願って思い付く限りあっちの道、こっちの道と急ぎます。ところが、ますます迷い込むばかりで帰る道は見つかりません。日はとっぷりと暮れ、狼の遠吠えが聞こえ始めてきます……。真の父の家から迷い出て、孤独と不安に押し潰されそうになっている羊、それこそアテネの人たちばかりでなく、イエス様のもとに帰り着くまでの私たちの姿であるのです(ペトロ2:21～25)。

その羊のようにさまよっていた私たちに対して主なる神様は言われます。「あたたは、わたしの他になにものをも神としてはならない。刻んだ像

ばかりでなく、あなたが依り頼む一切の混じりものを取り除きなさい！」。これは「わたしの与える自由と平安の囲いの中に立ち帰れ」という神様からの招きの言葉に他なりません。神様は言われます。「あなたは、わたしのほかに他の神々を持つ必要が全くない。わたしがあなたを救い、あなたを祝福し、良きものの一切をわたしがあなたに与えよう」。真の神様は人とは違います。無責任なことにはなさいません。そして、イエス様はご自身の十字架によって、この招きの言葉がどれほど確かであるかを明らかにして下さいました(ローマ8:31～34)。ですから、私たちは砕かれた心でこの第一戒の言葉にとどまる時、平安を得ます。たとい状況は悪くとも安らぎと希望を持つことが出来ます。

最後に詩編81編を開いて終わらしましょう。

この詩編を通して、主はみ民に対して、偽りの神々を捨てて、ご自身にのみ聞き従うことを命じておられます。そして、次のように約束して下さいました。「わたしが、あなたの神、主。あなたをエジプトの地から導き上った神。口を広く開けよ、わたしはそれを満たそう」(11)。

口を広く開ける、それは何とも締まらない、無防備な格好です。これでは、じたばたすることも出来ません。またちょうど、餌を運んでくれる親鳥を雛が全く信頼するように、相手への信頼がなくてはとっても出来ません。そのひたすらなる信頼を主は求めておられます。そして口と心を広く開ける者に対して約束しておられるのです。「わたしがそれを満たそう」。

感謝と喜びをもって、主なる神様にのみ、従って行きましょう。(小野田雄二)

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記20章3節

あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。

〈ねらい〉

わたしたちに絶対的な存在であるお方がいらっしゃることを知り、唯一、真の神様を礼拝することを学ぶ。

〈展開例〉

今日から「十戒」の学びを始めましょう。

「十戒」は、神様がイスラエルの人たちに神様の心に従って生きるように教えてくれた「10」の教えです。十戒は、神様を心から愛し、お友だちや周りの人たちを愛して生きることを教えてくれています。十戒の教えてくれていることは、わたしたちにとって怖くて難しいことではありません。わたしたちが、聖書の言葉を心の中にしっかりと信じて生きていくことなのです。

では、第一戒では、神様がどんなことを教えて下さっているのでしょうか？

神様は、「わたしのほかに、だれも神としてはいけません」とおっしゃられました。神様はただ一人しかおられないのです。わたしたちのことをすべてご存知で、導いて下さるのはただ一人のお方であると言っています。神様が何人もいて、毎

週違う神様に礼拝をおささげしていたらなんかおかしいですね。神様は、ただお一人。全宇宙の中、この世の中で本当に正しい神様は一人だと聖書は教えてくれています。

その神様を、毎週の教会学校で礼拝することがとても大切なことです。神様を礼拝しないことやほかの神様を礼拝することは、神様がとてもお嫌いになることです。わたしたちがただ一人の神様を心から礼拝するときに、神様はわたしたちのことを本当に喜んで下さるのです。

わたしたちが神様のことを選ぶのではなく、神様がわたしたちを選んで下さいました。自分のわがままのために生活するのではなく、わたしたちのために命までも捨てて愛して下さいました神様に心から礼拝をおささげしていきましょうね。

〈お祈り〉

いつもわたしたちを愛して下さる神様。今日は、ただお一人の神様を礼拝することを学びました。これからも、神様のことを喜んで礼拝出来ますように。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

キーホルダーを作ろう！

〈用意するもの〉

★シール・自分で書いた糸・貝・きれいな石・ビーズ・葉っぱなど
ビニール袋・ボンド・ひも

〈作り方〉

1. ビニール袋の上にボンドをぬる



2. ボンドの上に飾りつけ！
3. ボンドが温いたら、ビニールからはがし、ひもを付ける。



* ボンドが温くのに時間がかかるので
完成は 次週に持ちこるのも一つの手です。

〈聖書のお話を確認してみよう〉

- ① イエスさまは何日間食事をしなかった？ (→40日間)
- ② その後、悪魔の言うとおりにすぐにパンを食べた？ (→食べなかった)
- ③ イエスさまはパンではなく何で生きると言われた？ (→神さまの言葉)
- ④ イエスさまはこの後、悪魔の言うことに従った？ (→従わなかった)
- ⑤ イエスさまが、ただ神さまを拝むべきと言うと悪魔はどうなった？ (→離れ去った)

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

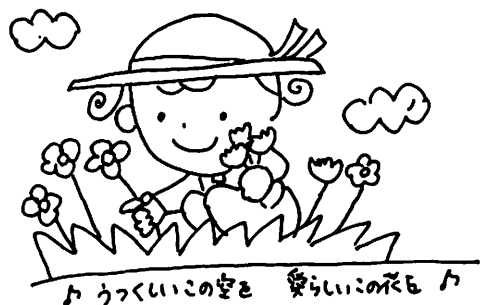
- ① 神さまはたくさんいる？ (→真の神さまだけ)
- ② 真の神さまのことを、何で知ることができる？ (→聖書)
- ③ 聖書の神さまはどんなことをしてくださった神さま？ (→世界を造られた、イスラエルの人たちをエジプトから救った、イエスさまを与えてくださった、など)
- ④ 神さまのことをただ知っているだけでいい？ (→心から喜んで礼拝する)

〈考えてみよう〉

日曜日、教会に来ることを楽しみにしているでしょうか。礼拝中、早くお友だちと遊びたいなあとか、お昼ご飯まだかなあ、とか思うことはあるでしょうか。教会には楽しいことがいっぱいあります。でも、一番大切なことは、神さまの御言葉を聞いて、神さまを礼拝することです。イエスさまは、四十日もの間、荒野で過ごされ、何も食べませんでした。淋しくなかったでしょうか。お腹がどれくらいすいていたでしょうか。考えてみましょう。でも、そのようなときも、イエスさまは、神さまの御言葉が一番大切だと言ってくださいました。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。今日も教会に来ることができてありがとうございます。聖書を読んで、教会でお話を聞いて、本当の神さまを知ることができてありがとうございます。これからも、神さまだけを、心から礼拝することができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

まことの神のみを神とすることを教える。

偶像として二つの面から示すことが出来る。ひとつは、日本の宗教土壌から、八百万の神々に対して唯一の生けるまことの神を信じること。もうひとつは、お金、地位、名誉など欲望のあくなき追求も偶像となること、神をさしおいて一番大切にすることがその人にとって偶像の神となること。後者の意味での偶像崇拜が、主イエスがお受けになられた荒野の誘惑の場面での、第三の誘惑と関わるであろうか。

〈展開例〉

() を子どもたちが答えるように導いてあげるとよいでしょう。

○世界中に、そして日本にもいろいろな宗教があり、たくさんの神々がまつられています。どんなものがありますか。知っているものをあげてみよう。子どもたちと一緒に挙げてみるとよいでしょう。出エジプトの時代でも太陽神などがあったことを話してもよいでしょう。身近なところでは？(お地蔵さん、仏像、神社、山の神様、天照大神などなど)

○それらは(人間)がつくった神々です。(見る)ことも(聞く)こともできません。それらは本当の神さまでは(ありません)。

○(聖書が)語る神様は(人間)がつくった神ではありません。神様が(天地万物、宇宙も、地球も、人間も)をおつくりになりました。(生きて)(働いておられる)(ただおひとりの)まことの神様です。

○本当の神様ではない、人間が考え出した神々のことを何と言いますか……(偶像)

○(偶像)には、人間がつくった物、(自然)、(人間)を神として祭ったり拜んだりすることがあります。ほかに、本当の神さまと同じくらい大切にしたり、本当の神様より大事にするものがあれば、それがその人にとって神(偶像)になってしまっています。

○偶像にはどんなものがありますか……一緒に考えてみましょう。(お金、地位、名誉などなど)

○これらを(中心)に、あるいは(第一)にして生活することは、それらの(偶像)を(礼拝する)ことになります。本当の神様より他のものを大事にしたらもうかる、繁栄を手に入れることが出来るように思えるときもあります。でもそれは悪魔の誘惑です。

○本当の神様を神様とすることが十戒の第一戒で命じられていることです。神様を中心に生活することが大切です。……どんなことが考えられますか 先生と一緒に考えてみよう。

・本当の神様だけを(礼拝)する。

・神様の(言葉・聖書の言葉)を信じる。

・神様を(第一)に大切にする。日曜礼拝をこれからも大切にする。

〈祈り〉

天の神様、あなただけが世界と私たちをおつくりになった本当の神様です。あなたはいつも私たちと一緒にいて下さり、守って下さっています。だから、あなたのことを想うと嬉しくなります。私たちがあなたを忘れることがありませんように、そして何よりもあなたの御言葉に従うように、私たちに導いて下さい。

【目標】

第一戒について学ぶ。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→子どもカテキズム問43～44を生徒と読む。

【ポイント】

第一戒は、以下九つの戒めを含めた十戒の中で、最も根本的な戒めである。わたしたちの神は、唯一の主のみ、私たちを愛し、エジプトの奴隷の家から導き出してくださったこの方のみである。このことは私たちが縛るのではなく自由にする。私たちの人生を決めるものは、それは受験でもなく、入社試験でもなく、上司の言葉でもなく、友だちの言葉でもなく、自分に語られる神様のことばである。自分が自分にとっての神として自分の人生を握っているのではなく、自分の人生、生まれてから死ぬまでのすべてのことは、神様によって握られているのである。

第一戒は、神に委ねて、自由に、しかもほかの

何ものにも左右されずに、強く、そして正しく生きる信仰者を生み出す力強い戒めであり、励ましである。特に日本に住むキリスト者にとっては、第一戒は最もよく心に明記しなくてはならない戒めである。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての第一戒を守って生きるということは、どのようなことなのか？それを生徒と分かち合う。

Q. イエス様はその神様としての力で、悪魔を蹴散らすことも簡単にできましたと思います。しかしイエス様は、その様な仕方では悪魔の誘惑に勝たれたのではなく、聖書の言葉を使ってによって勝利されました。なぜでしょう？

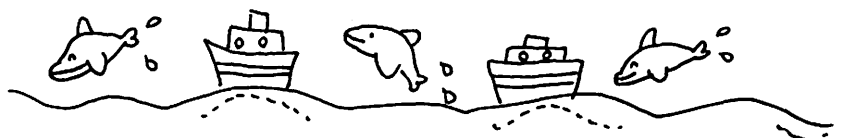
Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 聖書の神様以外の信ずべき神様がいたら、どうなると思いますか？

Q. 信ずべき神様がお一人だけだということは、どんな点で嬉しいことなのでしょう？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？



テキスト 出エジプト記32章

(1) モーセ不在の不安によって

モーセがシナイ山に登り、そこに滞在していた期間は四十日四十夜にわたりました。モーセの帰りをイスラエルの人々は山のふもとで待ちつづけていたのです。しかし、四十日四十夜という期間は、待つ人々にとってあまりに長すぎたのです。民の指導者であったモーセが不在であり、しかも山の上でどうなってしまったのかも分からない不安が彼らを襲うのです。その中で、民は「我々に先立って進む神々を造って下さい」と願うのです。

(2) 偶像を造り、拝む人々

このところで、人々は神様に代わるものを造ってほしいと願ったのではなく、彼らを「エジプトの国から…導き上った人、モーセ」に代わるものを求めているのです。モーセは民が神様に近づく唯一の道であり、モーセは神様の御言葉を語る存在であったのです。そのモーセは民にとって、神様の表象であったといってもよいでしょう。そのモーセがいなくなった今、彼らは表象を目に見える、具体的で接近し得るもので代用しようとするのです。そして、彼らはそのような像を持つことで、神様から切り離された表象としての「神々」を持ったのです。今や神様から切り離された神の表象としての像は、彼らによって彼らの神とされたのです。

人間の手によって造られた、動くことも語ることもできない像が、人格的に行動なさる神様にとって代わったのです。

しかし、この人の手によって造られた神は、何の主権もなく、人の意のままに操られる存在ではないことが、5節で明らかに語られています。正しい神礼拝は、神様がその主権を持って、礼拝するべき日、礼拝のしかたなど全てを定められるのです。しかし、この金の子牛の像は当然のことで、何の力もないのです。アロンによって礼拝

の日が定められ、礼拝のしかたも定められます。アロンとその民は、彼らをエジプトから導き出された生ける真の神様を捨てたのです。そしてそれに代えて目に見えるけれども死んでいる何の力もない像を自らの神としたのです。

(3) 神の怒りとモーセの執り成し

この事態をご覧になった神様は、怒りを発せられます。御自身のことをねたむ神であるとおっしゃられる神様が、民が陥った事態を見て怒られるのは当然のことです。神様は「わたしを引きとめるな。……わたしは彼らを滅ぼし尽くし、あなたを大いなる国民とする」とモーセに語ります。神様はこの不信仰を見逃ごしにはなさらず、その罪の結果を彼ら自身が引き受けなければならない事実を、お語りになるのです。

モーセはこの神様の怒りに対して民を執り成します。モーセは契約を示し神様がその裁きを留めて下さるように願い、神様はその災いを思いなおされたのです。

しかし、罪の現実はお残り続けています。モーセはその罪を犯している人々のただ中に入っていく、その罪を指摘するのです。そして、この民のために神様に対して執り成しをするのです。民のためなら、自分の名を主が書き記された書の中から消し去ってほしいと彼は願うのです。民に対する彼の愛が示されているのです。しかし、アダムの間である人間は、人間の贖いのために自らの命を捧げることはできないのです。神様はその罪に対して明らかに罰をお与えになります。しかし、神様はその契約を破棄されることなく、それでもなお履行なさる方なのです。神様はまさに生きた方として、御自身の正義と公正とを御自身の主権を持って明らかに示して下さる方なのです。

(春名義行)

カテキズム 子どもカテキズム問45,46

子どもカテキズム

問45 第二戒は何ですか。

答 「あなたはいかなる像も造ってはならない」、です。

問46 第二戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 私たちは、真の神さまを忘れるときに、必ず、自分のために神々を造り出します。

私たちは、お守りや占いに頼ったり、

自分を喜ばせるために礼拝してはいけない、ということです。

証換聖句 ヨハネ4:24、マタイ15:9

参考教理問答 『ハイデルベルグ』95、『ウ小教理』49～52

第一戒と第二戒は、密接不可分の関係にあります。第一戒では、生ける真の神のみを礼拝しなければいけないことが教えられました。第二戒では、「あなたはいかなる像も造ってはならない」と命じられています。つまり、第二戒は、偶像を造ることを禁止する戒めです。

ここで禁止されている「像」とは、異教の神々の像ではありません。真の神、主なる神の像のことです。当時のイスラエルの近隣諸国には、神々と呼ばれる様々な偶像が刻まれ、礼拝の対象とされていました。私達日本の国も、古来から「八百万の神」といって、山に行けば樹齢の長い木々の中に神々が宿っているといっ、注連縄（しめなわ）をして礼拝の対象にしたり、古い神社には、ご神体とよばれる「石」とか「鏡」が祀られたりしています。しかし、世の中に偶像の神などはありません。「現に多くの神々、多くの主がいると思われているように、たとえ天や地に神々と呼ばれるものも、わたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ、万物は、この神から出、わたしたちはこの神へ帰って行くのです」（コリント一8:5）。

偶像の神とは

かつて、イスラエルの民が、アロンに「さあ、我々に先立って進む神々を造ってください」と願い、民たちの差し出した金の耳輪などをとくして金の雄牛をつくった時、民は「イスラエルよ、こ

れこそあなたをエジプトの国から導き上ったあなたの神々だ」と言いました。

偶像の神とは、人間の様々な、心の中の欲望や願望の投影です。人間は様々な願望を満たしてくれる神々を作り出しているにすぎないのです。「五穀豊穡の神」「合格祈願の神」「厄除の神」などすべて、人間自身の願望が作り出したものです。

さらに、偶像の神は、自分自身を神の位置にまでおいた、自分自身の偶像化です。「彼らは、腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません」（フィリピ3:19）。自分の欲望に従って生きることも偶像礼拝です。

生ける真の神は、人格をお持ちであり、人間に語りかけて下さいます。私達は、私達に語りかけて下さる神の御声に聞き従わなければなりません。私達が神を自分の思いどおりに動かし従わせるのではなく、私達が神のしもべとなり、神に服従することです。真の神礼拝は、「主よ、お話しください。僕は聞いております」と神の御言葉に耳を傾けることから始まります。

そもそも、神は無限かつすべてのものの造り主です。人間の想像や願望で作り出すことは不可能です。また、特定の形、場所に限定することもできません。神は霊でありますから、私達の肉眼で捉えることはできません。「神は霊である。だから神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならぬ」（ヨハネ4:24）のです。

(久保浩文)

テキスト 出エジプト記32章
カテキズム 子どもカテキズム問45,46

〔単元のねらい〕

偶像礼拝の背後に悪霊の企みがあることを、まず押さえておきたい。偶像礼拝に対する戦いこそ、かつてのイスラエルと同様に、私たちの国でも求められている重要な霊的戦いに違いない（エフェソ6章）。主が第二戒を通して、悪と滅びの道から立ち返るよう熱心に呼び掛けておられる、その尊きみ旨を覚えることをねらいとしたい。

「渴いている人は誰でも、わたしのところに来て飲みなさい」

今日は、第二戒について学んで行きましょう。この第二戒では、自分のために偶像を造ること、その造った偶像を拝むこと、これに仕えること、この三つが禁じられています（出エジプト記20：4～5）。今で言うならば、自分のために、何かしらの幸運を得ようと考えて、守り札を身に付けたり、占いをしてその指示に従ったりすること、あるいは、霊石・パワーストーンなどと呼ばれる、実はただの石に過ぎない物を買って家に飾り、これに向かって願いの事を言ってみること、これらのどの一つもしてはならないと神様は命じておられるのです。

さて、十戒の一つ一つの言葉は、どれも豊かな内容を持ったものですから、色々な角度から取り上げることが出来ます。そこで今回は、第二戒に込められている主のみ旨の一つ、「悪しき者の企みを見抜き、生ける水の源であるわたしのもとに立ち返れ」との主のみ旨に焦点を絞って見て行きましょう。

それで、まず第一に押さえておきたいのは、十戒の序文の言葉です。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」（出エジプト記20：2）。つまり一番直接的には、十戒はすでに救いを受けたイスラエルに対して語られているのです。奴隷の家から解放された、真の神を知っている主のみ民に語られているのです。ところが、旧約聖書に記されている

ように、み民イスラエルは第二戒違犯を何度も繰り返すのでした。

その実例をエレミヤ書から見てみましょう。ユダ王国が、主への背信を改めなかった故に、国の滅亡を迎えようとしていた暗い時代のことです。主なる神は言われます。「彼らは木に向かって、『わたしの父』と言い、石に向かって『わたしを産んだ母』と言う。わたしに顔を向けず、かえって背を向け、しかも、災難に遭えば『立ち上がって、わたしたちをお救いください』と言う。お前が造った神々はどこにいるのか。彼らが立ち上ればよいのだ、災難に遭ったお前を救いうるのならば。ユダよ、お前の神々は、町の数ほどあるではないか」（2：27～28）。ひとたび、災いが臨むならば、力ある主に助けを求めるにもかかわらず、イスラエルは、何も成し得ない木や石の像を町の数ほども造り、これを拝んでいたのです。

7章18節には、一家総出で異教の神々に仕えている姿が描き出されてもいます。

しかし、なぜ真の神を知っているはずのイスラエルでさえ、こんなにも曲がった者となってしまうのでしょうか。二つの理由が考えられます。一つは、悪霊の仕業という理由です。聖書は、世の偶像の神は実際には無いものであると教えています（コリントー8：4～6）。なるほど、バアルやゼウスや天照大神など名前だけなら幾つもあります。しかし、そのどの一つも名前に対応する実体

は無いのです。ちょうど、空想上の動物に名前を付けたようなものです。名前があり、物語までありますが、世界中どこを捜しても、その実体は存在しません。しかし、ただの刻まれた像や、紙切れや、石にすぎない物に名が付けられると、それにいかにも神々が宿っているかのように思い込ませる、偽り者がいるのです。それが悪霊です。聖書は、偶像への献げ物は悪霊への献げ物であると教えています（詩編106:34～38、コリントー10:20）。そう、悪霊どもは目に見える形を用いて、人をキリストに向かわせず、自らに仕えさせようと企んでいるのです。イスラエルはこの悪霊の仕業に易々と乗ってしまったのです。

そこで、もう一つの理由も考えなくてはなりません。それはイスラエルが主の戒めに従うよりも、自分勝手に生きることを好んだという理由です。彼らは、主の悔い改めの招きに対して言いました。「それは無駄です。我々は我々の思い通りにし、各々かたくなな悪い心のままに振る舞いたいだから」（エレミヤ18:12）。神様は、あなたの隣人をあなた自身のように愛せよと命じておられます。ところが、彼らは隣人を愛するより、隣人を踏台にしてでも自分だけは富み栄えたいと考えました。これでは、ご機嫌とったら言うことを聞いてくれる、と言われる偶像の神々の方がお気に入りになっても不思議ではありません（エペソ2:1～2）。

第二戒違反は、まさしく悪と滅びへの道であるのです。しかし、み民はそれが分かりません。

主はみ民を愛しておられます。それ故、悪の道から立ち返ることを求めて、エレミヤを通して彼らに呼びかけておられます。「諸々の民が恐れているものは空しいもの、森から切り出された木片、木工がのみを振るって造ったもの。金銀で飾られ、

留め金をもって固定され、身動きもしない。きゅうり畑のかかしのようで、口も利けず歩けないので、運ばれて行く。そのようなものを恐れるな。彼らは災いを下すことも、幸いをもたらすこともできない」（10:3～5）。「一体、どこの国が神々を取り替えたことがあろうか、しかも、神でないものと。ところが、我が民はおのが栄光を助けにならぬものと取り替えた。…まことに、我が民は二つの悪を行った。生ける水の源であるわたしを捨てて、無用の水溜めを掘った。水を溜めることの出来ない壊れた水溜めを」（2:11～13）。

人は主の御声に背いて、自ら自分のための水溜めを造ろうとします。しかし、その壊れた水溜めの中には、渴きを癒す水は一滴もありません。きゅうり畑のかかしに過ぎない物に、人の魂を癒し、潤すことは出来ません。悪しき者の企みを見抜き、生ける水の源であるわたしのもとに立ち返れ！それが第二戒に込められている主のみ旨であるのです。

後の日、主イエス様は大声で言われました。「渴いている人は誰でも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてある通り、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」（ヨハネ7:37～38）。

主は、渴いている人は自分で水溜めを造りなさいと命じているのではありません。わたしのところに来て、そして飲みなさいと命じておられるのです。誰もが招かれてもいます。ですから、私たちも主のもとに行って、生ける水を一杯に受けましょう。そして、この世に向かって、生ける水を喜んで与えて下さる真の救い主がおられることを語り伝えていこうではありませんか。

（小野田雄二）

〔今週の暗唱聖句〕

出エジプト記20章4節前半

あなたはいかなる像も造ってはならない。

〈ねらい〉

神様はただお一人であられ、人間が自分の手で勝手な神様をつくったり、礼拝することを神様はお嫌いになることを知る。

〈展開例〉

今日は、十戒の第二戒を学びましょう。

第二戒では、「あなたは、いかなる像もつくってはならない」と書かれています。「いかなる像」とは、神様がつくったものではなく、人間が勝手に「神様は、こんな形かな?」とか、「神様をぜひ見たいな」という心の思いからつくった像のことです。そんなわたしたちの思いをも神様はお嫌いになります。聖書の世界にも人間がつくった神様がたくさん登場します。そして、多くの人たちがその神様に熱心に礼拝をおささげしていたのです。

聖書の中に、本当の神様を信じる人たちと自分たちがつくった神様を信じる人たちと戦ったことが書かれています。その結果は、本当の神様が勝ちました。人間がつくった神様は、どんなにお願いしてもわたしたちの思いを知ってくれたり、かなえてくれはしないのです。

世の中には、そんな神様のことを信じている人がたくさんいるのです。そう、日本の国を見てみると、本当にたくさんの場所に人間がつくった神様があります。そして、自分の色々な思いやお願いを込めて神様をつくってまつてあるのです。時には、自分が神様になってしまうこともあります。このようなことは、神様がたいへんお嫌いになることです。聖書の神様は、わたしたちの目には見えませんが、ずっとむかしも今もこれからもその先もわたしたちのために働いていて下さり、わたしたちを本当に守って下さる神様です。

神様は、目には見えない「霊」というお姿なので、わたしたちには分かりません。でも、イエス様を通して分かるようにして下さいました。そのイエス様を心から礼拝することで神様のことが分かるようになるのです。

〈お祈り〉

天のお父様。今日も心から礼拝をおささげ出来てありがとうございます。本当の神様のことを良く知ることが出来ますように。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

十戒の板を作ろう!

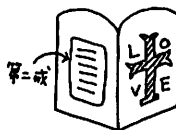
〈用意するもの〉

- * 画用紙・色えんぴつ・サインペン・はさみ・のり
第二戒の聖句をプリントした紙

〈作り方〉 1. 画用紙を半分に折る。 2. 点線で切り取る



3. 第二戒の紙をはる。
片方は糸をかけたリ
色めりしつりする。



出来上がり!

〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ①モーセがいない間に、金の子牛を造ったのは誰ですか？（→アロン）
- ②神さまはそれを喜ばれましたか？（→怒られた）
- ③モーセも一緒に像を拝みましたか？（→拝まなかった）
- ④モーセは山の上で何をしていたのですか？（→神さまの御言葉が書かれた板をもらっていた）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

- ①像や模型などを造ること自体がいけないのですか？（→神さまの像や模型を造り、それを拝むことがいけない）
- ②心から拝むのなら何を拝んでもいいのではありませんか？（→真の神さまだけを拝まなければならない）
- ③十字架の模型や、イエスさまの絵を拝むのならいいのですか？（→作ったり書いたりしたものを拝んではいけない）
- ④それではどのように礼拝するのですか？（→聖書を読んで、目には見えない神さまを知り、礼拝する）

〈考えてみよう〉

周りに、お守りを持っているお友だちや、占いが好きなお友だちはいるでしょうか。それでお友だちが安心したり、喜んだりしているのを見ると、うらやましく思うことがあるかもしれません。でも逆に、そういうお友だちは、お守りをなくしてしまったり、占いで悪いことを言われたりしたときには、どうなるでしょうか。こわくて不安になるのではないのでしょうか。私たちには、どんなときにもイエスさまと一緒にいてくださいます。目に見えないということは、うっかりなくしてしまうようなことなどもないということです。目に見えるものではなく、目には見えない神さまを心から信じましょう。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。イエスさまがいつも一緒にいてくださってありがとうございます。聖書をたくさん読んで、心の中でイエスさまをしっかりと信じてことができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

出エジプト記32章の場面とその背景をイメージさせるとよい。そこから生けるまことの神は、像にされるべきでないこと、なぜならそのような像におさまるようなちっげけな神ではないことを理解するように導く。第一から第四戒を通して、生けるまことの神の存在と、神への正しい畏れを持つように導く。

(このページの章・節は出エジプト記です。)

〈展開例〉

○第二戒を暗唱してみよう。
○この場面までのいきさつをふりかえってみよう。エジプトでの奴隷としての苦難、出エジプト、紅海を渡る、シナイ到着、モーセのシナイ登山と十戒。

○イスラエルの人たちは(金の子牛)をつくりました。どうしてつくったのでしょうか。

モーセが(シナイ山)に登り(四十日四十夜)にわたりました(24:18)。

その間イスラエルの人々は山の(ふもと)で(待ち)続けました。それでモーセがどうなったか分からないので(不安)になったのです(32:1)。

○イスラエルの人々は何を造ろうとしたのでしょうか。

①モーセの知らない新しい神。なぜなら、山に登ったモーセはどうなったか分からないということは、今までの神様も、自分たちを見捨ててどこかに行ってしまったかもしれないから。不安だった。

②自分たちをエジプトから導き出した神を造ろうとした。神様の言葉を語るモーセがどうなったかわからないから、不安だった。目に見えるものを造ろうとした。

②ですね。でも彼らが造った金の子牛の像はイスラエルの人々をエジプトから導き出した神様ではありませんね。

○イスラエルの人々は、自分たちをエジプトから導き出した神様と別の、偽りの神様をつくらうとしたのでしょうか。(そうではない。自分たちをエジプトから導き出した本当の神様をつくらうとした。)

○本当の神様なのに、ここでは何がいけないのでしょうか？ 神様を(金の子牛の像)にしてそれが自分たちを(エジプトから導き出した)神であるとしたこと。

○なぜ(金の子牛の像)にしたことがいけないのでしょうか？ 生きておられる本当の神様は刻んだ像の中に(おさまる)ような(ちっげけ)な神様ではないからです。造られた像は結局(偶像)だから。

○第二戒が禁じていることは、自分のために刻んだ像を(造る)こと、その(造った)像に(ひれ伏す)こと、つまり(拝む)こと、これに(仕える)こと、この三つです。20章4～5節を読んでみよう。身近な例を考えよう(お守りなど)。

○私たちの教会では本当の神様、イエス様を像にして置くこと、それを拝むことをしていませんね。刻んだ像を拝むことはこの戒めに反することだからです。正しい礼拝は、像を拝むことではなくて、(聖書の言葉)に聞き従い、(祈り)と(賛美)を捧げることです。

○イスラエルの人たちは、モーセがどうなったか分からないと言って不安になりましたが、神様はそんな時も、彼らと(一緒に)いて、(守って)下さっていたのです。

〈祈り〉

天の神様、あなたは目には見えなくても、どんなときにも私たちと一緒にいて下さり、熱情をもって私たちを愛して下さっています。だから、神様を造って置いたり手に持ったりしなくてもよいのですね。私たちがあなたを正しく礼拝することができるようにお守り下さい。

【目標】

第二戒について学ぶ。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→出エジプト記32章を生徒と読む。

【ポイント】

人間は形を求める弱さをもっており、出エジプトの民のように形がないとすぐに不安になったり、何かを形にして持っている则安心したりもするが、生きておられる神様を、人格のない、動かない像で表わすということはできず、それは神様を引き下げることである。そして神にはなり得ない刻んだ像を礼拝することはさらに、それを拝んでいる自分自身をも、刻んだ像以下に引き下げてしまう行為でもある。しかしさらに考えると形に縛られない神様が、人の形を取って、救い主として世に

来てくださったことも、これは驚くべき恵みである。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての第二戒を守って生きるということは、どのようなことなのか？それを生徒と分かち合う。

Q. 形あるものは永遠に続くでしょうか？

Q. 無限の神様を形に納めることはできるでしょうか？

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 教会ではお守りは売っていませんが、お守りがないからといって、聖書の神様は守ってくれない神様なのでしょうか？

Q. 御言葉と同じような経験をしたことはありますか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト マタイによる福音書7章21節～23節

この箇所は直前の狭い門から入りなさいとの箇所や実を結ぶ木と結ばない木と関連しているところ。

(1) 主よ、主よと言う者が皆

このところは、『主よ、主よ』と言う者が皆との言葉で書き出されています。「主よ、主よ」との言葉は主に對する呼びかけであり、主を告白する言葉です。その言葉を語る者であっても、その人々が皆天の国に入れるわけではないと語られるのです。天の国に入ることができるのは、キリストと結び付けられた者たちです。たとえ「主よ」と呼びかける告白があっても、預言や悪霊の追放、また種々の奇跡を行う力が与えられていたとしても、それが主との結びつきを保証するものではないのです。

たとえどれほど驚くべき賜物が与えられていたとしても、それを自分の利益や自分の栄光のために用いるような人物であるなら、それは偽物なのです。彼らは主の名を利用して自らの利益を上げ、自分が誉め称えられるように、それをを用いるのです。そのような人は当然のことですが、主において良い実を結ぶことはないのです。このような人はキリストと結ばれている人ではないゆえに、いくら「主よ、主よ」と呼んでみても神の国に入ることができないのです。

(2) わたしの天の父の御心を行う者だけが

それではどのような人が天の国に行けるのだろうかとわたしは思います。そこで主は、「天の父の御心を行う者だけが入るのである」とお

しゃっています。

天の父の御心とはいったい何なのでしょう？ それは、人々を狭き門へと正しく導くことであり、また、隣人への愛が示されることによるのです。偽預言者は正しい狭い門に導こうとはせず、安楽な道を示すのです。また、決して隣人愛を燃えたすことはなく、かえってそれを冷ますのです。

どれほど豊かな賜物を受けていたとしても、天の父の御心を行って、実を結ぶことができなければだめなのです。その実は愛の実です。コリントの信徒への手紙一13章2節に「預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようと、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようと、愛がなければ、無に等しい。全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない」と語られている通りです。天の父の御心は隣人への愛であり、その愛によって主の恵みを豊かに示すことであるのです。

つまり、本当に主イエスに結び付けられ、主の弟子となる人は自己中心的な生き方から解放されるのです。そして、愛の実を結び御心を行うものと変えられていくのです。そのことによって、「主よ、主よ」と呼びかけるその言葉が真実な告白となり、主の御名を称えるものとなるのです。

正しく主の御名を呼び、正しく神様を称え、神様に祈るとき、わたしたちは神の国の外にいる者ではなく、神の国を継ぐ者となるのです。

(春名義行)

カテキズム 子どもカテキズム問47,48

子どもカテキズム

問47 第三戒は何ですか。

答 「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」、です。

問48 第三戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 神さまのお名前や教会の教え、そのほか、神さまにかかわるものを、
ふざけて用いたり、自分勝手に変えて用いてはいけない、ということです。
愛の神さまは優しい神さまですが、これらを厳しく裁かれます。
ですから、私たちは主の御名を正しくほめたたえます。

証換聖句 マタイ6:9

参考教理問答 『ハイデルベルグ』99～102、『ウ小教理』53～56

第三戒では、神の名を、神への畏れも敬虔もなく軽々しく用いて濫用することが禁じられています。

1. 神の名とは

神の名とは、単なる神の名称、呼び名ではありません。名前は、その持ち主の人格と実体、つまり、その名の持ち主を代表するものです。つまり、神の名とは、神ご自身を表わし、神そのものなのです。

神は、「わたしは主、あなたの神」であると自己紹介されました。

モーセは、エジプトの王ファラオの元に自分を遣わすといわれる神の名を尋ねます。モーセが求めた神の名は、単なる発音の問題ではありません。モーセは、今エジプトに自分を遣わそうとしている神が、どういう本質の御方なのかを知りたかったのです。それに対する神の答えは、「わたしはある。わたしはあるという者だ」（出エジプト3:14）でした。「わたしはある」は、〈自ら存在する者〉という意味です。ご自分は「生ける神」であり、異教の神々は「死んだもの」です。さらに、自分以外のすべてのものを存在せしめる、生きとし生ける全てのものの神である、ということです。

「わたしはある」という神は、全てのものを存

在せしめるだけでなく、ご自分の民、イスラエルと「共におられる神」なのです。神はモーセに「わたしは必ずあなたと共にいる」と約束されましたが、その後、イスラエルの民と共におられ、全ての道を守り導いてこられました。そして、この神は、ご自分の御子イエス・キリストをこの世にお遣わし下さって、私達の間に住んで下さいました。イエス・キリストこそ、インマヌエル（神は我々と共におられる）なのです。

2. 神の名を正しく用いる

神の名は、神ご自身であり、神の実体をあらわしますから、神の名を軽んじる、軽々しく口にすることは、神ご自身を侮り、軽んじることなのです。さらには、神を人間の都合に合わせて支配しようとすることに他なりません。

神がご自分の名を私達に啓示して下さったのは、私達がその名を呼んで、ご自身と交わりを持ち、礼拝するためです。

私達は「父と子と聖霊の御名」によって洗礼を受け、神との交わり、契約の中に入れられました。さらに私達は、御子の名を通して、聖霊の助けによって、父なる神に祈り求めるのです。

(久保浩文)

テキスト マタイによる福音書7章21～23節

カテキズム 子どもカテキズム問47,48

(単元のねらい)

預言者マラキの時代の祭司たちの姿は、私たちと無関係とは言い得ないだろう。ペトロのように、主の教しによって、いつでもやり直しの道は開かれている。「勝手気ままはまずいよね」と、それぞれに教えられることをねらいとしたい。

「天の窓を開き、祝福を限りなく注ぐであらう」

今日は第三戒について学びましょう。第三戒は「あなたは、あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」です。

そこで、まず初めに、この戒めが禁じていることを少し丁寧に見て行きましょう。

この戒めは主の名を唱えること、口に出して言うこと自体を禁じているものではありません。みだりに、あるいは空しく唱えることが禁じられています。言い換えれば、いい加減に、勝手気ままに主の名を用いることが禁じられているのです。では、どういう時に主の名がみだりに空しく用いられるということが起こって来るのでしょうか。一つには、誓いの時があります。つまり、神である主の名を唱えて偽って誓うならば、それはそのまま第三戒違反になります。しかし、誓いという限定された時だけでなく、日常生活の中で、主を畏れることを忘れ、勝手気ままに生きるとするならば、それも主の名をみだりに用いることに繋がります。なぜなら、聖書で御名というのは単に名前を表わす記号ではないからです。例えば、「主の名を呼ぶ者は誰でも救われる」の場合、主の名・主イエスの名を呼ぶというのは、単にその名前を口にするということではなく、この方に心からの信頼をもって依り頼むという意味だからです。そのように名はその方自身を表わします。ですから、主を知りつつも不敬虔な態度で歩み続けるとするならば、それも第三戒違反になるのです。

そこで、この不敬虔な態度での第三戒違反の実例として旧約聖書の中から一つの箇所を見ておき

ましょう。マラキ書の1章です。当時、礼拝は行われていましたが、それは形ばかりの空しいものになっていました。「……万軍の主はあなたたちに言われる。わたしの名を軽んずる祭司たちよ、あなたたちは言う、我々はどの様にして御名を軽んじましたか、と。あなたたちは、わたしの祭壇に汚れたパンをささげておきながら我々はどの様にして、あなたを汚しましたか、と言う。しかも、あなたたちは主の食卓は軽んじられてもよい、と言う。あなたたちが目のつぶれた動物をいけにえとしてささげても、悪ではないのか。足が傷付いたり、病気である動物をささげても悪ではないのか。それを総督に献上してみよ。彼はあなたを喜び、受け入れるだろうかと万軍の主は言われる」(1:6～8)。総督でさえ受け入れるはずのない物を、万軍の主には平気でささげている。そこには主なる神に対する畏れも敬愛もありません。しかも、その悪を指摘されても気付きません。反対に「我々はどの様にして御名を軽んじましたか」と口をとがらせて言い返す始末です。この祭司たちが、たとえどれ程うやうやしく主の名を唱えたとしても、それは主の名をみだりに唱えることにはなりません。

さて、第三戒が禁じていることについて見てきましたから、次に、第三戒が求めていることについて考えてみましょう。第三戒が求めていること、それは主なる神に、常に相応しい畏れと敬いと感謝と喜びをもって仕えていくことです。なぜなら、

その時こそ人は第三戒が禁じていること、すなわち、主の名をいい加減に、勝手気ままに用いる悪から離れ去ることが出来るからです。

さて、ではどうしたら、この戒めの求めに生きることが出来るでしょうか。それはただ一つ、主なる神様との深く豊かな交わりを持ち続けることによって出来るようになります。

マラキ書3章を御覧下さい。当時、主に背いていたのは祭司たちばかりではありません。み民もそうでした。彼らは言います「神に仕えることは空しい。たとえ、その戒めを守っても、万軍の主の御前を衆に服している人のように歩いても（悔い改めを表わしても）何の益があろうか。むしろ、我々は高慢な者を幸いと呼ぼう。彼らは悪事を行っても栄え、神を試みても罰を免れているからだ」（3:14～15）。これでは、主に畏れと感謝をもって仕えることは出てきません。

ところが、そのみ民に対して主は仰せられたのです。「……あなたたちはわたしを偽っているが、どのようにあなたを偽っていますか、と言う。それは、十分の一の献げ物と献納物においてである。あなたたちは、甚だしく呪われる。あなたたちは民全体で、わたしを偽っている。十分の一の献げ物をすべて倉に運び、わたしの家に食物があるようにせよ。これによって、わたしを試してみよと万軍の主は言われる。必ず、わたしはあなたたちのために天の窓を開き、祝福を限りなく注ぐであろう」（3:8～10）。何と神ご自身が背信のみ民に対して「わたしを試してみよ！」と命じておられるのです。神様の方からみ民に迫り、彼らを捨て去ることではなくて、ご自分との交わりに彼らを回復させようと力を込めて呼び掛けておられるのです。もしも、この主の熱心に触れ心砕か

れて主に喜んで仕えていくなれば、主の名をみだりに用いる罪から全く解放されるに違いありません。

新約聖書の福音書を開きますと、偽りの誓いをしてしまった一人の主の弟子が登場します。十二弟子の一人ペトロがその人です。

主イエスが捕らえられたその夜、後をつけていったペトロは大祭司の屋敷の中庭まで入って行きました。そしてそこで「あなたはナザレのイエスの仲間だ」と繰り返して問われてしまいます。すると、ペトロは三度もこれを打ち消し、最後は誓いつつ言ったのです。「あなたがたの言っているそんな人は知らない」（マルコ14:71）。誓ったというのですから、たとえ口には出さずとも、神の名が用いられたことを考えなくてはなりません。そう、ペトロは第三戒に対する重大な違犯をしてしまったのです。しかし、彼はこれで終りませんでした。なぜなら、主イエスがペトロのためにずっと祈って下さっていたからです。さらに復活の主から「平安あれ」のみ声を掛けていただいたからです（ルカ22:31～34、ヨハネ20:19～21）。

主の赦しを与えられ、その慈しみの大きさを味わい知って後、ペトロはユダヤ当局の脅しにも屈しない、主に喜び仕える人になりました。私たちがまた、そうです。自分の力では全く出来ませんが、主が与えて下さる赦しと慈しみの深い交わりを持ち続ける時、畏れと敬いと感謝と喜びをもって主に仕えていく者にして頂けます。いいえ、喜んで主に仕えずにはいられなくなるでしょう。

不敬虔で心鈍き者に「わたしを試してみよ」とまで命じ、ご自身との交わりに招いて下さっている主の思みを覚えて、私たちがみ力を祈り求めつつ主に従って参りましょう。（小野田雄二）

〔今週の暗唱聖句〕 出エジプト記20章7節前半

あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。

〈ねらい〉

主なる神の御名を軽々しく唱えること、また、主への畏れを忘れ、勝手気ままにいきることの誤りについて知る。

〈展開例〉

「やおよろずの神」という言葉を聞いたことがありますか？「やおよろず」というのは、漢字で書くと「八百万」、つまり「800万の神様」ということです。わたしたちの住む日本の国では、残念ながら、わたしたちが信じている聖書の神さま、イエス・キリストの父なる神さまを信じている人は、まだあまり多くはいません。その代わりということではありませんが、「神さま」といわれる「もの」はいっぱいあります。亡くなった人や、優れた才能を持った人が「神さま」になってしまうのはまだいい方で、狐や蛇など、珍しい動物が「神さま」になったり、山や大木や石まで「神さま」になってしまったりすることもあります。「八百万の神」というのは、そういう何でもかんでも神さまにしてしまうことから生まれた言葉です。

まるで、神さまの大安売りですね。そんなもの、もちろん本当の神さまではありません。人が自分の都合で、自分勝手につくってしまった神さまなのです。

本当の神さま、わたしたちの主なる神さまは、「神さま」というお名前や教えを、気軽に口にすること、人の勝手な都合で利用することを禁じておられます。ただの動物や山や石などはちがうのですから当たり前ですね。この世界の全てを治めておられるお方なのですから、わたしたちはいつでも、主なる神さまを畏れ、敬い、感謝してお仕えていかなければならないのです。

〈お祈り〉

かみさま、聖書から本当の神さまのを知ることができてありがとうございます。自分勝手な都合で神さまのお名前を使ってしまうまちがいをしませんように、わたしたちをたすけてください。イエスさまのおなまえによって祈ります。アーメン。

〈やってみよう〉

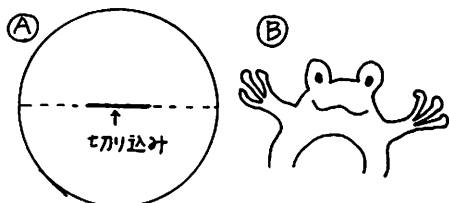
ゆらゆら人形

〈用意するもの〉

★厚手の画用紙・色ペンor色えんぴつ・はさみ・カッターナイフ・セロテープ

〈作り方〉

1. 画用紙に円と人形の上半身を書く



2. ①②に色をぬり、切りとる。

3. ①を半分に折り、切り込みに②を差し込んで、テープでとめる。



〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ①「主よ、主よ」と呼べば、天国に行ける？（→自分勝手に呼ぶだけでは行けない）
- ②誰が天国に行ける？（→神の御心を行う者）
- ③神の御心とは何？（→イエスさまにしっかりと結びついて、愛という良い実を結ぶこと）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

- ①聖書で教えられている神さまのお名前とは？（→主、父、イエス、聖霊など）
- ②他の名前を自分で考え出してもいい？（→よくない）
- ③ふざけてお祈りしたり、賛美したりしてもいい？（→よくない）
- ④それなら、もう神さまという言葉そのものを口にしない方がいい？（→正しく口にして、心から賛美する）

〈考えてみよう〉

お友だちの名前をふざけて変えて呼んだり、いじわるなあだ名で呼んだりしたことはないでしょうか。自分がそのように呼ばれたことがあるなら、そのとき嫌な気持ちがあったのではないのでしょうか。名前というものは、自分自身のことを指す大切なものです。神さまも、ご自分のお名前がふざけて呼ばれることをお嫌いになられます。冗談でお祈りしたり、賛美したりすることのないようにしましょう。逆に、誰かが自分の名前を呼んでほめてくれたら、うれしくなります。神さまも、心から神さまをほめたたえる人のことを喜んでくれます。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。あなたのすばらしいお名前を心から賛美します。神さまのことを正しく知って、心から賛美し、従うことができるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

神様は生ける方であるから、この方の御名をふさわしく畏れ、敬う心なくしてお呼びすることはできないこと。したがって軽々しく神の御名を濫用することが禁じられていることを理解すること。神様が自ら名乗られた箇所として、出エジプト3章14節がある。

〈展開例〉

- 神の名は単なる（呼び名）ではありません。名前はその（持ち主）をあらわし代表するものです。だから「神の名」とは、（神ご自身）を表わすのです。だから、神様の名を口にするとき、どんな心でお呼びすればよいのでしょうか。私たちも自分の名前を勝手に使われたり、軽蔑の材料にされたりしたらいやな気持ちになるでしょう。
（子どもたちと具体例を一緒に考えてみてもよいでしょう。）
- 神様が御自分のことを自己紹介され、名を名乗られたところがあります。出エジプト3章14節です。読んでみよう。神様はご自分をどのように名乗られましたか。（「わたしはある。わたしはあるというものだ」）（3：14）。
- このお名前には、神様がどんなお方であるかが示されています。人間が造った偽りの神（偶像）は、自分で名前を名乗ることは（できません）。（人間）に名前をつけてもらわなければ（名前）がないのです。けれども本当の神様は（ご自分）で名前を（名乗られた）のです。（人間）に造られた神ではなく、人間が（助け）なければならぬ神でもありません。
- そうではなく、モーセに（「わたしは必ずあなたと共にいる」）（出エジプト3：12）と約束して下さいました。その後、イスラエルの民と（共に）おられ、彼らを（守り導いて）いかれました。

○神様は、私たちを罪と死から救うために（イエス様）をお送り下さいました。

○このような神様の御名ですから、（軽んじたり）（いいかげん）な気持ちで口にするのは、（神様）を軽んじることになるのです。第三の戒めは、そのように（神の名）を軽んじることが禁じているのです。

○神の名をみだりに唱えること、どんなことが考えられますか？ 考えよう。例えば……

- ・自分勝手な誓い、自分の言いたいことを言い張るために（神の名にかけて）などということ。
- ・「そんなことをすると神に罰を受けるぞ」、などといって神様の名を用いること。

○この戒めで求められていることは？ 神様の御名を大切にすることです。ではどんなことがあるでしょうか？

- ・神様の名によって誓うことがあります。たとえば（洗礼）を受けること、それから幼児洗礼を受けている人はやがて（信仰告白）をします。イエス様を（信じて）イエス様に（従います）、と約束するのです。その約束をちゃんと守ることです。それは神様の御名を大切にすることになります。
- ・礼拝を（守り）、神様の言葉に（従う）こと、お祈りすること。神様を（愛し）神様を（第一）とする心を持つこと。
このような心を持たずに「主よ、主よ」というのは、（主の名をみだりに）唱えることなのです。

〈祈り〉

天の神様、あなたの尊い御名はすばらしいです。天地を造り、私たちを支え、守って下さる神様の御名だからです。私たちに、あなたの御名を大切にし、尊ぶ心を与えて下さい。救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。

【目標】

第三戒について学ぶ。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→子どもカテキズム問47～48を生徒と読む。

【ポイント】

私たちが人から名前を呼ばれたらハッと振り返ってハイと返事をするように、神様も私たちの声をちゃんと聞いてくださって、振り返ってくださる。そのことを思うならば、冗談で神様の名前を呼ぶことはできない。しかしこの戒めは、御名を口にしてはいけないという戒めではない。確かに神の御名を口にすることは恐ろしいことだが、しかしイエス様はその名を親しく呼ぶことを求められ、許して下さった。神様の名を呼ぶ時、私たちの中には力強さや、喜びや、温かさが与えられる。御名を呼んでいるということの中に既に力強く確かに働いておられる神御自身の御存在を感謝したい。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての第三戒を守って生きるということは、どのようなことなのか？
それを生徒と分かち合う。

Q. 名前を呼べるということは、力のあることです。その人を振り向かせたり、モノを頼んだり、指示を与えることもできます。名前を呼ぶということについて、考えたことはありますか？

Q. 名前を知っているということは具体的なことです。友だちの名前を思い浮かべるだけで、その友だちの顔や声までも想像することができます。神様も御自分の名前を教えてくださいました。「神様」と、神様の名前を口にする時、どんなことを想像しますか？

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 自分の名前を間違えられたり、変な風にふざけて呼ばれたりしたら、どんな気持ちになりますか？

Q. 神様や友だちの名前を、どう扱えばよいでしょうか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト ルカによる福音書6章1節～11節

ここには初代教会にとって極めて重大な「安息日論争」が、二つの安息日の出来事を通して論じられています。一つには、「安息日に麦の穂を積む」(1-5節)出来事、二つには、「手の萎えた人をいやす」(6-11)出来事であります。二つの出来事に共通しています問題点は、「安息日にしてはならない行為」をめぐって、神が制定した「安息日にふさわしい在り方は何か」を問うていることです。

両者は神の律法を守ろうとする熱心においては同じですが、この論争は安息日を人を殺す「律法至上主義」とするか、人を生かす「祝福の日」にするかをめぐってなされています。この問題を正しく見つめるためには、神がこの日を制定した目的を旧約聖書に求めなければなりません。

神が「安息日を心に留め、これを聖別せよ」(出エジプト記20章8節)と命じた目的については、モーセ五書の二つの箇所から理解することができます。それに先立ち、この言葉の字義について簡単に考察しておきましょう。

安息日とは「中止する」という言葉に由来します。聖別せよとは「区別せよ」という意味です。つまり、一週間の一日を他の日から区別して、労働を中止する日であります。とは言え、安息日はただ労働を中止するという消極的な日ではなく、安息日を覚える積極的な日であります。では、安息日に覚える務めとは何なのでしょう。この点こそ制定の目的と深く関わっています。

①出エジプト記20章11節には、神が六日間の創造の業を終えて七日目に休まれたからとあります。つまり、神の創造の業を覚える日であります。創

造者である神は、この世界を創造されたとき「これを見て、良しとされた」(このことを強調するように創世記1章に六回言及)とあります。従って、神によって良しとされた被造物として存在していることを覚えることが祝福の基であります。

②申命記5章15節には、神がイスラエルをエジプトから救い出したことを記念するためであるとあります。つまり、神の救いの業を覚えることです。この神の恩恵の業を覚えることが祝福の基であります。これら制定の二つの目的を忘れて、律法解釈が正論か否かを論じることは無益であることを覚えなければなりません。

初代キリスト教会は安息日(土曜日)に代えて、キリストの死からの復活を記念して日曜日を「主の日」として守りました(使徒言行録20章7節)。それは神の子イエス・キリストが上記の目的を完成成就した勝利の日・解放の日として覚えたからであります。今日の教会は、この伝統を受け継いで、上記の制定の目的を覚えつつ、主の日の礼拝を守っているわけです。

最後に心に留めておきたいことは、イエスさまが「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。だから、人の子は安息日の主である」(マルコ2章27節)との言葉です。安息日は「そうしなければならない日」—拘束された義務の日—としてではなく、感謝と喜びと希望の日として自由に守る日であります。そうでないと、気づかないうちに律法至上主義に陥る危険がいつも待ちかまえているからです。

(潮田純一)

カテキズム 子どもカテキズム問49,50

子どもカテキズム

問49 第四戒は何ですか。

答 「安息日を心に留め、これを聖別せよ」、です。

問50 第四戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 私たちの安息日は、主イエスさまの復活された日曜日です。

私たちは、この日を主の日として、礼拝のために特別に取り分け、

この日を目指して一週間を歩みます。

証拠聖句 使徒20：7、創世2：2～3

参考教理問答 『ハイデルベルグ』103、『ウ小教理』57～62

安息日（シャバス）は、元々、仕事を「やめる、中断する」日の意味です。

私達は、一週間のうち、六日の間は各々、自分の仕事をし、七日目は、私達の神、主の安息日ですから、この日は普段の仕事を休んで聖別しなければいけません。

「聖別する」とは、神のために「選び分かつ、取り分ける」という意味です。つまり、安息日は、七日の内の一日を、神のために特別に取り分けることなのです。この世では、日曜日として、休息や娯楽によって、肉体的、精神的な疲れをとる日ですが、私達キリスト者は、この日を「主の日」として、神礼拝のためと、神の恵みを覚えるために過ごします。

神が安息日を定められた目的は二つあります。一つは、神がこの世界を六日間で創造され、七日目に休まれた、という神の創造の業の後の休息を根拠としています。

もう一つは、「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」という十戒の前書きに見られるように、主なる神がご自分の民イスラエルに対して行った、救いの御業を根拠としています。かつて、イスラエルの民がエジプトという奴隷の地より導き出されたことに予表されている罪からの救いです。こ

の時、イスラエルの家は、各家ごとに小羊を屠って、その血を家の入り口の二本の柱と鴨居に塗ることを命じられ、神は、その血が塗ってあるイスラエルの家の裁きを過ぎ越されました。この出来事は、イエス・キリストが十字架の上で、神の小羊として、ご自身の肉を裂き、血を流されたことを予表するものです（ヘブライ9：11～12）。

キリストは、ただ一度だけご自身をささげて完全な贖いをされ、復活して神の右の座に着かれました。キリストが救いを完成して下さった、キリストの復活の日を記念する、週の初めの日を主の日として神への礼拝の日として守ります。主の日とは、永遠の命に復活されたキリストの命にあずかって、主イエス・キリストとの会見を喜ぶ日です。

私達は、礼拝の場に聖霊において臨在されるキリストを礼拝し、交わり、また、各々の一週間の旅路に遣わされて行くのです。私達は、礼拝に集う度に、罪に死んで、新しい命に生かされます。

さらには、この日を神への礼拝の日とすることによって、やがて再臨されるキリストの「終わりの日」を待望しながら生きるのです。私達は、「終わりの時」の神の天地創造の業の完成と完全な「安息の日」を礼拝において先取りしています。私達は主の日の礼拝の場において、「永遠の安息」を繰り返し守っているのです。（久保浩文）

テキスト ルカによる福音書6章1～11節

カテキズム 子どもカテキズム問49,50

【単元のねらい】

「安息日を心に留め、これを聖別せよ」という第四戒は、神様と私たちとの関係について教えている部分の最後に位置し、次の第五戒への橋渡しにもなっている。この戒めを通して、神様を礼拝することの意味について改めて考える時間を持たせたい。神様を礼拝することが私たち一人一人の喜びとなり、心が生き生きとさせられる恵みの時であること、また、そのような礼拝を迎えるための心の準備にも子どもたちが関心を持てるよう導きたい。

「神様を礼拝する喜び」

今私たちは、神さまが教えて下さった十戒のお話を聞いています。この十戒には、その言葉の通り十個の戒めが書かれていて、全体を二つに分けることが出来ます。前半が第一戒から第四戒まで、後半が第五戒から第十戒までです。今日私たちが学ぶのは、神さまと私たちの関係について教えている前半部分の最後、「安息日を心に留め、これを聖別せよ」です。

皆さんは、この「安息日」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。何だか難しい言葉のように思えますね。一言で言い換えると日曜日の礼拝のことです。今日も皆さんは教会学校の礼拝に集まっていますから、まさしくこの第四戒の教えは、「この礼拝の時間が何であるのか」、「どういう意味を持っているのか」、ということを私たちに教えている言葉なんです。なぜ神さまは、私たちに礼拝の意味について教えているのでしょうか。それは、私たちが礼拝の本当の意味を忘れてしまうと、神さまのことを忘れてしまうからなのです。

私たちは、月曜日から土曜日まで色々なことをしながら生活をしていると思います。学校に行くと勉強したり、お友達と遊んだりしています。ある人は学校が終わってから塾に通っているでしょう。ある人は英会話教室に通っているかもしれません。またある人は、野球やサッカーの練習をして、たくさんの試合に出かけているかもしれません。学校がお休みの日には、家族と一緒にどこか

に出かけるということもありますね。こうして月曜日から土曜日までの生活を振り返ってみると、私たちは色々なことをしていることが分かってきます。その一つ一つは、皆さんにとってとても大切なものです。

けれども、ここでちょっと考えてみたいと思います。皆さんは、月曜日から土曜日まで色々なことをしていく中で、どれくらい神さまのことを思い出しているでしょうか。神さまのことなんてすっかり忘れてしまって、自分の思う通りに毎日過ごしているということは無いでしょうか。こう質問されると、ちょっとドキッとしますね。もしかしたら、神さまのことを全く考えないで過ごす一日があるかもしれませんね。

私たちが、神さまのことをほとんど考えないで生活する日がある、神さまのことを全く考えないで生活する日があったとします。そうすると私たちはどうなっていくのでしょうか。恐らく私たちは、「神さまを頼らずに生きる」ということになってしまうと思います。これは、神さまがとても悲しまれることです。神さまは、私たちが神さまのことを信じて、頼りながら生きて欲しいと願っておられます。ですから、私たちが神さまのことを考えず、忘れ去ってしまい、神さまに頼らずに生きて行くようになると、神さまはとても悲しまれるのです。もし、私たちが月曜日から土曜日まで生活する中で悲しいことや辛いことなどが起こった

とします。友だちと喧嘩をしてしまう。怪我をしたり、病気にかかってしまう。自分の思う通りにいなくて困ってしまう。そういう事が起こったとき、神さまのことをすっかり忘れ去り、神さまに頼らずにいると、私たちの心はどんどん落ち込んでしまうかも知れませんね。神さまは、私たちがそのようになったままであることを、悲しまれるのです。

でも、私たちがそういう悲しいことや辛いことにぶつかっても、神さまは私たちの側にいてちゃんと働いて下さっています。神さまは、いつも私たちの側にいて「私を頼って欲しい」、「私があなたを背負って上げるから」と語りかけて下さっているのです。もちろん神さまは、私たちが辛いとき、悲しいとき、悩んでいるときだけでなく、楽しんでいるときも、笑っているときも、嬉しいときにも一緒にいて、私たちのために働いて下さっています。それほどまでに私たちのことを大切に思って下さり、愛して下さっていることを最も鮮やかに知ることが出来るのが、この主の日の礼拝の時間なのです。神さまは、私たちのために礼拝を備えて下さいました。それは、神さまが私たちと出会って下さる時間です。いつも神さまは、この礼拝の中において、聖書の御言葉を通して私たちに語りかけて下さるのです。

今日の聖書の箇所には、律法学者やファリサイ派という人々が出て来ます。この人たちは、イエス様がいつも自分たちのしていることを非難するので、イエス様のことが嫌いでした。でもそれは、彼らが間違った信仰生活をしてきたからなのです。

この人たちとのやり取りの中で、イエス様は安息日について、つまり日曜日の礼拝のことで次のように言われました。「人の子は安息日の主である」と。「人の子」というのはイエス様のことです。イエス様は、「御自分が礼拝の中心にいるんだよ」と教えて下さったのです。ですから私たちは、毎週行われる日曜日の礼拝の中で、イエス様と出会っているのです。そして私たちは、その礼拝の中で、イエス様が私たちのことを愛して下さっていることを深く知り、味わうことが出来るのです。イエス様が私たちを愛して下さるということは、私たちの罪を全て赦して下さい、いつも私たちと共にいて下さり、私たちを支え、守り、導いて下さるということです。その事を教えられ、味わうことが出来るのが日曜日の礼拝です。神さまは、そのような恵みに満ちている時間を私たちのために用意して下さいました。だから神さまは、「安息日を心に留めるように」、つまり「礼拝の素晴らしさを心の中で思いなさい」と教えておられるのです。

だからこそ私たちは、まず第一に、日曜日の礼拝というのはイエス様と最も深く出会えるときで、イエス様の愛をからだ全体で味わえる喜びの時間なんだということを覚えたいと思います。そして第二に、そのような特別な日を心から喜ぶことが出来るように、毎日祈りながら、一日一日を大切にしていきたいと思います。日曜日の礼拝は、イエス様と出会い、イエス様の愛を最も深く味わう、喜びに満ちた時間なのです。 (千ヶ崎基)

[今週の暗唱聖句]

出エジプト記20章8節

安息日を心に留め、これを聖別せよ。

〈ねらい〉

定められた安息日の意味を知り、神さまを礼拝することについて知る。

〈展開例〉

みなさん、昨日までの一週間、どんなことがありましたか？ どんな嬉しいこと楽しいことがありましたか？ 困ったことや辛いこともあったかもしれませんね？（子どもたちの話を聞く。）

礼拝でお話を聞いたように、そんなときも、いつも神さまがみなさんと一緒にいてくださったのですね。〇〇ちゃんが◇◇しているとき、もしかしたら、その時みんなは神さまのことなんか、ちっとも思い出さなかったかもしれませんが、そばにいらっしゃった神さまはどんな風にみなさんのことを見ておられたと思いますか？（それぞれ、みんな考えてみる。）

神さまは、安息日というという神さまを礼拝する日を定められました。一週間に一度のこの日、このようにして、神さまがいつもわたしたちと一緒にいてくれたこと、お恵みや優しさをいっぱいくださったことを感じて、喜んで、感謝して、お祈りして、賛美歌を歌って……神さまとはっきり出会うことのできる日、それが日曜日の礼拝です。

〈お祈り〉

神さま、今日も神さまが決めて下さった日曜日に、教会学校に来て礼拝できたことをありがとうございます。今週も一週間、神さまと一緒に、神さまに守っていただいて元気に過ごせますように。そして、来週の日曜日もみなさんと一緒に心から神さまに礼拝をささげられますように。イエスさまのお名前によって祈ります。アーメン。

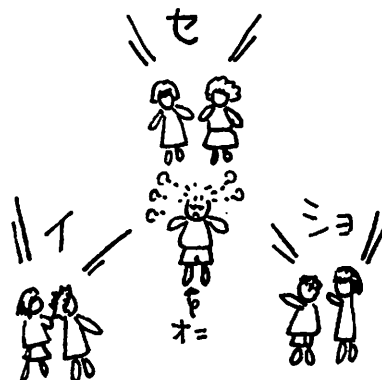
〈みんなであそぼう〉

☆ステレオゲーム☆

○用意するもの なし

○やり方

- ①オニをきめて、別室で待たせる。
- ②残った者で、三文字程度の言葉を決める。
（たとえば「せいしょ」）
- ③子どもたちをグループに分け、それぞれの分担の文字を決める。
（「セ」の人、「イ」の人、「ショ」の人）
- ④オニを呼び戻し、合図で一斉に決められた文字を大きな声で言う。
（「セ」「イ」「ショ」をいっぺんに）
- ⑤オニは、全員の声聞き分けながら、言葉を当てる。
※「教会にあるもの」などヒントを与えながら何回か言ってあげる。
- ⑥オニを交代して繰り返す。



〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ① イエスさまは安息日に何をしました？（→空腹の弟子に麦を食べさせ、病氣の人を治した）
- ② それを見ていた律法学者やファリサイ派の人は喜んだ？（→怒り狂った）
- ③ イエスさまは、悪いことを行ったのでしょうか？（→善を行い、命を救った）
- ④ 律法学者たちは、イエスさまが安息日の主である救い主だということを理解していた？（→理解していなかった）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

- ① 旧約聖書の時代の安息日は何曜日だったか知っている？（→土曜日）
- ② 今の安息日は何曜日？（→日曜日）
- ③ どうして日曜日になった？（→日曜日にイエスさまが復活されたから）
- ④ 安息日はただお休みしていればいい？（→礼拝をする）
- ⑤ 他の日に礼拝をすれば日曜日は礼拝をしなくてもいい？（→特に日曜日を礼拝の日にする）

〈考えてみよう〉

一週間のうち、何曜日が好きでしょうか。学校で好きな科目がある日、大好きな習い事がある日など、楽しみにしている曜日があると思います。でも、その中でも日曜日を特別な楽しみにしているでしょうか。日曜日は神さまを礼拝する日です。イエスさまが復活された日曜日は、神さまから元気をもらえる日です。あまり楽しくない一週間だったり、嫌なことがあった一週間だったりしても、日曜日に礼拝に来ると、イエスさまが元気にしてくれます。だから、私たちも、日曜日に期待して、しっかり備えなければいけません。土曜日の夜に遅くまでテレビを見たりして、次の日の礼拝のときに眠くなったりしてはいないでしょうか。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。毎週日曜日に、教会で神さまを礼拝することができてありがとうございます。イエスさまが復活された日曜日を、私たちがいつも楽しみにしていることができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

- ・六日の生活の中で、主日の礼拝を待ち望みながら日々を過ごす心をはぐくみたい。
- ・安息日に向けて一週間の生活を整える習慣をつけるよう導きたい。

〈展開例〉

- 十戒は（二つ）に分けられます。はじめの（四つ）は私たち（神様）とのかかわりについてです。その最後が今日のところです。
- 「安息日」って何でしょう。創世記1章31節～2章3節を読んでみよう。神様が（この世界）を（六日間）で（創造）され、（七日目）に（安息）なさってこの日を（祝福）し、（聖別）されました。
- 私たちにも、（六日）の間働いて（七日目）に（休む）ことが十戒で命じられるのです。
- もうひとつ安息日について教えられている箇所があります。申命記5章15節を読んでみよう。ここでは、（イスラエルの人々）が、（エジプト）の国で（奴隷）であったが、（神様）の力ある（御手）によって（導き）出されたこと、救われたことを思い起こすために安息日を守るように命じられています。
- では安息日は何のためにあるのでしょうか？
ここまで二つ出てきました。次の三つの中から、正しい意味を二つ選んでみよう。
- ①安息日は神様が世界も、私たちもお造りになり、祝福して下さったことを覚える日（創世記1～2章）。
- ②安息日は神様が休まれた日だから、仕事はもちろん、できるだけ何もしないようにする日。働くことを禁じられたということが大切。
- ③イスラエルの人々にとっては、エジプトでの奴隷の生活から、神様に救われたことを思い起こす日（申命記15:5）。つまり神様に救われたことを思い起こす日。
- ①と③の二つの意味が安息日にはありますね。

○このように安息日は神様に造られた者としての祝福と、神様に救われたことを特に思い起こす日です。つまり、神様を（礼拝）するための日です。だから、その妨げになることを休むのです。

○ルカ6章1～5節で、ファリサイ人の間違いは何でしょうか。働くことを（休む）ことばかり考えて、さきほどの①と③を考えなかったことですね。

○第四戒によって、神様が私たちに（安息）を与えてくださる。つまり、神様の（祝福）の中に私たちを入れてくださるのです。これが神様のみこころです。

○「聖別」するというのは（取り分ける、区別）することです。この日は（神様）のために（取り分ける、区別する）のです。だからこの日は（礼拝）に来るように生活を整えることが求められます。

○旧約聖書の時代、安息日は週の七日目（土曜日）でした。今は週の（初めの日、日曜日）です。これは（イエス様の復活）を記念してのことです。だから安息日は特に（イエス様）の（復活）によって（永遠の命）をいただいて救われている、という恵みを（覚え）て（感謝）する日です。この日を（主の日、主日）といいます。それはやがて入れていただける（天の御国）を想う日でもあります。

〈折り〉

天の神様。あなたは天地を造り、これを祝福して下さいました。私たちのことを祝福して下さい、ありがとうございます。主イエス・キリストが復活して下さい、私たちは永遠の天の御国に生きることができます。感謝します。主の日にはこれからも礼拝に来て、イエス様に救われたことを喜びたいと思います。どうかそのようにお導き下さい。

【目標】

第四戒について学ぶ。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？(分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である)

②改めて御言葉に取り組む

→子どもカテキズム問47～48を生徒と読む。

【ポイント】

安息日とは、神様を覚えるために私たちに与えられた恵みの制度。安息日がなかったら、私たちは容易に神様のことを忘れ去ってしまう。安息日によって神様は私たちの信仰の目を覚まされ、完成の時まで保たれる。さらに安息日は喜びの日である。それは神様御自身が安息日に創造の業と被造世界全てを喜ばれたからである。そしてこの日はキリストの復活の記念日であり、私たちが主にあって勝利を分かち合う日である。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての安息日とは何か？それを生徒と分かち合う。

Q. 日曜日は休みなのに、なぜ教会に行かなくてはならないのでしょうか？休んで家にいるのと、教会に行くのと、どっちが休まると思いますか？

Q. 休むとは、安息するとはどういうことですか？

Q. 優先順位をつけるとしたら、一週間の中で何曜日が一番大事だと思いますか？それはなぜですか？

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 今日学んだ、私たちが日曜日にするべき大切なこととは何ですか？

Q. どんな日曜日が理想ですか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？



テキスト エフェソの信徒への手紙6章1節～3節

ここには信仰共同体の基であります両親の在り方と子供たちへの訓戒が指摘されています。「これは約束を伴う最初の掟です」とある言葉は、実際には、十戒の第五戒に位置していますが、先行する神についての四つの戒めを除きますと、人間相互の在り方を規制した戒めの第一位に位置している重要な戒めであります。それゆえに、多くの聖書翻訳においては、「これは第一の戒めです」と訳しています。

この戒めを正しく理解するためには、神の像に創造された人間とは、如何なる存在者であるのかを前もって認識しておく必要があります。すなわち、人間は単に個として存在しているのではなく、神と向き合う存在者、他者と向き合う存在者（人間と人間、男と女、親と子）、自然と向き合う存在者です。そしてこの関わりの中における個、つまり「この私」なのです。

聖書は他者との関わりを持たない孤立した「個」については語っていません。人間の存在の事実をこう認識して、初めて「子供たちよ、両親に聞き従え、あなたの父母を敬いなさい」が意味を持てきます。

それでは、この訓戒は何を意味しているのでしょうか。

- ①イスラエルにおいては、父は家長として重んじられただけでなく、宗教的儀式の権能のすべては父にありました（創世記27章27-40節）。家庭においては、母も父と同様な重要な役割を持つ立場にありました（箴言1章8節）。
- ②両親は神の言葉を子たちに伝達し宗教的教育をする責任を担う存在者、神に代わって神の権威を行使する代理者として立てられているのです。

それだから、「子供たち、主に結ばれている者として両親に従いなさい」と命じられているのです。つまり、神の代理人としての両親に聞き従うことは神に聞き従うことと表裏一体だからです。

- ③服従の条件。子供たちは両親に如何なる場合でも聞き従わなければならないのでしょうか。それは両親が神の代理人としての役目を果たしている限り、そうあるべきです。すなわち、両親に聞き従うことは、目に見えない神への服従の目に見える形での比喩として、神への信仰として心からの愛と自由の応答であるべきものです。従ってこの命令は単なる血肉のみの父母に聞き従へという教えではありません。
- ④次の「父と母を敬いなさい」との命令は、上記のことと切り離すことはできません。なぜなら、「父と母を敬いなさい」と命じられたとき、両親が人格的にも円熟し、社会的地位もあり、名誉もあるなら、聞き従へとの命令を素直に聞けるでしょう。しかし、これとは全く逆の場合には、この命令には聞く耳を持たないでしょう。たとえ両親が人間的に欠陥があっても、神の代理人としての役目を果たしている限り、両親を敬うことは神を敬うことに他ならない信仰の行為であることを覚えたいと思います。
- ⑤今日「信教の自由」を履き違えているキリスト者の両親が意外と多いのです。つまり、信仰は個人の自由意志に任せるべきであると。
- ⑥現代の家庭、社会、国家、世界には解決が困難な難問が増大しつつあります。その解決のキーポイントの一つは、この戒めにあると言っても過言ではないでしょう。（潮田純一）

カテキズム 子どもカテキズム問51,52

子どもカテキズム

問51 第五戒は何ですか。

答 「あなたの父母を敬え」、です。

問52 第五戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 神さまは、私たちに、お父さんやお母さん、先生やお友だちを与えてくださいました。

ですから、私たちは、神さまの故に、お父さんやお母さん、

先生の教えてくださることを素直に聞き、お友だちを大切にします。

神さまは、そのような人に祝福を豊かに与えると、特別に約束してくださいました。

証契聖句 エフェソ5:21、6:1~3、ペトロ2:17、ローマ13:1~10

参考教理問答 『ハイデルベルグ』104、『ウ小教理』63~66

十戒は、第一戒から第四戒は、神に対する人間の義務について、第六戒から第十戒は、人間の人間に対する義務について記されています。第五戒は、兩者をつなぐ橋渡しの役割をします。

「神の代理人」

父母は、子どもにとっては神の言葉を伝えてくれる「神の代理人」といえる立場にあります。両親は、神に代わって、神からの教えを伝達する者であるが故に敬わなければならないのです。

かつては家父長制度が主流であり、特に家長に対する服従は美德であり、父は絶対的な力を家族に振るいました。生殺与奪の権すら持っていました。しかし、母親に対する同様な服従は考慮されていませんでした。十戒の第五戒は、父と並んで「母を敬え」という点で特殊な教えでした。十戒は、父と母を区別していません。母も父と同様に敬わなければいけないのです（出エジプト21:17、箴言23:22）。私達がこの地上に生まれてきたのは父と母が存在したからです。両親は神からの賜物であり、私達が両親を選択したわけではありません。神が両親を用いて私達をこの地上に生まれさせ、神に代わって私達を育てさせました。そこで、両親の地位、立場は、神の代理人なのです。

「敬う」という言葉には二つの意味があります。第一は、従順であること、第二は、尊敬することです。子どもらの両親への従順と尊敬は、両親が全ての生活において、神への信仰と神の言葉に生

きていることが根底にあります。両親はただ言葉の上で、口先だけで信仰を語り、御言葉を語るのではなく、自分達の生活の全てが「神中心」であり、自らが神の言葉によって生かされていることを子どもに示すことが求められます。その意味で両親は神信仰の模範であるので、子どもは両親に従順かつ尊敬を払わなければなりません。

子どもが成長するに従って、両親は、子どもが自らの口で真の神への信仰を告白できるように折り、教え、育てなければなりません。さらに、全ての事柄を神の言葉に基づいて自分で判断できる、主体性をもった人間となるように育てなければならないのです（エフェソ6:1~4）。

上に立てられた権威に対する服従

第五戒は、単に父母のみならず、家庭内の関係を越えた年長者や上に立つ権威への服従をも教えています。第五戒で神が求めておられることは、神の民が、神の立てておられる集団の秩序に従って、神のご意志に服従して生きることです。権威の源は神です。家庭も、教会も国家も人間の意志によって立てられたのではなく、神の御意志によって立てられた秩序であり、権威です。ですから、私たちは、すべての人間関係において「主に對してするように」主が立てておられる権威と秩序に自発的に尊敬と愛と真実をもって服従しなければならないのです。（ローマ13:1~7、コロサイ3:22~23、ペトロ2:13~19）（久保浩文）

テキスト エフェソの信徒への手紙6章1～3節

カテキズム 子どもカテキズム問51,52

〔単元のねらい〕

今日の第五戒「あなたの父母を敬え」は、親が神の言葉に従い、神の教えを中心とする生活を送るが故に、子は父親と母親を敬い、従うということが基本です。しかし、この戒めは、単に父と母への服従のみならず、年長者、権威者、対等の者、年下の者との関わりにまで広げられ考えられるものです。信仰者の親を持たない子供たちもいるはずですから、主にあって全ての人々に対する愛のある関わり方を考えられるよう導きたい。

「父と母を敬う心」

今日の礼拝でみんなと見ていきたい神さまの言葉は、十戒の第五番目、「あなたの父と母を敬え」です。先週の礼拝でもお話ししたように、十戒の第一番目から第四番目までが、神さまと私たちの関係について教えている戒めです。今日の第五番目からは、みんなと周りにいる人たちとの関係について教えている戒めが続いています。

みんなは、お父さんやお母さんが大好きですか？「お父さんはいつも怒るから嫌い。でもお母さんは好き」という人がいるかも知れませんね。その反対に、「お父さんはいつもどこかに連れて行ってくれるから大好きだけど、お母さんは勉強しなさいって何度も言うからあまり好きじゃない」と思っている人もいるかも知れませんね。「いつもお父さんとお母さんが大好き」、「ときどきお父さんとお母さんのことが嫌いになる」というように、みんな色々な気持ちでお父さんやお母さんに接していると思います。お父さんやお母さんが正しいことを言っても、「いやだ、言うこと聞きたくない」と反発することもあるかも知れませんね。でも、基本的にはみんなお父さんとお母さんのことが好きだと考えていると思います。

例えば、みんなは父の日や母の日に何かをしたことはありませんか。先生は、小学校の時に、父の日や母の日にカードを書いて渡したことがあります。母の日にはカーネーションの花を買って一緒に渡したことがありました。父の日や母の日は、

お父さんやお母さんに感謝の気持ちを表す日ですね。お父さんやお母さんのことが好きだ、感謝している、という気持ちがあるから、カードを送ったりするんだよね。でも、父の日や母の日だけ、自分の気持ちを表せば良いのかな。その時だけ感謝をすれば良いのかな。みんなはどう思いますか。

今日の十戒は、あなたのお父さんやお母さんに対して、「父の日や母の日だけ感謝をすれば良い」とか、「その日だけは特別に、お父さんやお母さんの言うことを良く聞くように」とは言っていません。いつも、お父さんやお母さんが言ってくれたことを素直に聞くように教えています。

では、なぜみんなは、自分のお父さんやお母さんの言うことを素直に聞かなくちゃいけないんでしょう。それは、みんなのお父さんやお母さんたちは、日曜日の礼拝に出て、神さまの教えを聞き、神さまの愛に力づけられて生きているからです。みんなのお父さんやお母さんも、みんなと同じように、時々神さまが喜ばれるような生き方が出来ないときがあります。なぜかという、お父さんやお母さんたちも、みんなと同じく、神さまの前に罪人だからです。でも、イエスさまが十字架の上で私たちの罪を取り除いて下さったことを信じていますから、お父さんもお母さんもイエスさまの愛で心が満たされていくんです。お父さんやお母さんは、神さまの教えを聞き、イエスさまの愛を知っています。だから、神さまの教え、イエス

さまの愛を、みんなに教えることができる人なんです。お父さんもお母さんも、神さまの教えを聞き、神さまの愛に満たされ、神様に従って生きています。神さまは、お父さんやお母さんを通して、ご自分の教え、愛を伝えようとしているんです。だからみんなは、お父さんやお母さんの言うことを素直に聞き、従っていくことが大切になってくるのです。そのために神さまは、「あなたの父と母を敬え」と教えておられるのです。

でも、ここにいるお友だちの中には、自分のお父さんやお母さんが教会に来てないという人もいます。それじゃ、「わたしのお父さんやお母さんは、教会にきて神さまの教えを聞いていないし、イエスさまの愛も知らないから、言うことを聞かなくても良いんじゃないかな」ということになるのでしょうか。いいえ、違います。今日の子どもカテキズム問52には、こういう言葉が出て来ます。「第五戒で神さまが願っておられることは、何ですか」、「神さまは、私たちに、お父さんやお母さん、先生やお友だちを与えて下さいました。ですから、私たちは、神さまの故に、お父さんやお母さん、先生の教えてくださることを素直に聞き、お友だちを大切にしますのです」。これは、「みんなのお父さんやお母さんは、神さまが与えて下さっているんですよ」と教えている言葉です。お父さんやお母さんが教会に来ている人ではなくても、そのお父さんやお母さんは神さまがみんなのために備えて下さっているお父さんであり、お母さんなのです。みんなのことを愛しておられる神さまが、「このお家の、このお父さんとお母さんとの間にあなたを生まれさせる」、「この

お父さんとお母さんと一緒に生活させてあげる」として下さっているのです。こうして神さまは、みんなのことを愛をもって導いておられるのです。だから、愛に満ちている神さまからの贈り物として、自分のお父さんやお母さんを大切にすることが大事なのです。

しかも、カテキズムの中では、お父さんやお母さん以外にも、みんなの周りにいる学校の先生、教会学校の先生、そしてお友だちのすべてが、愛の神さまから与えられているとも教えられています。だから、みんなの先生たちやお友だちのすべてが、自分のために神さまが与えて下さった人、備えて下さった人として大切にしていけることも大事になってきます。なぜ神さまは、そのように教えておられるのでしょうか。それは、神さまが与えて下さったお父さんやお母さん、先生やお友だちをみんなが大切にしていけることは、神さまのことを愛し、大切にすることと同じだからです。

みんなの周りには、お父さんやお母さん以外にも、お兄さんやお姉さん、弟や妹もいます。学校に行けば先生や同級生のお友だち、上級生、下級生もいます。そのすべての人たちが、みんなが愛すべき人たちなんです。みんなは、日曜日の礼拝に出席してイエスさまと出会い、イエスさまの愛を教えられます。その愛をもって、みんながすべての人たちを愛していくことをイエスさまは期待しています。お父さんやお母さんをはじめ、すべての人たちが、神さまの愛に満ちた導きによって、みんなのために与えられていることを感謝したいと思います。すべての人たちを愛し大切にすることを、神さまは祝福して下さいます。（千ヶ崎基）

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記20章12節前半

あなたの父母を敬え。

〈ねらい〉

神様は、わたしたちにお父さんやお母さんを与えて下さった。だからわたしたちはお父さんやお母さんの言うことを素直に聞きます。同じようにお友だちも大切にすることを学ぶ。

〈展開例〉

あなたは、どこから生まれてきましたか？
そうですね。お母さんからですよ。あなたのお父さんとお母さんが結婚してあなた方が生まれたんです。ならば、どうしてお父さんとお母さんは知り合って結婚したんでしょうねえ。どこで会ったか？ ？とか、聞いたことはありますか？

実はね、あなたたちのお父さんとお母さんが結婚するのは、神様がずっと前から決めていたんです。その通りにお父さんとお母さんは結婚して、あなたがたが生まれたんです。家に帰ってそのことをお父さんやお母さんに教えてあげて下さいね。あなたが生まれたのは、神様があなたがたのお父さんとお母さんを結婚させて下さったから。あなたが生まれたのも神様がずっと前から決めていたんです。

神様がわたしたちにお父さんやお母さんを与え

て下さったんだから、お父さんやお母さんの言うことは聞かなくちゃいけませんよね。同じように、お父さんやお母さんは、そのまたおじいさんやおばあさんから生まれました。おじいさんやおばあさんの言うことも聞かなくちゃね。

あなたのお友だちの名前を教えてください。あなたのお友だちも神様が**ちゃんのお友だちになるようにって前から決めていたんです。だからね。神様が与えて下さったお友だちも大切にしましょうね。

〈お祈り〉

神様。わたしにお父さんとお母さんを与えて下さってありがとうございます。わたしは神様の子どもとして、お父さんやお母さんの言うことを良く聞いて従うことができますようにお願いします。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。

〈ゲームをしよう〉

「わたしのお父さん、お母さんを紹介します」
ゲーム

ひとりひとり自分のお母さん、またはお父さんの大好きなところをはなす。

〈やってみよう〉

☆お絵がき☆

お父さん、お母さん、どちらかの似顔絵を描きましょう。



〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ①父と母を敬うことは正しいこと？（→正しいこと）
- ②どうして？（→神さまからの教えだから）
- ③神さまはこの教えにどのような約束を与えてくださった？（→幸福になり、地上で長く生きることができる）
- ④それでは、お父さんはいばってればいいの？（→神さまがするように子どもを育てなければならぬ）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

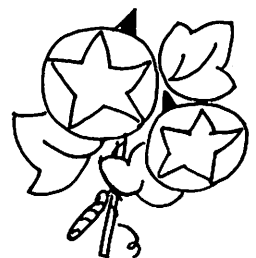
- ①お父さんとお母さんだけを敬えばいいのですか？（→先生やお友だちなどもみんな大切にすること）
- ②周りの人を大切にすることで、神さまは関係ないのですか？（→父母を敬うことによって神さまを敬う）
- ③お父さんお母さんが、神さまの言うことを聞いてはいけないと言ったらどうしますか？（→神さまの言うことを聞かなければならぬ）
- ④それでは神さまを信じていない人のことは敬わなくてもいいのですか？（→神さまが与えてくださった人としてみんなを大切にすること）

〈考えてみよう〉

身の回りに先生と呼ぶ人がどれくらいいますか。学校の先生、ピアノの先生、サッカーの先生、教会の先生、いろいろな先生がいます。先生とは、何かを教えてくれる人です。それでは、今、自分でしゃべっている言葉を教えてくれたのは誰でしょうか。お父さんお母さんなど、家族の人ではないでしょうか。まず言葉を教えてもらったから、学校の先生ともピアノの先生ともお話ができるのです。お父さんお母さん、家族の人に感謝しなければいけません。そして、特に、神さまのことを教えてくれる人がいることに感謝しましょう。お父さんお母さん、教会のお兄さんお姉さんと神さまのお話ができることはとてもうれしいことです。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。周りにはたくさんの方がいます。みんなのことを大切にすることができますように。お父さんやお母さん、教会の人たちの言うことをよく聞き、また、自分よりも年下の子たちにやさしくできるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

人は父母を通して生まれる。それは神様が与えて下さった秩序であり、単なる生物学的な現象ではない。したがって父母を敬うことは人間関係の基本。父母が、神さまが与えて下さった賜物であることを理解する。子どもたちがそのようにとらえることによって、父母を通して神の恵みを思い、そこから父母を大切にすることが生まれるよう導きたい。そしてこの戒めが、目上の人々、さらにすべての人間関係にまで広がることから、神が立てた社会の正当な秩序を恵みとして理解する。

〈展開例〉

- みんなは、お父さんとお母さんから生まれました。みんながお父さんとお母さんを選んだのではないですね。ではだれがお決めになったのでしょうか？
- ①だれが決めたのでもない。たまたまそうなっただけ。
- ②神様がちゃんとお決めになって、私たちひとりひとりに、父母が与えられている。もちろん②ですね。ということは、みんなのお父さんやお母さんは、(神様)がみんなに与えて下さったのですね。ということは、(神様)を敬う人は、(父母)を敬わなければなりません。だから、十戒で、(あなたの父母を敬え)と命じられているのです。
- イスラエルでは、両親は、(神様)のことを(子どもたち)に伝える神の代理人として立てられていました。だから、(父母)に聞き従うことは、(神様)に聞き従うことになったのです。
- 父母は、子どもが(神様)を信じて(神様)に従うように(教え、導か)なければなりませんでした。
- この戒めは、父母のことだけでしょうか？
そうではありません。目上の人のことも指しています。どんな人のことが考えられるか、あげてみよう。(兄、姉、教会学校の先生、学校の先生、など)。こういう人たちも、(神様)が与えて下さった人たちです。(目上)の人たちだけではありません。(友だち)も、(神様)が与えて下さったのです。
- だから、父母、目上の人を教えることを大切に聞き、友だちを大切にしましょう。
- 父母、目上の人を言うことでも、神様の御言葉に反することを命令されたときも従わなくてはならないのでしょうか。(そうではありません)。むしろ父母や目上の人たちが(神様)に従うことができるように祈らなければなりません。そして相手を大切にするのはです。
- 私たちは父母をどうして敬うのでしょうか？
- ①親が神様に従う人だから。そうでない親は敬えない。大切にない。
- ②親が優しく、いい所に連れて行ってくれるから。立派な偉い人だから。失敗ばかりの親、だらしのない親は敬えない。
- ③親は神様が与えて下さった恵みだから。
(もちろん③。③の視点を強く生徒に伝えたい)
- 子どもカテキズム問51を覚えよう。
「神様は、私たちに、お父さんやお母さん、先生やお友だちを与えてくださいました。ですから、私たちは、神さまの故に、お父さんやお母さん、先生の教えてくださることを素直に聞き、お友だちを大切にするのはです。神様は、そのような人に祝福を豊かに与えると、特別に約束してくださいました。」

〈祈り〉

天の神様、あなたは私たちに父母、先生など目上の人たち、友だちも与えて下さいました。そしていろいろなことを教えて下さいます。あなたが与えて下さった大切な人たちですから、敬い、大切にしたいと思います。私たちに、父母を敬う心をお与えください。

【目標】

第五戒について学ぶ。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？(分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である)

②改めて御言葉に取り組む

→エフェソの信徒への手紙6章1～3節を生徒と読む。

【ポイント】

第五戒では、隣人との関係においても「神を神とする」ことが求められている。この戒めは、ただ人間の権威と年功の序列を説いているのではなく、神様が定められた秩序を証している。御言葉が語るように、神様が定めた正しい秩序である親子関係が崩壊するならば、人間は幸福になることも、地上で長く生きることもしかない。また両親を敬わないということは、その二人から生まれた自分自身を敬わないということにもつながる。神様の定められた秩序を恐れることなく放縱に振舞

うならば、親子関係という人間社会の軸と共に、そのすべてが崩壊することになる。極めて現実的な戒めである。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての父母を敬うということとは何か？ それを生徒と分かち合う。

Q. 神様は父母を敬えと教えておられますが、その理由は何だと思えますか？

Q. 両親を敬うことなしに、心から落ち着いて平和な心で生きることができるでしょうか。考えてみましょう。

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 今日あなたが父母を敬うこととは、具体的にどういうことでしょうか？

Q. どんな親子関係が理想ですか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト 創世記1章20節～31節

〈命の主である神〉

この箇所は、天地の造り主なる神が生き物を創造されたこと、また、被造物の冠として人を創造されたことを語る御言葉です。

創世記は、1章で六日間にわたって神の創造の御業が行われたことを語り、2章に入って、七日目の祝福と聖別を教えています。その中で、生き物の創造は、第五日(20～23節)と第六日(24～31節)の御業です。創世記の自然観においては、木や草といった植物は生き物ではなく、大地に従属するものと見なされており、第三日に創造されました。生き物とは、ごく素朴に「目で見て動きのあるもの」という理解なのでしょう。第五日に、空と海の中に棲む生き物が創造されました。第六日が地上の生き物であり、地の獣、家畜、土を遣うものが創造されました。そして最後に人が造られて、創造の御業が締めくくられます。

このことを通して第一に学ぶべきは、造り主なる神こそが命の根源であられ、命の主であられるということです。生き物の創造も「言葉による創造」であり、そこには造り主なる神の善い御心と愛があります。命は決して偶然の産物ではなく、造られた方の意志によってあらしめられており、生へと決定的に方向付けられているのです。命の造り主なるお方が、「産めよ、増えよ、地に満ちよ」とおっしゃっておられます。そうであるならば、私たちは決して命を軽んじてはならない、命を粗末にしてはなりません。これは、すべての生き物について当てはまることです。

〈神のかたちとして造られた人の尊厳〉

しかし、第六戒で「殺してはならない」と命じられる第一義は、「人を殺してはならない」ということです。それは、人がただ生き物であるのではない、人は獣ではなく、〈神のかたち〉に造られた生き物であるからです。

造り主なる神は「我々にかたどり、我々に似せ

て、人を造ろう」とおっしゃって、その通り、「神はご自分にかたどって人を創造され」ました。ここから、「人は〈神のかたち〉に創造された」と言います。この〈神のかたち〉とは、目に見える物質的・肉体的な意味のかたちではなく、人が意思や感情を持つ人格的な存在であり、また神と交わりを持つ霊的な存在であることを意味します。人は、物事を理解して取り組み、自分のことを自分で考え、計画し、また他者と交わりを持つ、人格的存在として造られました。それ故に、人は、他者から区別される個性を持ち、同時に他者とかかわりを持つ一つの主体であるのです。また人は、神を求め神に祈る存在でもあります。

この〈神のかたち〉の具体的現れが、男と女に造られたことであり、また大地を治める務めが与えられたことです。人は、男と女という交わりを土台にして他者と交わりを持ち、自らに与えられた責任を果たして社会を形成します。人は、これらを通して、また神を礼拝して、神の栄光をあらわす存在であり、それ故、人は「被造物の冠」と呼ばれます。ここに人の尊厳と光栄があります。

〈人の命は神のもの〉

こうして、人は神のかたちである故に、殺すことが禁じられます。それは、まったく付随する条件なしの、絶対的な禁止です。人は〈神のかたち〉であり、誤解を恐れず大胆に言うならば「小さなカミ」なのであり、人を殺すことは神殺しに等しいのです。ですから、他者の命に危害を加えることはもちろん、自分の命を自ら奪うことも禁じられます。人の命は、被造物として神のものであり、神のかたちに造られて神のものなのであり、二重の意味で神のものです。

さらに、キリスト者の命はキリストの十字架の犠牲によって贖い取られているのであり、三重の意味で神のものです。いったいどうして命を粗末に扱うことができるでしょうか。(望月 信)

カテキズム 子どもカテキズム問53,54

子どもカテキズム

問53 第六戒は何ですか。

答 「殺してはならない」、です。

問54 第六戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 神さまが私たちにいのちを与えてくださいました。

人を殺してはいけないということはもちろん、心の中で人を憎むこと、

無視すること、いじわるを言ったり、してはいけない、ということです。

神さまが御覧になれば、それらは人殺しと同じです。

ですから、私たちは、共に生きることを喜び、自分のいのちも大切にします。

証換聖句 マタイ5：21～22

参考教理問答 『ハイデルベルグ』105～107、『ウ小教理』67～69

「殺してはならない」とは、人の人生が、自分であるにせよ他人であるにせよ、人為的な仕方では閉じられてはならないということの意味しています。今日、本当に殺人によってではないとしても、人を死へと追いやる要因は数限りなくあります。殺してならないとは、死に至らせる要因を遠ざけ、神から与えられた命を大切に守ることを意味しています。ですから、日常の食生活を含め健康に留意することは、大切な信仰生活です。私たちは、神から与えられた命を、できるだけ健やかに保つ義務を負っています。

「生きている」ということを霊的に理解する前に、「呼吸している」というレベルで先ず理解することが必要です。「死ぬ」とは苦しいことです。安らかに死ぬにせよ、病気で死ぬにせよ、私たちは、最後の息を引き取るそのひと息まで、力を振り絞って呼吸を続けます。その「ひと息の呼吸」をする力さえなくなったとき、人は死にます。呼吸は生きることへの無意識的な意欲です。その意欲を決して失ってはなりません。意欲がいくらあっても出来なくなるときに、人は死を迎えます。

私たちは、信仰によって、死んでいく人生を、神が閉じてくださったと感謝をもって受け入れることができます。元気で生きていても、病気が老衰で死にます。あるいは、事故や災害によって、命を失うかもしれません。神が、それらを用いて

人生を閉じてくださいます。人生の終わり方は神の御手に委ねるしかありません。「神が命をおとりになった」と理解するとき、人は初めて「死」を受け入れることができます。殺人とは、神にしかできない行為に、人が介入することです。人は、決して、人の命をとることができません。

命の大切さを覚えるとき、「殺してはならない」という戒めに含まれる次の意味に進むことができます。それは人を尊ぶことです。その人がいるのは、神が命を与えてくださったからであり、神が生きることを許しておられるからです。ですから、その人を尊ばないとすると、その人を生かしておられる神の意図を踏みにじることになります。

殺人を行う凶器は、ピストルやナイフや毒物だけではありせん。「あの人は死んだらよいのに」という言葉を口にするなら、それは言葉による殺人です。悪口や意地悪は、神の目から見ると、人を殺す凶器となります。そのような意味では、凶器が日常生活のなかで無制限に用いられています。

キリスト者は、この社会にあって、命を尊びます。イエス様は、生きていることを隣人と共に喜ぶ人生に、弟子たちを招かれます。この喜びに感謝するとき、人を殺す恐ろしさに気がきます。「殺してはならない」という否定文は、「生きる喜びを感謝する」という肯定文に支えられて、初めて意味を持ちます。

(岩崎 謙)

テキスト 創世記1章20～31節

カテキズム 子どもカテキズム問53,54

〔単元のねらい〕

「殺してはならない」という神様の戒めは、子どもたちにとって遠いことではありません。この戒めは、実際に人の命を奪う行為だけでなく、心の中で他者に対する憎しみ、恨み、嫌悪感を持つことにも言及しています。周りの人々の人格を尊び、命を大切に、共に生きて行く喜びをもって神様の素晴らしさを感じていくことが出来るように導きたい。

「いのちを大切にす愛」

今日の十戒の学びは第六番目の戒め、「殺してはならない」です。神さまは、私たちに「あなたは殺してはいけません」と語りかけています。この「殺す」という言葉は何だかとても怖い言葉だと思いませんか。ここにいるみなさんは、夏に飛んでいる蚊が自分の体にとまって血を吸っていたら、その蚊を殺すということぐらいはしたことがあると思います。自分の体を守るために蚊を殺すとか、生きて行くために牛や豚や鳥を殺して食料とする。私たちが生きて行くために家畜や虫を殺すということはいけないことでしょうか。神さまは、そういう意味での「殺す」ことは許しておられます。

では、十戒の中で教えられている「殺してはいけません」ということは、何のことを言っているのでしょうか。十戒は、第一戒から第四戒までが「神さまと私たちの関係」について、第五戒から第十戒までが「わたしと他の人たちとの関係」について教えている戒めです。ですから、今日の第六戒で「殺してはいけません」と言われているのは、人についてのことです。つまり、「人を殺してはいけません」という教えなんです。

ここにいるみんなは、お家の人や学校のお友だちを殺してしまう殺人をして警察に捕まることなんかしたことないと思います。それじゃ、神さまが「殺してはいけません」と教えていることは、自分とはあまり関係ないのでしょうか。自分にはあまり当てはまらない教えに聞こえてきます。

でも、人が人を殺してしまうということは私たちの周りでも起きています。テレビや新聞などを見ると、毎日、人を傷付けるような事件がたくさん起こっています。みんなと同じ年くらいのお友だちが殺されてしまうという事件も伝えられています。また、どこかの国で戦争が起きていることも伝えられています。人が人を殺すということが、今も世界のどこかで起きています。ですから、人が殺されてしまうということは、私たちの近くで起きていることなんです。

人が殺されるということは、とても悲しいことです。家族の一人が殺される、お友だちが殺されるということが起こると、たくさんの人たちが悲しみます。つらい気持ちになります。今日もどこかで、そのような悲しいことに直面している人もいます。でも、ここにいるみんなは、そういう経験をしたことがなければ「やっぱりこの戒めは自分にはあまり関係ないんじゃないかなあ」と思うかも知れません。「実際に人を殺してその人の命を奪ってしまうなんて、自分はそんな怖いことできないし、したいとも思わない」と思うかも知れませんね。でもこの戒めは、私たちが本当に人を殺して命を奪ってしまうことだけを禁じている教えではないんですよ。

例えば、皆さんはお友だちとケンカをして、「あの子いやだなあ」とか、「あの子なんていなければ良いのになあ」なんて思ったことありませんか。学校で人気のあるお友だちのを見て、「あの

子だけ人気があって面白くない」なんて思ったことありませんか。お家の人に怒られたり、叱られたり、何度も注意されたりした時に、「うるさいなあ、お父さんもお母さんもいなければ良いのに」と、心の中で考えたりしたことはありませんか。先生もそういう気持ちを持ったことがたくさんありました。

でもね、こういう気持ちを心の中で持つことも「人を殺すことなんだよ」と神さまはお語りになるのです。新約聖書のヨハネの手紙一3章15節には、「兄弟を憎む者は皆、人殺しです」という御言葉があります。この御言葉は、第六戒の「殺してはならない」と関係のある言葉です。学校のお友だちやお家の人に対し、心の中で「いやだなあ」とか、「憎たらしいなあ」とか、「いなければ良いのになあ」と思うと、心の中でお友だちやお家の人のことを殺しているのと同じことになってしまうんです。また、もしみんなの心の中で、「あの子いやだなあ」とか、「あの子憎たらしいなあ」とか、「あの子いなくなれば良いのになあ」と思う気持ちがどんどん大きくなってしまったら、その思いが行いとなって、本当に人を殺してしまうという悲しいことが起きるかもしれないのです。

その他にも、みんなの周りでお友だちをからかったり、いじめたりするようなことが起きていませんか。もし起きていたら、それも人を殺すことと同じになります。なぜかと言うと、お友だちをからかったり、いじめたりすることは、その人の気持ちを傷付け、その人の存在を踏みにじることになるからです。

では、なぜ神さまは、私たちがそうした心を持つことによって人を殺してしまうことをしないよ

うにと言われるのでしょうか。今日の聖書の箇所には、神さまが世界をお造りになられた時の話があります。神さまは、六日目に人を造られました。その時、神さまは、人間を神さまのかたちに似せて造られました。ということは、みんなも、みんなの周りにいるお友だちもお家の人も、神さまから命を与えられ、神さまのかたちにつくられているわけですね。私たちが、神さまに似せて造られた周りの人たちを殺してしまうということは、神さまを殺すことになってしまいます。私たちが、心の中で「あの子いやだなあ」とか、「あの子憎たらしいなあ」とか、「あの子なんかいなければ良いのになあ」と思うことは、神さまのことを、「いやだなあ」、「憎たらしいなあ」、「いなければ良いのになあ」と思うことと同じになり、私たちを愛して下さっている神さまを馬鹿にすることになってしまうのです。もちろんそれは、神さまがとても悲しまれることです。私たちが神さまを愛さない、周りの人たちを愛さないということになると、私たちの周りで心の殺人が起こり、神さまを深く悲しませ、辛いことや苦しいことがどんどん起こってくるのです。

神さまは、イエスキリストの十字架を通して、私たちを愛して下さっています。そして、私たちが人を愛するように願っています。みんなの周りに愛や希望や喜びが満ちていくように願っています。だから私たちは、人を傷付けるような心の殺人から遠ざかり、自分の命も周りの人たちの命も大切にし、すべての人たちと愛し合いながら生きることができるよう祈りたいと思います。神さまは、そういう生き方を心から喜んで下さいます。

(千ヶ崎基)

[今週の暗唱聖句]

出エジプト記20章13節

殺してはならない。

〈ねらい〉

まわりの人に対する憎しみ、恨みなどを持つことなく、共に生きていくことのすばらしさを学ぶ。

〈展開例〉

一郎君と次郎君。一歳違いの兄弟がいました。

あるとき、お兄ちゃんの一郎君がお母さんのお財布からお金を盗んでいるところを、次郎君は見えてしまいました。「お兄ちゃんなにしているの。お母さんのお財布からお金を取ったでしょう。僕見たよ。お母さんに言ってやろう。怒られるよ。」「なんだと〜。いいか次郎、黙ってるよ。もし言ったらただじゃおかないぞ。」「やだよ。やだよ。絶対言うよ。」

ふたりは、取っ組み合いを始めました。そこにお母さんがやってきました。

次郎は、お兄ちゃんがお母さんのお財布からお金を盗んでいたことを話しました。一郎君は、お母さんから叱られました。一郎君は、弟がいなければ良いのと思いました。

さあ、みんなはどう思いますか？

一郎君のことをどう思いますか？

弟の次郎君を与えて下さったのは、神様。一郎君が弟の次郎君がいなければ良いと言ったら神様のなさったことに反対することになる。だから神様なんかいなければ良いと言うのと同じなんです

ね。神様がとても悲しまれることです。どんなことがあってもお友だちや兄弟をそんなふうにするのは、神様がとても悲しまれることですから決して思ってははいけません。

自分と同じように兄弟やお友だちを大切にしましょうね。

〈お祈り〉

神様、わたしたちがいつも兄弟や、お友だちを大切にすることができるようにしてください。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。

〈ゲームをしよう〉

「お友だち大好きゲーム」

隣のおともだちと握手をする。向きを変えて違うお友だちと握手をする。

今度は、向き合ってお互いの手を合わせてパンとたたく。

手を下から上へパン。上から下へパン。向きを変えて違うお友だちとパン。

次は、両手を上げて上でパン。違うお友だちとパン。

最後に、「**ちゃん好き」と言って抱き合う。違うお友だちと抱き合う。

先生と抱き合う。

※抱き合うのは、欧米人がするハグの要領で。

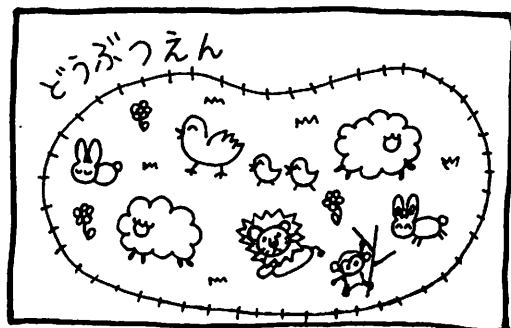
〈やってみよう〉

☆お絵がき☆

一枚の画用紙に動物園の柵を描きます。

柵の中に子どもたちが動物の絵を描きます。

みんなで一枚の画用紙に絵を描き、みんなで一枚の絵を完成させます。



〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ①神さまは人間を誰にかたどって造られた？（→神さまご自身）
- ②他の動物も神さまのかたちに造られた？（→人間だけ）
- ③男の人だけ造られた？（→男と女に造られた）
- ④神さまが造られたものは良かった？（→極めて良かった）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

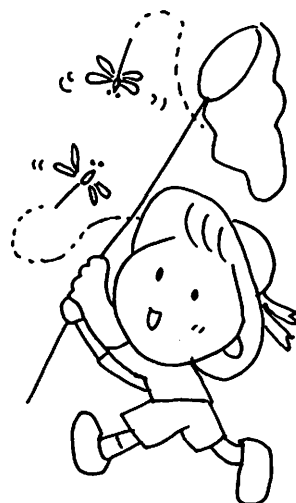
- ①人は自分の力で生まれてきましたか？（→神さまから命を与えられた）
- ②殺さなければ何をしてもいいのですか？（→人を憎むこともいけない）
- ③それなら誰でも一緒に生きないで一人でいればいいのですか？（→共に生きることを喜び、人を愛さなければならぬ）
- ④自分の命は自分のものですか？（→神さまのものとして大切にしなければならぬ）

〈考えてみよう〉

どうして人を殺してはいけないか、考えたことがあるでしょうか。死んでしまった命はもう二度と元に戻らないから。家族の人やお友だちが悲しむから。そんなふうに考えられると思います。しかし、それ以上に、神さまが悲しまれるから、というふうに考えられるでしょうか。私たちが、人に悪口を言ったり、「こんな奴いなくなればいいのに」と考えてしまったりするときにも、神さまはとても悲しんでおられるのです。他にはどんなことを神さまは悲しまれるか、考えてみましょう。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。私たちが、息をして、食べ物を食べて、生きていけるのは、神さまの恵みです。自分の命も、他の人の命も、心から大切にすることが出来ますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

命の大切さを教えるとともに、その根拠を神様との関係で理解すること。

外的にも内的にも殺してはならない、という禁止事項としてだけでなく、自己と他者の生きることの積極的な意義と尊さを、神に与えられた生として受け止めるように導きたい。特に人が神にかたどって創造されていること、すなわち神の特別な祝福を受けて造られたことを覚えたい。従って「殺すこと」は「神のかたち」を破壊することにはかならない。

〈展開例〉

- 今週の暗唱聖句を言ってみよう。(殺してはならない)。これは十戒の第(六戒)ですね。
- 私たちは人を殺したことはないでしょう。けれどもニュースを見ていると人が人を殺す、という恐ろしい事件が起っていますね。それから戦争も絶えることはありません。
- では実際の殺人をしなければ、この戒めはそれでよいのでしょうか。ヨハネの手紙一3章15節を読んでみよう。ここで「人殺し」と呼ばれているのは、兄弟を(憎む)こと。つまり、殺人の(原因)になる(心)の中の動きが言われています。(心)の中で(殺してはならない)という戒めを破っているのですね。(心)の中で(人殺し)をすることになるからです。
- (心)の中での殺人って、例えばどんな気持ちでしょうか。(あんな人いなければいいのに)、と思うことなど。一緒に考えてみよう。
- そういう気持ちが言葉や行いに現れるとき、どんなことが起こりますか？ みんなの身近なところでもあるかもしれないね。考えてみよう。
- (友だちをいじめたり、無視したりすること、「おまえなんかなくていい」と言う)など。
- この戒めでは、殺してはいけないということだけではなくありません。求められていることがあります。それは、人の(命)を(大切に)することです。その人がそこで(生きて)いること、(生活)していることを(大切に)することです。
- なぜでしょうか？ 創世記1章27節から考えてみよう。人は(神にかたどって)創造されました。(神のかたち)とは、人が(神様)を喜び、人と人が愛し合って生きるように造られたということ。神様から(特別な祝福)をいただいていることなのです。
- 自分の命と人の命は、(神様)から、特別に(祝福)されて造られました。だから、殺すことは、(神のかたち)を破壊することになるのです。
- 私も(ほかの人)も、(神様)から(命)をいただいて、生きています。お互いに大切に合って一緒に(生きる)ようにと(神様)が(命)を与えてくださったのです。私や他の人の命は(神様)のもので。だから、これを大切にすることが、私たちが(幸せ)になることなのです。あなたと神様とが、あなたと人とが、一緒に生きることはすばらしい神様の恵みです。

〈折り〉

天の神様、私たちには、人を憎む罪の心があります。どうかお赦してください。私たちは、神様のかたちに造られました。この祝福を感謝します。だから、人の命も自分の命も神様のもので。人の命、自分の命を大切にすることをとお与えください。一緒に生きることを喜ぶ心をお与えください。

【目標】

第六戒について学ぶ。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→子どもカテキズム問53～54を生徒と読む。

【ポイント】

人を殺す、人の命を取るということは神様にしか許されない行為であり、人は、神様が人間に特別に尊いものとして与えてくださった命を、勝手な思いで扱ってしまってはならない。それは人の命に対してはもちろん、自分自身の命についても同様である。青少年の自殺が増加している今、自殺を明確に禁じる掟としての第六戒である。また主イエスは、実際の殺人はもちろんのこと、思いや言葉での殺人もれっきとした第六戒違反として禁じておられる。その理由はなぜか？ それは

自分とすべての他人の命が、ないがしろにされて良いものではなく、神様にとっては主イエスをそのために十字架に付けるに値する程尊いからである。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての人や自分の命を尊ぶということは何か？ それを生徒と分かち合う。

Q. 人や自分を殺してしまいたいと思ったことがありますか？

Q. 人や自分を殺すことを、神様は悲しまれるでしょうか？ 神様はなぜそれらを禁じておられるのだと思いますか？

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 今日あなたが人と自分の命を大切にすることは、具体的にどういうことでしょうか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト イザヤ書2章1節～5節

〈アッシリアの脅威の時代〉

この御言葉は、預言者イザヤに与えられた終わりの日の幻です。とりわけ、終わりの日を「平和」という視点から見つめています。ほぼ同じ御言葉がミカ書4章1～3節にもおさめられています。

イザヤは、南ユダのウジャヤ王が死んだ年に召命を受け、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤ王時代に活躍した預言者です。北イスラエル王国と南ユダ王国にアッシリア帝国の脅威が迫っていた時期であり、紀元前720年、北イスラエルはアッシリアによって滅ぼされます。しかし、南ユダは不思議な神の御業があり、危機を乗り越えてなお存続します。列王記下18～20章をお読みください。

〈イザヤの見た幻〉

「終わりの日」とは「来るべき時代」ということです。「主の神殿の山」とは、神殿のあるシオンの山のことであり、ここでは、そこに主なる神がおられるとみなされています。ですから、シオンの山から出る主の教え、御言葉に聴き従うべきです。また、このシオンの山はどの峰よりも高くそびえるのであって、イスラエルだけではなく、多くの民が主の御言葉に聴き従う時代が来ます。それが、「終わりの日」「来るべき時代」です。

そのときには、すべての国民が主の御言葉によって治められ、裁かれます。ここではとりわけ国と国の平和に関心があります。主なる神は平和の福音をもたらしてくださるのであって、終わりの日には、互いが互いに向かって剣を上げることはありません。武力によって国と国が争う時代は終わりを告げます。むしろ人は鋤を取り鎌を手にして、日毎の務めに励むのです。剣を捨てて日々の務めに励むことこそが、主の光の中にとどまり、主に導かれて歩むことなのです。

〈イザヤの語る平和の福音〉

イザヤは、アッシリアの脅威を前にして、この預言を語り、イスラエルの民に罪の悔い改めと神に立ち帰ることを求めました。それは、イスラエルの神、シオンにおられる神にこそ依り頼むべきであるというメッセージです。

すなわち、時代は戦時下であり、当時の王たちは、政治的な事柄、外交や武力に頼ることをもっぱらとしていました。また、偶像礼拝を行い、生けるまことの神を畏れ敬うことを忘れていたのです。そのような中で、エルサレムをはじめとする民衆の生活も荒れ果て、正義と公正が失われていました。不正がまかり通り、貧しい者小さな者が虐げられることが起こっていました。

そのところで、イザヤは、人間の力に頼るべきではない、主なる神にこそ目を向けて生きるべきであると語りました。神が私たちの力なのであり、神の御言葉に聴き従おうと、呼びかけました。政治力や剣の力、武力に頼るのではない。主に信頼して、剣を捨てよう。鋤を取って、荒れ果ててしまった畑を耕そう。そこにこそイスラエルの民の歩む道があると語りかけたのです。

〈平和の主イエス・キリスト〉

「終わりの日」とは、とりわけ救い主の到来を指し示しています。救い主イエス・キリストは、ご自身を十字架に引き渡すへりくだりと謙遜の道を歩まれました。御父はそのキリストを復活させ、栄光へと引き上げられました。ここに私たちの傲慢と高ぶりの罪が赦され、平和を創り出す道が開かれました。これが平和の福音です。

そのところで大切なことは、日々の生活において、私たち自身がへりくだりと謙遜の道を歩むことです。私たち自身が自らの身の回りで平和を築き上げること。それが国と国の平和のはじまりでもあるのです。 (望月 信)

カテキズム 子どものための平和カテキズム

子どものための平和カテキズム

問 私たちが平和に生きるために、神様はどのような道をそなえてくださるのですか。

答 すべての争いは、まず人の心にやどります。

ですから、まず人々の心に平和の砦（とりで）が築かれなければなりません。

神は、キリストによって、敵対する者たちの間に、まことの平和をもたらし、

キリストの平和のなかへ、すべての人を招いておられます。

信仰によって、神様とのあいだに、まことの和解（平和）を得た私たちは、

隣人とのあいだにも、平和のまじわりをつくるよう召されます。

その平和が、国と国、民族と民族、

たがいにことなつた人々のあいだにも広げられるよう、祈りもとめます。

(1) 主イエス・キリストは、山上の説教のなかで祝福の言葉を語られました。

「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」。

平和は、神の国に生きるキリストの弟子たちが、日々これを追い求めて生きるべき、生の規範です。その意味で、キリストの教え（教会の教理）のなかに、「平和」の招きを正しく位置づけることは、すべての時代のキリスト者にとって、欠くことのできないキリストの要求なのです。

(2) キリスト・イエスによってもたらされる平和。それは、なによりも神と私たちのあいだに打ち立てられた、和解の福音です。

「こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架において、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました」（エフェソ2章15～17節）。

(3) 神が、主イエス・キリストによって始め、完成して下さった平和。それは、徹頭徹尾、神ご自身のみわざです。そのようにして、神との平和に招かれたキリスト者と教会は、平和をめぐる、種々の新しい次元についても、祈りと使命を受けとめる、「新しい人」に変えられます。

聖書のなかで語られる平和は、さまざまな次元

を含んでいます。武力や暴力で相手をおびやかすことは、最も平和から遠いことです。とくに、現代における戦争が、なにか良いものを生み出すことは決してありません。

(4) けれども表向き戦争が行われていない、というだけで、平和が実現しているといえるでしょうか。人間らしく生きる希望や可能性を摘み取ってしまうような「平和」は、戦争と同じほどに耐えられないものになります。

「平和を実現する幸い」に至る道が、いったいいつ開かれるのか、途方にくれるばかりです。けれども、キリストにある新しい人は、平和の実現にたいして、諦めない人間です。諦めないために必要な、希望の道を、まず最初に歩いてくださったのは、主イエス・キリストです。

(5) キリストが切り開かれた平和の道を、主と共に歩む人々を、神は求めておられます。決して平坦ではない。しかし、すでにキリストは、この道を歩みぬいてくださり、教会と世界を、まことの平和へと招いておられます。

日本の国もまた、平和への道からさらに遠ざかる選択に身をゆだねようとしています。和解の福音を、現代のこの状況とこの次元に、現実的に適用し、平和を求める決断に固く立つことが、わたしたちに求められています。教会は、平和に向かう新しい人として、子どもたちを教育すべき任務を負っているのです。（小野静雄）

テキスト イザヤ書2章1～5節
カテキズム 子どものための平和カテキズム

(単元のねらい)

平和は世界中の民が願うところである。しかし、真の平和を実現する手だては、神のみ言葉を学ぶことである。この点をふまえつつ、子どもたちのひとりひとりに、ともに平和をつくりだす人となることをうながしたい。

「主の光の中を歩もう」

今からちょうど60年前の8月15日は、敗戦記念日です。日本の国が戦争に敗れたことを覚える日です。この戦争で日本の多くの人々が命を失い、傷つき、大切なものを失いました。それだけでなく、日本の国も多くの国々の人々の命を奪いました。

戦争は大きな罪です。殺してはならないとの神さまの戒めへの背きです。敗戦記念日は、何よりも戦争の罪を悔い改める日です。このときには日本の教会も戦争に協力する罪をおかしました。わたしたちはそのことを忘れてはなりません。そして、平和な世界をきずいていくことができるよう、神さまに祈り求めていかなければなりません。

さて、だれもが戦争を望んでなどいないと思います。平和な世界を望んでいると思います。

それならば、平和はどのようにしてもたらされるのでしょうか。今朝私たちが学びたいことは、そのことです。

今朝のイザヤ書2章3節に、このようにあります。

主の教えはシオンから、

御言葉はエルサレムから出る。

どのようにすれば世界に平和がくるのか。そのことを教えてくださいるのは神さまなのです。人間が自分たちの知恵や力で平和をつくりだすというのではないのです。平和をきずくための教えは神さまのみ国、神さまがおられるところから来るのです。「シオン」「エルサレム」は神様の都、すな

わち神さまがおられるところです。ですから平和について学びたいと願うなら、神さまのところに行かなければならないのです。そして、神さまのみ言葉を聞かなければならないのです。ですから、世界中の人々がエルサレムに集まってくるのです。神さまの教えを学ぶために、神さまのところに来るのです。

多くの民が来て言う。

主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。

主はわたしたちに道を示される。

わたしたちはその道を歩もう」と。

では、神さまのみ言葉を聞いた人々はどうするのでしょうか。4節にそのことが記されています。彼らは、今まで人を殺すために用いていた剣を打ち直して、神さまのみ国を耕す鋤にかえます。戦いのための道具だった槍を打ち直して、平和の実りを刈り取る鎌とします。そして、もはや国と国とが剣をかざして向き合うことはありません。悲惨な戦争をひきおこすことはありません。ほんとうの平和が実現するのです。

イエスさまは「平和を実現する人々は、幸いである」と仰せになりました（マタイによる福音書5章9節）。つまり、平和は何もしなくても来るものではありません。つくりだされるもの、実現されるものです。もちろん、平和は神さまがくださるものです。この世に來られた神さまのひとり子イエスさまこそ、まことの平和の王です。イエ

スさまの十字架とよみがえりのみわざによって、この世にまことの平和がもたらされたと聖書は告げます。

けれども神さまはこの世界に平和をつくりだしていかれるときに、私たちをもお用いになるのです。私たちのひとりひとりにも、平和を実現するように求めておられるのです。そのために私たちは、主の山に登り、ヤコブの神の家に行き、神さまのみ教えを学ぶのです。平和の王であられるイエスさまのみあとに従っていくのです。そのよう

にすることが「主の光の中を歩」むことです。

今も世界には戦争がたえません。争いや憎しみがたえません。でも、望みを失うことはありません。神さまのみ言葉は確かだからです。平和をもたらす神さまの恵みのみ力は、この世と人間の罪の力に勝利するのです。神さまは今朝のみ言葉のようなすばらしい平和を、この世界に必ず実現してください。そのことを信じて、平和を実現する幸いな人にならせていただきます。

(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] イザヤ書 2章 4節

主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。

彼らは剣を打ち直して鋤とし 槍を打ち直して鎌とする。

国は国に向かって剣を上げず もはや戦うことを学ばない。

〈ねらい〉

ほんとうの平和は聖書の神のもとに集い、神の言葉に学ぶときに実現する。

〈展開例〉

みなさんはテレビのニュースで戦争のことを伝えているのを見たことがあるでしょう。おうちが爆弾でめちゃめちゃになって、男の人も女の人も泣き叫んでいます。テレビには怪我をした人がたくさん映し出されています。戦争にまきこまれて小さな子どもたちがお父さんやお母さんと離れ離れになっています。こんなニュースは見ているとつらいですね。わたしたちの住んでいる町がこんなになったらどうでしょう。嫌ですね。

戦争が好きなのはいいません。みんな戦争がなくなればいいなあって思っています。でも、ちっとも戦争はなくなりません。どうしてでしょう。

戦争をする人はみんな「相手の国が悪いからだ」、「相手の国が悪いことをしているから、幸せに楽しく暮らすことができなくなっている」と言います。自分たちのことばかりが心配で、相手のことを信じたり思ったりする心が少なくなっているのです。それは決して神様が望んでおられるわたしたちの姿ではありません。神様がわたしたちに望んでおられることは、神様とわたしたちのまわりの人を大切にすることです。そういう心が

薄れてしまっていることを聖書は「罪」と呼んでいます。この「罪」が人間の心にある限り、いつまでたっても戦争はなくなるのです。

戦争がない世の中にするためには、どうしたらよいのでしょうか。この罪ある悪い心を何とかしなければいけません。でも、自分の力ではどうすることもできません。わたしたち一人一人の罪深い心を神様によって変えていただかなければなりません。それには神様のところに行って、神様とまわりの人を心から大切にしたいを神様の教えから学ぶことが大事です。神様のお言葉を学び、神様によって変えていただくのです。

神様は預言者イザヤの口を通して、約束されました。「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。」この神様のお言葉を信じて、わたしたちも平和を創り出す者となるよう神様によって変えていただきましょう。

〈お祈り〉

天の神様、人を憎んだり、争ったりする心をわたしたちから取り除いてください。周りの人々や国々のことを心から大切に思うことができますように。神様のもとでもっと学ばせてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

ストロー人形 足

〈用意するもの〉

★ 曲がるストロー 2本・厚紙 1枚

〈作り方〉

1. 厚紙に人形を描き
肩・腰の関節部分で切る
2. 各関節も
テープでつなげる
3. ストローは2本を曲げ
テープでつなげ、人形を
テープでつなげる



2本のストローを
同時に回せば
人形がグルリンパ
クルッ
クルッ

〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ①これを語った預言者は？（→イザヤ）
- ②シオン、エルサレムから何が出てくる？（→主の教え、御言葉）
- ③剣や槍は何の道具？（→戦争）
- ④御言葉によって教えられるとき、剣や槍はどうなる？（→鋤や鎌となる）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

- ①平和はまずどこに与えられる？（→人の心）
- ②それはどのようにして与えられる？（→キリストを信じることによって与えられる）
- ③それは誰との平和？（→神さま）
- ④自分の心に神さまとの平和だけがあればそれでいい？（→隣人との間にも平和が生まれなければいけない）
- ④身近な人たちとだけ平和にしていればいい？（→国や言葉が異なった人とも平和でなければいけない）

〈考えてみよう〉

60年以上前に、世界で起こった戦争のことを知っているでしょうか。日本の戦争の話も聞いたことがあるでしょうか。とてもたくさんの方が死にましたし、たくさんの方を殺しました。戦争は、「殺してはならない」という戒めを破ってしまう一番大きな罪と言えるでしょう。そして、これらのことは昔のことで自分たちとは関係ないということではありません。今も、これからも、悲しいことに、戦争が続いています。平和のために何ができるかを考えるのはとても大きなことです。でも、私たちは、御言葉をしっかり学ぶという小さなことから始めてみましょう。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。今日は、平和のお話を聞くことができありがとうございます。私たちの心に、そして世界中に、神さまからの平和がありますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

世界の国々の争いが永遠に続き、争いを起こす人の罪が勝利するのではない。生けるまことの神、正義と公正の神の歴史支配が最終的な勝利をおさめる。それゆえに希望を持つこと。第一のポイントは「神の歴史支配」。第二に、争いの源が人の罪にあること。従って、真の平和はキリストによる贖い、罪に対する勝利から来ることを示す。神との平和、そこから人との平和が生み出される。だから主の御言葉に聞き続けるように励ます。

〈展開例〉

- イエス様よりおよそ700年ほど前、イザヤという預言者がいました。当時神の民は北イスラエルと南ユダに分かれていました。そして、北からアッシリアという大きな国が迫ってきていました。やがて北イスラエルはこのアッシリアに滅ぼされてしまいます。今も世界のあちこちで争いが起こっています。多くの指導者たちは（武力）に頼っています。ではイザヤの時代、神の民の王たちは何に頼ったでしょうか。（武力）に頼り、（神様）に頼ることをしなかったのです。また信仰生活でも（偶像）礼拝を行い、（本当の神様）を畏れ敬うことを（忘れて）いました。人々の生活では、（不正）がまかり通り、（貧しい）人たちが、（弱い）人たちが（虐げ）られていました。
- イザヤは人々にどのように呼びかけたでしょうか？
- ①軍隊を強くして敵に負けないように備えるように。
 - ②武力に頼るのをやめて、主なる神様に信頼して剣を捨てよう。神の御言葉に聞き従おう。イザヤは②のように人々に語りました。（剣）を捨てて日々の務めに励むことが、（主の光）の中を歩むことである。そこにイスラエルが進むべき道がある。
- イザヤ2章1～5節には、イザヤが見た幻が書かれています。（終わり）の日に、（武力）で争う時代は終わる。（イスラエル）だけでなく、（多くの民）が、神様の言葉に聞き従う日が来ます。そのとき国々の争いに対して、神様はどうなさるでしょうか。神様は、国々の争いを（裁き）、多くの民を（戒められ）る。国々の争いではなく、最後は神様が勝利し、支配されるのですね。
- ところで、平和を壊す争いはどこから起こるのでしょうか。それは私たちの（罪）から。（憎しみ）や（争い）の心です。
- イエス様は御自分を憎む人たちに対してどのような態度をお取りになりましたか？ 武力で倒す？ ののしって、言葉で打ち負かそうとした？ むしろ（十字架）につけられた。十字架につけた人たちのために（祈った）。私たちの（罪の刑罰）を身代わりに（受けて）下さった。
- 平和のために私たちはどうしたらよいのでしょうか。（主イエス）の愛を信じること。人のことを（愛する）（努力）をすること。さらに、平和のためにどんなことが考えられますか？ 一緒に考えよう。
- ・ 身近な（友人）のために祈ること、（平和）な仲になる努力をすること
 - ・ 世界の平和のために（神様）に（祈る）こと。神様が（支配される）ことを信じて（あきらめ）ないで（祈り）続けること。
- 〈折り〉
- 天の神様、世界のあちらこちらで、戦争があります。身近な人たち、友だちの間でも争いがあります。どうか主イエス様が一緒にいて下さり、平和を与えて下さい。私たちに出来ることを教えてください。

【目標】

平和について考える。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→イザヤ書2章1～5節を生徒と読む。

【ポイント】

平和とは何であるか、生徒と話し合えるならば有益である。聖書の語る平和は、単に戦争がないという状態にとどまらない。聖書は、平和でない状態とは神様との関係の破れから来ると指摘する。その関係の破れとは罪である。なくなる戦争、混乱、私たちが日常的に取り巻いてくるような不調和の根本にはすべて罪がある。つまりその問題の根っこは、人間の心の中にある。そして人間のその心が変われない限り、その問題は解決しな

い。平和を実現する人とは、心のきよい人。これまでの使信の全てが示すような人。神の前に自分を知り、神との関係を築き、罪の中から新しく抜け出た人である。神と和解する。神の愛を広げて、平和を実現させていく。これはそのまま神の栄光があらわされるということとひとつである。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての平和であることとは何か？ それを生徒と分かち合う。

Q. 平和とは何ですか？

Q. どうすれば平和は実現すると思いますか？

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 具体的にどこから平和を実現していきますか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？



テキスト 創世記2章18節～25節

〈神の秩序としての男と女〉

創世記1章において、人が〈神のかたち〉に造られ、男と女に造られたことが語られています。この箇所は、その男と女の関係を描き出す御言葉です。とりわけ、一体となるべき男と女の関係、結婚関係が教えられています。

このところでまず学ぶべきは、主なる神ご自身がイニシアティブをとって、男と女の関係を築き上げておられるということです。これは神の御業なのです。主なる神は人のあばら骨の一部で女を造り人に与えますが、それは人が深い眠りの中に置かれているときに行われました。これは、人の意思を超えて、神ご自身が男と女を引き合わせ、一つにしておられるということにほかなりません。神の導き・賜物として、男と女が引き合わせられることを覚えないものです。ですから、結婚に際して神の召命が問われますし、結婚したならば、「神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」(マタイ19:6)のです。

〈助ける者〉

神が人を男と女に創造されたのは、人が〈神のかたち〉であり、人格的・霊的な交わりを必要とするからです。人は独りで生きるのではなく、他者との交わりにおいて共同の生を営む存在です。ですから、人には社会の交わりが必要ですし、とりわけ相対して対話し、共に手を取り合って生きる「助け手」が必要です。この意味で、人が独りでいるのは良くありません。

主なる神が野の獣や空の鳥を人のところに持って来ますが、彼に合う、彼にふさわしい助け手は見いだせません。それら動物は、人格的・霊的な交わりの相手ではあり得ないからです。

主なる神は、人と一対となるべき助け手を、彼のあばら骨の一部を抜き取って、造り上げられました。これは、造り上げられた女が本来その人の一部であり、分かちがたい存在であるということ

なのでしょう。また、「あばら骨」とは、心臓や肺を守っている骨であり、人の身体の大切な守り手です。人にとって、助け手とは、そのような大切な命の守り手なのです。ですから、「助け手」とは決していわゆる助手やしもべのような存在ではありません。

〈二人は一体〉

「ついに、これこそ

わたしの骨の骨

わたしの肉の肉。

これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう

まさに、男（イシュ）から取られたものだから。」

この叫びには、自らの分身とも言うべき大切な助け手を見いだした喜びがあふれています。「わたしの骨の骨、わたしの肉の肉」と言うべき一心同体の相手なのであり、「イシュ」「イシャー」という言葉遊び、その響き合う語感に、対話の相手、人格的・霊的交わりの相手であるという意味が込められています。

主なる神は、このような人格的・霊的交わりの相手として「助け手」を人に与え、それぞれ男として、また女として生きるものとされました。この男と女は分かちがたく、一心同体です。人は、父母のもとを離れて、この男女の結婚関係において、社会形成に参加するものとされたのです。

〈姦淫の禁止〉

私たちの課題は、この神の賜物と言うべき与えられた結婚関係を、真実に喜びの関係として築き上げることです。喜びの泉として大切にはぐくむのです。そのために、この結婚関係を破壊することは厳に戒められます。姦淫は、この結婚の関係を破壊し、社会形成の基盤と言うべき男女の信頼関係を損ないますから、禁止されなければなりません。
(望月 信)

8月21日 「第七戒 姦淫してはならない」 カテキズム研究

カテキズム 子どもカテキズム問55,56

子どもカテキズム

問55 第七戒は何ですか。

答 「姦淫してはならない」、です。

問56 第七戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 神さまが、私たちに結婚の祝福を与えてくださいました。

ですから、男の人と女の人との関係を、清く保たなければいけません。

神さまは、結婚によって、赤ちゃんを与えてくださいます。

私たちは、そのときまで、性の関係を持ちません。

証拠聖句 マタイ5:28、ペトロ一5:3~5、5:31

参考教理問答 『ハイデルベルグ』108~109、『ウ小教理』70~72

人間の男と女の問題に入る前に、動物や昆虫の世界を垣間見ておきましょう。鈴虫は、秋になると、雌は交尾した雄を食べ、栄養を補給して、元気な卵を地面に産み付けます。雄は、元気な子孫が生まれるために、食べられる運命です。鮭は、川を上り産卵して、息絶えます。自然界を見ますと、子孫を残すことに、雄と雌が命がけの営みを繰り返しています。昆虫や動物の世界では、性の交わりとは、真剣そのものです。

人にとっての性は、子孫を残すためだけではありません。男と女が愛することの素晴らしさを確かめ合う場でもあります。赤ちゃんが極めて弱々しく生まれてくることと、性的な交わりが愛の喜びの行為であることは結びついています。昆虫や魚の世界では、子孫を残して一回の交尾で息絶えても、生まれてくる命は自分の力で生きていきます。ほ乳類の場合、生まれてくる赤ちゃんの成長のために、性的な交わりを終えた後も生き続けます。生まれてくる子供は、育ててくれる両親を必要としています。それも、お互いに愛し合っている両親が必要です。ですから、人は愛し合って性的な交わりを持ち、二人で赤ちゃんを育てます。

ところで、今日の風習はどこか変です。芸能界では出来ちゃった婚が流行っています。結婚してから子供を産むのではなく、子供が出来たから結婚するという順序です。出来ちゃった婚でも、夫婦になることで、お腹に宿った赤ちゃんを二人で

育てることができます。しかし、この背後に、悲惨な現実が隠れています。それは、出来ちゃった婚にならない妊娠です。いくら愛し合ってセックスしたと主張しても、その結果が中絶で終わるなら、命を育む営みではありません。そして、中絶することによって、多くの人が体と心に大きな傷を抱えて生きています。「殺してはならない」という戒めは、日本社会において、安易になされる中絶との結びつきのなかで理解されるべきです。

中絶を避けるために、避妊の知識を身につければ良いのでしょうか。性的な交わりは、人生をかけた真剣な営みです。その場の雰囲気とか、一回限りの快楽のために、行われるものではありません。両者がお互いを生涯のパートナーと認めて、その出会いを神に感謝して行うものです。性的な交わりは、もし子供ができないとしても、生涯をかけて愛し合う者たちへの神様からの豊かな祝福です。

姦淫とは、厳密に理解すると、結婚している者が、結婚関係にない者と性的な関係を持つことです。今日の不倫です。夫婦の關係に、他人を割り込ませてはなりません。神が結婚関係を定めてくださいましたので、姦淫は、神の秩序を乱す行為です。結婚関係の神聖さを理解し、その結婚に備えて若いときを過ごす者は、時代の風潮に抗する試練と直面しますが、神からの豊かな祝福を受けることができます。(岩崎 謙)

テキスト 創世記2章18～25節

カテキズム 子どもカテキズム問55,56

〔単元のねらい〕

子どもカテキズムでは、先ず結婚の祝福について語り、男性と女性とのふさわしい関係、性的関係について進みます。結婚を条件としてのみ許されている性行為において、契約の子、神の民の命も受け継がれます。その神秘、聖性へのおそれを持たせることが、子らには必要ではないでしょうか。また、カテキズムは、「結婚までは、決して性的関係を持ちません。性行為をしません」と、自らに言い聞かせ、宣言します。ここに、この罪への傾斜をとどめる力があるかと思えます。何よりも、説教者（教師）は、それが罪であることを明らかにすることが要となります。この基準は、今日、教会しか語れない言葉となっているのです。もともと聖書なしに、人間の健康な道筋を示すことなどできないのです。

この単元は、まさに発達年齢に即した説教や牧会が求められます。特に中高科では、聖書の信仰のなかでこそ、子どもたちと、子どもどうしても、性について正面から、オープンに語れるはずで、ここでも、分級の力が発揮されることが望まれます。悩みを抱えている子、罪を犯して、自分（たち）だけで解決しようとしている子がいるかもしれません。現実には、教師の予想をこえています。見つけ出してあげてください！ 中高科の教師方にぜひ、お読みいただきたいのは、長谷川はるひさん（関キリスト教会日曜学校教師）の著された『性について話そう』（あるむ、2004年）です。子どもたちと読書会をしてもすばらしいと思います。

今回は、異例のことで、小学科と中高科二つの説教例をあげてみました。

「神さま、こんなに大好きな人をありがとう」

「生まれる前から神さまに、愛されてきた○○ちゃんの、誕生日です、おめでとうー。」これは、毎月のお誕生会でみんなといつも歌う歌ですね。僕たち私たちは、一体どこから来たのでしょうか。お父さんお母さんから生まれたのですよね。でも、お父さんもお母さんも、そのまたお父さんとお母さんはどこから来たのでしょうか。それを教えてくれるのが、僕たち私たちが手にしている聖書です。聖書には、神さまの御言葉が記されています。

今日読んだところは、エバさんがどのようにして生まれたのかということが書かれていました。神さまは、アダムさんを土のちりから人間としておつくりくださいました。アダムさんは神さまに造られた最初の人間となりました。

アダムさんは、それまでいろいろな生き物と仲良くしていたのです。けれども、どんなに動物が

いてくれても、アダムさんは自分にぴったりくる生き物、いっしょに生きていける助ける者には出会えませんでした。

そこで神さまは、アダムさんを深く眠らせて、あばら骨の一部を抜き取って、女の人、つまりエバさんをお造りになされました。神さまは、エバさんをアダムさんのところへ連れて来て下さいました。するとどうでしょう。アダムさんは今までとはまったく違う生き物として、エバさんを見たのです。アダムさんは眠っていましたから、エバさんが自分の骨の一部から神さまによって造られた人だとは分かりません。でも、ひと目見ただけで、「ヒビッ」と分かったことがあるのです。この人のことが、自分の骨、自分の肉、まるで自分の一部分であるかのように、分かれたくないという気持ちです。全部が大、大、大好きという気持ちが湧き上がったのです。神さまは、男の人と女

の人とを、それほど大好きどうしにしてくださいの
のです。すばらしいですね。そうして、二人はそ
の後、結婚しました。神さまは、二人を結婚させ
てくださって、赤ちゃんが生まれるようにしてく
ださったのです。

ですから、僕たち私たちは、お父さんとお母さ
んから生まれたのですけれど、その命は、神さま
から与えられたものです。それだけではなく、生
まれる前から僕たち私たちは神さまに知られて
いたのです。でも、もしもお父さんとお母さんが結
婚しなければ、僕たち私たちは、生まれていま
せん。だから、結婚というのは、とってもと
ても大切なことなのです。

僕たち私たちは、まだ子どもです。でも、大人
になったら、結婚すると思います。そのときまで、
男の子は女の子と、女の子は男の子と仲良くする
方法を学んで下さい。

今日のカテキズムは、「姦淫してはならない」と
いう第七戒でした。神さまが、この掟を通して、
「結婚はそれほどすばらしいのだよ、尊いのだよ、
だから、結婚した二人の関係を自分勝手に壊して
はなりません！」と命じておられるのです。でも注
意しましょう。神さまにとっても人間にと
っても、とってもすばらしいことだから、悪魔は
なんとかして、そのすばらしさを僕たち私たちから
奪いたいのです。神さまから引き離そうと企んで
います。必死になって、男の人と女の人との関係
を壊してしまうために働いています。

どうすればよいのでしょうか。イエスさまがいつ
も一緒にいて下さることを忘れないことです。お
祈りすることです。そして、最後にもう一度、カ
テキズムを大きな声で読みましょう。「わたした
ちは、そのときまで、性の関係を持ちません。」

〈中高科礼拝のために〉

皆は今、初恋のまっさかりではないですか。「誰
か好きな人いる？」って友達に聞かれたら、仲

の良いお友達になら、「絶対秘密だからね」って、
一人や二人くらい(?)の名前が挙がるかもしれ
ません。二人挙げる人がいたら問題ですが、一
人もいないのは、ちょっと寂しいかもしれません。

男の子と女の子の気持ちは、全然違うと思いま
すが、でも、誰かのことが好きになると、いつも
その子のことを考えてしまうでしょう。特に、男
の子は、もう自分が病気になってしまったかなど
思うくらいに女の人のことが頭から離れなくな
ることがあるはずですよ。断言します。それは、神さ
まが私たちをそのようにお造り下さったからなの
です。

(ここから、小学科礼拝説教を参照して、聖書
を説く。)

でも、そんなすばらしい性の関係は、いつから
始まるのでしょうか。答えは、たった一つ……。
結婚です。結婚以外に、性の関係を持つことは、
神さまによって、聖書によって禁じられているの
です。「えー、そんなの古いよ」と誰かが言うか
もしれません。「でも、友達のなかでエッチをし
てしまったって言う子もいるしなあ……」。「一
回くらいはいいんじゃない……。もしも、子どもが
できちゃったら、結婚すればいいんじゃないか
な」。心の中で思っている子も、もしかするとい
うかもしれません。でも、答えはたった一つです。

第七戒には、神さまの愛があふれています。神
さまがどれほど真剣に、わたしたちの幸せを願っ
ておられるかが分かるはずですよ。これほど真剣に、
祝福された結婚生活を願っておられるお方は、天
のお父さま以外におられません。そのことを心に
刻みましょう。また、自分が弱い人間であることを
素直に認めましょう。お祈りする以外に罪に勝
てません。既に、この罪を犯してしまったお友達
がいたら、その人にこそ、どんなにイエスさまの
十字架が必要でしょうか。イエスさまによって教
されない罪がないことをここでも覚えて、心から
感謝しましょう。(相馬伸郎)

〔今週の暗唱聖句〕 出エジプト記20章14節

姦淫してはならない。

〈ねらい〉

結婚は神が定められたものであり、祝福であることを知る。

〈展開例〉

コウクんとユミちゃんは、とってもなかよし、同じ幼稚園のすみれ組です。砂場で遊ぶときも、お昼ご飯を食べるときもいつも一緒です。ある日、コウくんはユミちゃんにいいました。「大きくなったらぼくのおよめさんになってね。」「うん。」こうして二人は大人になったら結婚する約束をしました。

幼稚園を卒園して、コウクんとユミちゃんは小学校に入学しました。同じ小学校の1年生になった二人は、ちがう組になって、あまり一緒に遊ばなくなってしまいました。小学校を卒業して中学生になると二人は別の学校に行くようになりました。そのころには、二人とも結婚する約束をしたことなんかすっかり忘れてしまいました。

それから何年もたちました。コウくんもユミちゃんも大人になりました。ある時、二人は町でばったり出会いました。二人ともとっても嬉しくなって、小さかった頃と同じように、仲良く思い

出話をしました。「結婚しようね」と言ったこともはっきり思い出しました。でも、二人は、「今から結婚しよう」とは言いませんでした。なぜでしょう？二人とも、別の人と結婚していて、そして、二人ともとっても幸せだったからです。

礼拝で聖書のお話を聞いたように、結婚することとは一人の男の人と一人の女の人に与えられる、神さまが定められた素晴らしい関係です。その素晴らしい結婚の関係は、わたしたちが自分勝手にこわしたり、またやり直しをしたり、なんていうことはしてはいけません。わたしたちは、神さまがあわせてくださった人と、神さまが定めてくださった時に結婚をし、家庭をつくり、生活していくのです。それが神さまから祝福される結婚なのです。

〈お祈り〉

父なる神さま、あなたは、アダムさんとエバさんを初めて夫婦としたように、わたしたちにも結婚というすばらしい祝福を与えてくださることをありがとうございます。イエスさまのおなまえによって祈ります。アーメン。

〈やってみよう〉

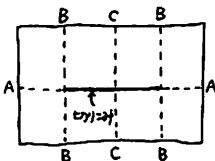
小さな絵本を作ろう！

〈用意するもの〉

★色画用紙・ペン・色えんぴつ

〈作り方〉

1. 図のように折り返しをつける。



2. 切り込みを入れ。

A線まで半分に折り

B線と谷折り

C線と山折りをして組み立てる

3. 聖句やイラストをかいて
小さな本の出来上がり！



家族や友だちに
プレゼントしてはいかが？

〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ①動物たちの中に人に合う助け手がいた？(→いなかった)
- ②神さまは人を眠らせて何を抜き取った？(→あばら骨の一部)
- ③それで何ができた？(→女の人)
- ④男と女の人はどうなることができる？(→一体となる、結婚することができる)

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

- ①結婚相手は誰が与えてくれるの？(→神さま)
- ②一度にたくさんの人と結婚してもいい？(→よくない)
- ③男の子は、女の子のいやがることをしてもいい？(→いけない)
- ④女の子は、男の子のいやがることをしてもいい？(→いけない)
- ⑤仲良くすることはいいこと？(→いいこと)

〈考えてみよう〉

好きな男の子や、好きな女の子はいるでしょうか。それは、お父さんやお母さんを好きな気持ちと同じでしょうか。違うでしょうか。人の心には不思議な気持ちがたくさんあります。この不思議な気持ちを大切にしてほしいと思います。そして、本当の意味での好きということは、相手の人を自分のもののように勝手に考えるのではなく、その人にとって一番うれしいことを考えてあげることではないでしょうか。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。神さまは、男の人と女の人をお造りになりました。お友だちをみんな大切にすることができますように。人のいやがるのではなく、神さまが喜ばれることをして、みんなと仲良くできますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

神が、人を男と女とに造られ、結婚を定められたこと、従って、結婚関係は神様が祝福されたすばらしいものであることを理解する。男の子は女の子を、女の子は男の子を、お互いの心と体を大切にしよう勧める。人間には、相手を自分のものであるかのように、自分に従属させようとする罪があることも覚えたい。

〈展開例〉

- 人間には男と女がいます。だれがそう決めたのでしょうか？（神様）が、人を（男）と（女）とに（創られた）（創世記1：27）。
- 神様は、最初の人アダムさんのところにいろいろな生き物を持ってきてくださいました。アダムさんに良い助け手はできたでしょうか？（創世記2：19～20）
- そこで神様はどうなさったのでしょうか？（アダムさんを深く眠らせてあばら骨の一部を抜き取って、女の子つまりエバさんをお造りになった）（創世記2：21～22）。
- 神様がエバさんをアダムさんのところに連れてきて下さったとき、アダムさんは何と申したのでしょうか？ ついにこれこそ（わたしの骨の骨）、（わたしの肉の肉）（創世記22：23）。これは、この人のことが、自分の（骨）、自分の（肉）、まるで自分の（一部分）であるかのように、（分かれ）たくないという気持ち。この人の（全部）が大（好き）という気持ちが湧き上がったのです。こうして二人は（結婚）しました。
- 結婚は（神様）が定めたまひい制度です。結婚がとても大切だということが分かる聖書の言葉
- があります。どこでしょう？（創世記2：24）
- やがてアダムさんとエバさんにあかちゃんが生れました。私たちも、お父さんとお母さんから生まれました。その命は（神様）から与えられたものです。私たちは生まれる（前）から神様に知られていました。だから、結婚は（大切）なこと、（すばらしい）ことなのです。
- 大人になって多くの人たちは結婚します。私たちは、どうしたらよいのでしょうか？ 男の子は、女の子の（心）と（体）を（大切）にすること、女の子は男の子の（心）と（体）を（大切）にすることです。
- 十戒の第七戒は、「姦淫してはならない」です。これは、このすばらしい結婚を（壊す）ようなことをしてはいけませんという意味です。悪魔はすばらしい結婚を（壊そう）とします。男の人と女の子の大切なかわりを壊そうとします。
- 悪魔の誘惑に負けないように（祈り）しましょう。
- 男の子は女の子を、女の子は男の子を、自分のものであるかのように考えたり自分勝手にふるまってはけません。相手をいたわってあげましょう。特に男の子は女の子を、大切にいたわってあげなければなりません。

〈祈り〉

天の神様、あなたは人を男と女に造られました。そして結婚をお定めになりました。男と女が正しく愛し合うように祝福してくださいました。私たちも男の子と女の子が神様の御心に従って、お互いに大切にしようことができますようにして下さい。

【目標】

第七戒を考える。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→創世記2章18～25節を生徒と読む。

【ポイント】

性について話をするとき、私たちは何か後ろめたい気持ちや罪悪感を感じる。しかし聖書的な観点に立てば、性と罪悪感は本来結び付かないものである。聖書は性を禁止する禁欲の教科書のような書物では決してない。教師は恥らうことなく性を語るべきである。多くの宗教が肉体や性欲を過小評価しているが、キリスト教のみが肉体を肯定している唯一の宗教であるとも言える。しかしなぜ第七戒が必要であるかという点、性を通して罪が働くからである。そこでは性を創造され、私たちに賜物として与えてくださった神様による「秩序」に従うことが必要である。性は結婚関係という秩序の中で、結婚関係を深め夫婦の愛の証しとして用いられるときにこそ、素晴らしい力を発揮する。しかしそれ以外に用いられる時には強く罪を増長し、結婚関係や家族関係をも崩壊させ、自分と相手を深く傷つけてしまう恐ろしさを持っている。肉体の近さは必ずしもそのまま心の近さ

にはならない。主にあって婚前交渉をしない、結婚関係以外に性を用いないということは、この時代にあつて格好の悪いことではなく、それだけ強く相手を愛し、相手と自分を大切にしているという力強い証し、素晴らしく尊い決断となることを伝えて、生徒を励ましたい。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての性への向き合い方、そこで何を大切にしているのかを、生徒と分かち合う。

Q. 自分が男性または女性であることについて、強く意識した経験がありますか？

Q. 異性と交際することと結婚することの違いは何でしょう？ 考えてみましょう。

Q. 今この時代に、結婚以外の性関係を禁じる七戒を、どう思いますか？

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. あなたにとって異性を大切にすることは、どういうことですか？

Q. あなたにとって自分の性を大切にすることは、どういうことですか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト エフェソの信徒への手紙 4章28節～29節

〈キリスト者の新しい生き方〉

わたしたちは、以前は自分の過ちと罪のために死んでいました（エフェソ2:1）。しかし、憐れみ豊かな神様は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせて下さいました（同2:4-6）。そのため、主なる神様は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださっています（同1:3）。

従って、キリスト者の生き方は、必然的に、古い人（再生前の生き方）とは、異なってきます。そのためには、以前のような生き方をして情欲に惑わされ、滅びに向かっている古い人を脱ぎ捨てる必要があります。そして、心の底から新たにされて、神にかたどって造られた新しい人を身に著け、真理に基づいた正しい清い生活を送ることが求められています（同4:22-24）。

主なる神様は、キリスト者が新しい生き方を行うために十戒をお与え下さり、また、パウロはこのエフェソ書において、キリスト者が生きていく上での具体的な指示を、4章25節以降で語ります。

〈盗んではならない〉

4章28節においてパウロは、盗みを働いていた者、否いなお盗みを働いている者は、今後一切盗んではいけないと語ります。「盗みを働く」は現在能動態ですので、過去のことでありません。今なお継続中のことです。しかし、主なる神様は、現在まで継続的に行われてきた過去の罪を責め立てることはなさいません。

主が罪に対して寛容なお方だからではありません。なぜならば、主は、人の心の中に思うだけの罪さえもお教しになることは出来ないお方だから

です。

しかし主は、すぐに人の罪を罰することなく、耐えていて下さっています。ここに主の忍耐と、さらに人の罪を赦して下さる主の愛が示されています。だからこそ私たちは、すでに今までの全ての罪が赦されていることに感謝を持ちつつ、その罪に対する悔い改めが求められてきます。

また主が「盗むな」（28）とお語りになられる時、消極的な意味で罪を犯さないことばかりか、積極的な意味も語っておられます。つまり「盗む」という行為は、自らの欲望を満たすための行為ですが、キリスト者の新しい生き方は、救い主である主の栄光を称え、主がお与え下さった周りの人たちにキリストの愛が伝えられていくことが求められてきます。だからこそ、パウロは、「むしろ、労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与えるようにしなさい」（4:28b）と語ります。

〈悪い言葉を語ってはならない〉

つまり、キリスト者として新しく生きることは、具体的な行動として表れてくるのであり、主なる神様によって救われたと語る時、その信仰が問われてくることとなります。

それは人と話す態度にも表れてきます。この時、自らの正当性を主張するために、人を中傷することも、人の揚げ足を取ることも必要なくなるのです。主の栄光を称え、主の愛がそこに示されるために、「その人を造り上げる」こと（29）、つまり建設的に語ることが求められてくるのです。あなたが罪赦されて、永遠の生命へと立てられたように、相手の人がキリストの愛によって立てられるために、相手の益を求めて語ることが求められてきます。（辻 幸宏）

カテキズム 子どもカテキズム問57,58

子どもカテキズム

問57 第八戒は何ですか。

答 「盗んではならない」、です。

問58 第八戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 私たちの持っているものすべては、神さまから与えられたものです。

人の体やもの、時間を盗んではならないということはもちろん、

自分自身のお金、持ち物、時間をも大切に用いなければならない、ということです。

私たちは、自分自身を神さまにおささげし、

十分の一献金をささげて、神さまに栄光をお返しします。

証拠聖句 エフェソ4:28、出エジプト23:5、マラキ3:10、マルコ12:41-44

参考教理問答 『ハイデルベルグ』110～111、『ウ小教理』73～75

アメリカ・インディアンは、「どうしてもっと畑で働かないのか」という質問に、「自分の収穫が多くなると、収穫が少なくなる人が出てくるから」と答えたそうです。これは、絶対量が決まっています、それを皆で仲良く分け合って暮らす社会の物語です。今日の社会は、絶対量が労働に応じて無限に拡大するという前提に立って、働けば働くほど豊かになると信じています。インディアンの答えに隠されている知恵は、限りある資源を皆で分け合うという発想を先取りしたものです。

盗むとは、何でしょうか。他人のものを自分のものにするのです。自分のものを盗むとは言いません。一般には、働いて稼いだ正当な報酬なら自分の好き勝手に使って良い、と理解されています。しかし、ここで、大きな発想の転換が必要です。人は、本来、「自分のもの」と言えるものは、何も持っていないのです。すべては、「神のもの」です。自分のものとは一番思われる命すら、そうです。人は、生きている間、命を預かっていたのです。お金も時間もすべての所有権は神にあります。神は、それらを管理し用いるように、人に預けてくださいました。ですから、お金を使うにしても、「自分のお金だから自分の勝手にしよう」は通用しません。「神のお金を預かっています。どのように使ったら良いでしょうか」と神にお伺いを立てねばなりません。

祈りつつ用いる責任は、大金持ちも貧乏人も神の御前で同じです。しかし、貧乏人は自分のことで精一杯ですから、他人のために用いることは余りできません。それに対して金持ちは、他者のために、また社会のために用いることができるお金を沢山持っています。ですから、もし金持ちが神様の御心を求めず、自分の楽しみのためだけに財を用いるとしたら、貧乏人よりも大きな罪を犯すこととなります。盗むのは、お金だけではありません。時間もそうです。神の時間を自分のために用いることは時間泥棒です。「この時間をどのように用いたら良いでしょうか」という祈りなしに行うとき、きっと誰かのために用いるべき時間を自分のために用い、時間の横領罪を犯しています。

私たちは、泥棒のような盗みをしていなくても、誰もが神の御前で第八戒を破っています。そのような生活のなかで、礼拝とは、命とお金と時間の所有権がすべて神のものであることを確認するときです。礼拝の時間を神にささげることから、すべてが始まります。礼拝生活が崩れると、命もお金も時間もすべてが「自分のものだから、自分の勝手にしよう」という論理で無駄遣いされます。時間においては主日礼拝を中心に据え、お金においては先ず神に献げて歩むとき、すべての生活が神の御心にかなうものに変えられます。神と人に仕える喜びが広がります。(岩崎 謙)

テキスト エフェソの信徒への手紙4章28～29節

カテキズム 子どもカテキズム問57,58

(単元のねらい)

第八戒は盗みの禁止ということのみならず、神の賜物を分かち合い、与え合う生き方へと私たちをうながす戒めであることを明確にしたい。イエス・キリストにあって新しい人とされた私たちは、み霊の恵みによってそのような祝された生へと招かれていることを語って、子どもたちを励ましたい。

「わかちあう喜び」

イエスさまを信じて生きる人は、新しい人です。パウロさんは、だれでもイエスさまとともに生きているなら、その人は新しくつくられた人です、古いものは過ぎ去って、新しい人が生まれました、と語っています。

古い人とは罪を主人として、罪にしばられて生きている人です。私たちはみな、生まれながらにそのような罪人でした。神さまのみ栄えをあらわすことよりも、自分を喜ばせることをしか考えることができませんでした。隣り人を愛するよりも、自分が得をすることをしかなすことができませんでした。

盗むところも、その古い人から出てくることです。他人の持ち物を盗んで自分のものにしてしまうことが悪いことだということは、みな知っています。でも、だれの心にも盗むところがありますね。

前に、小学校三年生の女の子の詩を読んだことがあります。お菓子屋に行ったときに、チューイングガムをひとつ黙って持ってきてしまったことを書いた詩です。この子は先生とふたりだけの教室で、泣きながらその詩を書いたそうです。盗んでしまう自分のところとまっすぐ向かい合ったのですね。でも、書きながらとても悲しかったと思います。罪に支配された不自由なところと向き合うことは、悲しくつらいことです。

でも、イエスさまはそのような私たちを新しい人につくりかえてくださいます。新しい人とは、イエスさまにしっかりと結ばれている人のことで

す。もう罪が主人というわけではありません。イエスさまが主人です。そして、イエスさまの愛と恵みにすっぽりとつつまれています。それが新しい人です。

マルティン・ルターという人は、イエスさまを信じる新しい人は、小さなイエスさまになると言いました。私たちもイエスさまを信じるなら、イエスさまのように語り、イエスさまのように考え、イエスさまのようにふるまうというのです。もう罪を悲しむことはありません。もちろん、いちどきにそうなるというわけではありませんが、私たちもひとりひとり、小さなイエスさまにならせていただけるのです。これは私たちの力によるのではなく、神さまの恵みによることです。確かなことです。すばらしい恵みだと思えます。

さて、神さまは「盗んではならない」と仰せになります。このご命令は、ただ盗まなければよいということではありません。神さまからいただいた賜物をおたがいに分け合いなさい、そして持っていない人には与えなさいというご命令なのです。

私たちの持ち物のすべては——富も食物も、時間もすべて、私たちがこの地上で幸せに生活していけるようにと神さまが備えてくださった恵みの贈り物です。ですから、神さまの愛に感謝して、神さまのみ心にならないうちに、神さまは私たちを豊かに祝福してくださいます。反対に自分のもののように考えてひとりじめしてしまうことは、神さまを悲しませることです。

新しい人は、イエスさまを愛し、隣り人を愛する人です。自分自身のことだけでなく、お友だちやまわりの人々のことも配慮しましょう。貧しい人や弱い人があったら、助けてあげてください。

イエスさまにあって与え合うこと、わかちあうことはすばらしいことです。イエスさまに結ばれた新しい人である私たちは、そのすばらしい喜びに生きることができるのです。 (木下裕也)

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記20章15節

盗んではならない。



〈ねらい〉

「盗んではならない」という戒めから、「盗み」という罪の意味を知る。また、神さまからいただいたものに感謝し、分かち合い、与え合う生き方が求められていることを知る。

〈展開例〉

「うそつきはどろぼうのはじまり」なんて言うことがありますね。「どろぼう」、つまり、「ぬすみ」は、昔から悪いこと、してはいけないことの代表のように言われます。もちろん聖書にもちゃんと「ぬすんではならない」とかいてあります。

あたりまえのこのようですが、なぜ「ぬすんではならない」のでしょうか。「ぬすむ」というのは、他の人のものを勝手に自分のものにしてしまうことです。あなたの大切なものをだれかにもって行かれたら、どうですか？ 困りますね。いやな気持ちになりますね。高いお金を払って買ったものであればなおさらでしょう。それなら、値段の安いものなら、ぬすみをしてもそんなに悪いことではないのでしょうか？ 相手が気づかなければ、だれも困らなければ、ぬすんでもいい

のではないのでしょうか？ いいえ、もちろんそんなことはありませんね。なぜなら、わたしのものもあなたのものも、みんながもっているものは全て、神さまから与えられたもの、つまり、「すべては神さまのもの」だからです。ですから、わたしたちは、よその人のものばかりでなく、自分自身の持ち物も、自分のからだも、自分の時間さえも、自分の勝手にすることは許されないので。自分の欲望にまかせて人のものをかってに自分のものにしてしまったり、自分のものだからといって、好き勝手に自分の楽しみのためだけに使ったりしてもいけません。全てを神さまの喜ばれるように使うことが大切なことなのです。

〈お祈り〉

父なる神さま、神さまはわたしたちにいつも必要なものをくださいます。ありがとうございます。神さまからいただいたものを自分だけの楽しみのために使うのではなく、どんなふうにつかったら神さまは喜んでくださいますか。よくわかるようにしてください。イエスさまのおなまえによつていのります。アーメン。

〈ゲームをしよう〉

まきまき競争の
ゲーム

〈用具するもの〉

★ ラップの芯(2コ)・太めのひも

〈作り方〉

- ・ひもの両端にラップの芯を(しっかり)結びつける。
- ・ひもの両端からちよつと真ん中に結び目をつけておく。



〈遊び方〉

- ・二人一組に作り、それぞれ ラップの芯を両手で持つ
- ・「よーいドン」で、ひもを巻きとっていき、早く真ん中の結び目の所まで来た方が勝ち!!

〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ① 今まで盗んでいた人は、これからも盗んでもいい？ (→これからは盗んではいけない)
- ② お金がないなら、盗んでもいい？ (→盗んではいけない)
- ③ お金がないなら、どうすればいい？ (→働いて自分の手で正当な収入を得る)
- ④ 自分で得たお金は自分のためだけに使っている？ (→困っている人を助けてあげる)

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

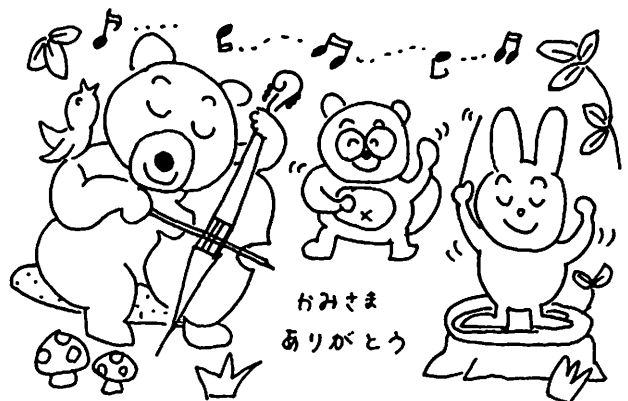
- ① 持っているもので神さまから与えられたものはどれくらいある？ (→すべて)
- ② 人のものを盗むことは、神さまのものを盗むことになる？ (→はい)
- ③ 自分のものも神さまにお返ししなければならぬ？ (→はい)
- ④ 例えば、どのようにして？ (→礼拝の時間を持つ、献金をする)

〈考えてみよう〉

誰かのものを勝手にとってしまったことはないでしょうか。素直に謝って、これからはとったりしないようにしましょう。また、人のものを盗んだことはなくても、もったいないことをしている人はいないでしょうか。買ってもらったものをすぐに捨てたり、食べ物をたくさん残したり、実は、そういうことも盗んではいけないと言われた神さまが悲しまれることです。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。いつも必要なものを与えてくださってありがとうございます。あなたからいただいたものを、感謝して、大切にすることができすように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

「お金」に代表される物質生活の糧が、神様からの恵みであること。私たちはそれを神様の御心に適って用いるようにと管理を委ねられたにすぎないことを理解する。学校では「万引き」が深刻な問題になっている。おもな層は中高生かもしれないが、小学生のときから、そのようなことにおちいらないように、単なる道徳ではなく信仰的な理解に導きたい。

財を分かち合って共に生きる使命にも思いを至らせたい。キリスト教会がこの点で果たすべき役割もあるからである。

〈展開例〉

○盗みを働いている人に聖書は何と言っていますか？……（エフェソ4：28前半、「盗みを働いていた者は、今からは盗んではいけません。」）

○「殺してはならない」では人の（「命」）を大切にすることが教えられました。「盗んではならない」では、人の（「持ち物」）を大切にすることが求められます。これは人が（持ち物）を用いている（生活）を大切にすることだからです。（例えば、「万引き」に触れ、被害を受けたお店の人にとっては生活を脅かされる事態となることを話すのもひとつの例ではないでしょうか。）

○エフェソ4章28節では、盗むのを止めてどうするように教えていますか？（むしろ、労苦して自分の手で正当な収入を得）ること。

○それなら、自分がもうけたお金はだれのもの？

①自分のものに決まっている。自分がかせいだのだから。だから好きなようにしていい。

②私たちの持ち物は、お金も神様からあずかったもの。だから神様のものです。自分の好きなように使っていていいではありません。神様の御ころにかなうように使わなければならないのです。

○では、神様の御心に適う用い方とは？
（困っている人々に分け与えるようにしなさい）
（エフェソ4：28後半）

○力のある人たちが（お金）を独り占めして、（貧しい人たちが）困ってしまうことも（罪）です。

○私たちの持ち物のすべては、（お金）も（食物）も（時間）もすべて、私たちがこの（地上）で（幸せ）に生活していけるようにと（神様）が備えて下さった（恵み）の（贈り物）です。だから（神様）の愛に（感謝）して（神様の御心）にかなって用いるとき、神様は私たちを豊かに祝福して下さいます。

○時間を神様の御心にかなうように用いるには、まず（主日礼拝）を神様にささげましょう。お金を神様の御心にかなうように用いるには、まず（神様の御用）に捧げて、それから用いましょう。

〈祈り〉

天の神様、あなたは私たちに、お金や食べ物や着る物、そのほか必要な物を与えて下さいました。それらはみな、神様のものです。時間もあなたのもです。私たちが神様に感謝して、あなたにまずささげ、あなたの御心にかなうようにそれらを用いることが出来るようにして下さい。

【目標】

第八戒を考える。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？(分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である)

②改めて御言葉に取り組む

→エフェソの信徒への手紙4章28～29節を生徒と読む。

【ポイント】

かつて罪の奴隷であったわたしたちを、神様が取り返して自由にして尊い者としてくださった。その神様が「盗んではならない」と命じられている。盗みとは、わたしたちに与えられた神様からの愛と、私たちが持つに至ったすべての贈り物を、その御心に反して横取りしてしまうことである。取り合うのではなくて、むしろ与え合うこと。相手からぬすむのではなく相手を重んじて、大切に、生かし合うこと、相手の所有を喜びあうこと。これが第八戒によって神様がわたしたちを招いておられる祝福である。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとって盗みとは何か、その問題への向き合い方、そこにある葛藤などを生徒と分かち合う。

Q. 盗みとは何ですか？ 万引きや空き巣だけが盗みですか？

Q. 人からあるいは神様から、何かを盗んだことがありますか？

Q. 盗みの反対にあるのは、どんなことですか？

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 「盗んではならない」と今朝教えられた時、ドキッとしましたか？ 何を思い浮かべましたか？

Q. あなたが今、盗みをやめるべきものとは何ですか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト 使徒言行録5章1節～11節

〈全知全能なる神様〉

主なる神様は、私たちの全てをご存じです。それは私たちの行動のみならず、口から発せられる言葉、心の中に思っていることの全てです。

〈ごまかし〉

アナニアとサフィラは、相談して土地を売ります(1)。そして、その一部を持って来て使徒たちの足もとに置きます(2)。このことは、「一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた」(4:32)からすれば、フェアな行動ではありません。しかしここで問われていることは、このことではありません。なぜならペトロも「……売っても、その代金は自分の思いどおりになったのではないか。」(4)と語っている通り、私有財産自体を、初代教会が否定しているのではないからです。

問題は、差し出したものが一部であったか、全てであったかということでもなく、「代金をごまかし」ていたことです(2)。つまり彼らは、土地を売り、代金を手にしますが、土地がもっと安価な値段で売れたことにして、その金額分の代金のみを使徒たちの前に差し出し、残りを懐に入れていたのです。

〈神への挑戦行為〉

人は、自分(たち)さえ、黙っていれば、誰にも分からないだろうと、考えてしまいます。事実、人は他人の心の中まで知ることは出来ません。しかし人には不可能なことであっても、主なる神様の御前では、何事も隠すことは出来ず、すべてが

明らかにされるのです。

そして人が偽証し、嘘を語り、他の人々を欺く行為は、他の人々に対する罪も当然ありますが、それ以上に、主なる神様に対して挑戦を挑む行為となります。それは主なる神様の存在そのものを否定する行為、神様の存在を認めつつも知られることはないだろうと神様を見くびる行為、となるからです。

だからこそペトロは、「……聖霊を欺いて、土地の代金をごまかしたのか」(3)と語ります。主なる神様はどのような罪に対しても、教すことの出来ないお方です。そしてさらに、主なる神様の御前で何事も隠すことは出来ず、全てが明らかにされます。だからこそ、隠れた所で行われた罪に対しても、神様はそれを明らかにされ、裁きが行われます。つまり、偽証したり、隠し事を行う行為は、全知全能であられる神様の存在すら無視した行為であり、大きな罪にあたるのです。

〈主の裁き〉

アナニアとサフィラの行いは、聖霊を通してペトロによって明らかにされます。そして主による裁きが、即座に行われました。主の御前にある私たちの罪は、今、猶予されています。決して主に知られていないわけではありません。そしてキリストが再臨された時、最後の審判が行われる時に、すべてが明らかにされます。

だからこそ、主は、私たちが、主の御前にあって、誰に対しても、ごまかしたり、嘘を語ったりすることなく、真実を語ることを、お求めになられています。(辻 幸宏)

9月4日 「第九戒 偽証してはならない」 カテキズム研究

カテキズム 子どもカテキズム問59,60

子どもカテキズム

問59 第九戒は何ですか。

答 「隣人に関して偽証してはならない」、です。

問60 第九戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 神さまは、真実な愛をもって私たちが愛してくださいました。

ですから、私たちも、うそをついたり、うわさ話をして、

人をさばいてはいけない、ということです。

私たちは隣人に誠実を尽くします。

参考教理問答 『ウ小教理』76～78、『ウ大教理』143～145

『ハイデルベルグ』112、『ジュネーヴ教会』208～212

「偽証」ということが直接に関わるのは裁判です。科学的捜査のない古代において、証言が重要でした。証言次第で有罪にも無罪にもなりました。偽証は隣人を窮地に追いやり、名誉や社会的信用を失わせ、命を奪うことにもなりましたから、嚴罰をもって禁じられました。このように「偽証してはならない」とは、裁判の文脈で語られたものです。ここではその一般的な適用が語られます。つまり「隣人に偽りを言う」ことにはあてはめられるのです。それは「隣人に対して不当な悪口を言う」ことや「けなしたり、嘘を言ったりして隣人の財産や名誉を損なう」ことです。こうしてこの戒めは私たちの日常生活全般に渡って広げられていきます。このような悪徳は私たちの生活習慣にまで及んでおり、隣人を誹謗したり中傷することに慣れることの危険や、うっかり口をすべらすことを含めて悪口を言ったり、けなしたりする悪徳から離れることが求められます。

口から出る言葉は、心にあるものでもあります。「善い人は良いものを入れた心の倉から良いものを出し、悪い人は悪いものを入れた倉から悪いものを出す。人の口は心からあふれ出ることを語る」(ルカ6:45)。「口から出てくるものは、心から出て来るので、これこそ人を汚す。悪意、殺意、姦淫、みだらな行い、盗み、偽証、悪口などは、心から出て来るからである。これが人を汚す」(マ

タイ15:18～20)。隣人を誹謗中傷することの源は舌ではなく、心です。それ故、心とその思いも主に聖められていくことが、この戒めの眼目です。舌の禍、言葉の過ちについて聖書は繰返し指摘し、それを制御するように命じます。

この戒めが教えることは、「それぞれ隣人について真実を語る」こと(エフェソ4:25)、つまり神に対する真実と誠実を尽くすこと(隣人に主に對してするように仕える、エフェソ6:7)であり、具体的には隣人の「名声を保つ」ために労すること、さらには「聞く人に恵みを与えられるように、その人を造りあげるのに役立つ」言葉を必要に応じて語り(エフェソ4:29)、信仰の養いとなる建徳的な交わりが形成されることです。この戒めが禁じることは、具体的な言葉の悪だけではなく、「意図・言葉・行動の誤解」「自分自身や他人について過大または過小に考え語る」「正しい弁護に耳を貸さない」「人の正当な信用を羨んだり残念がる」「人の不名誉や弱みを喜ぶ」「冷笑的な輕蔑」といった心の中の相手に対する悪意や態度も含まれます。「私が誰に対しても偽りの証言をせず、誰の言葉をも曲げず、陰口や中傷する者にならず、誰かを調べもせず、輕率に断罪するようなことに手を貸さないこと」「正直に語りまた告白し」、さらに「私の隣人の榮譽と威信とを、私の力の限り守り促進する」ということです。(三川栄二)

テキスト 使徒言行録5章1～11節
カテキズム 子どもカテキズム問59,60

〔単元のねらい〕

嘘をつくことは、子どもたちの日常生活のなかで、どんなに身近な罪であろうか。子らに嘘をついたことがありますかと尋ねれば、おそらく誰一人の例外なしに、嘘をついたことがあると答えるであろう。大切なことは、「それは駄目だよ」で済ませないことである。十字架のキリストの御前で、父なる神の御前で、聖霊の光の下に嘘をつく罪を悔い改めさせることである。そのためには、説教はもとより、分級での霊的な対話が必須となる。嘘をつくことの罪と恐ろしさを教える教師は、彼らが嘘をついてしまう背景、環境にも、目を配りたい。具体的な問題が潜んでいることも少なくないのである。嘘について自分の「体面」を守る人間の罪に抗うには、罪を赦してくださる主イエス・キリストの父なる神、福音において啓示された神の義を真実に伝えることである。アナニアとサフィラの物語が、教会の出発に起こったことは、嘘、偽りが信仰の共同体の生命そのものを脅かす罪であることを知らしめるためである。親や友達にも言えない罪を分級の先生に告白できるような関係を築くことが、教師の目標となる。そのような教会ができるために、先ず教師会で互いに祈りあいたい。

「ごまかす必要はないよ、神さまの前では」

今日、皆と覚えたのは、十戒の第九番目の戒めでした。「隣人に関して偽証してはならない。」この戒めは、僕たち私たちにあって、守ることが簡単な戒めでしょうか。違うと思います。皆のなかで、これまで、一度だってお父さんに、お母さんに、兄弟に、友達に嘘をついたことがないといえる人は一人もいないと思います。

さて、神さまは、イエスさまが十字架につけられてお墓に葬られ、三日目によみがえられ、天に昇られたその後、地上に残っているお弟子さんたちのために、イエスさまの御体なる教会をお与えくださいました。男の人も女の人も子どもも大人も、すべての人たちをイエスさまの兄弟姉妹として、神さまの民として、一つの教会として呼び集めて下さいました。その生まれたばかりの教会は、イエスさまを憎んで、殺してしまった人たちに取り囲まれるようなエルサレムで始まりました。ですから、生きてゆくだけでとても厳しいことでした。ところが、イエスさまを信じた人たちは、心も思いも一つにしていました。皆が、イエスさまを第一にして、神さまの栄光が現れるために、自

分たちは生きてゆきたいし、生きて働いてゆかなければならないのだと、神さまに対する奉仕、伝道の意欲にみなぎっていました。

そのような最初の教会員たちには、生活に苦しんでいる人、仕事を辞めさせられた人、出来なくなった人、夫がいなくなって生活に困ってしまっているお母さんたち、そのような人たちも少なかつたのです。それなら、どれほど、その人たちは、苦しい生活で大変な目にあったことでしょう。

いいえ違うのです。教会の仲間たちは、自分たちの土地や家などの持ち物を売り払って、使徒たちのあしもとにおいて、「どうぞ、教会のために自由にお使いください」と言ったのです。ですから、この最初の教会の仲間たちは、不自由なく生きて行けたのです。すばらしい光景だと思いませんか。先週の盗んではならないという掟のお話を思い出します。ここでは、誰一人、自分の持ち物なのに、自分だけのものと一人占めにしないで、みんなで共有したのです。大切なものを分け与えあった、分かち合ったのです。

ところが、そこに一組の夫婦がいました。アナニアとサフィラというイエスさまを信じて仲間に加わったばかりの人たちです。この人たちも、二人で相談して、自分の土地を教会のために売って、お金を献金しようと考えたのです。これは、とても素晴らしいことだと思います。ところが、この二人はお互いに相談して、土地の代金の全部ではなく、その一部だけを献金したのです。まるで、土地の代金の全部を献げたのであるかのようにごまかしたのです。嘘をついたのです。

このことをペトロさんはどうして分かったのでしょうか。とても不思議です。しかし、ペトロさんは言いました。「アナニア、何故、あなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、土地の代金をごまかしたのか。あなたは、人間を欺いたのではなく、神さまを欺いたのだ。」そう宣言しました。すると、アナニアは、その場で倒れて死んでしまったのです。そればかりではありません。その三時間後、アナニアのことを知らないで、妻のサフィラがペトロのところにやってきました。ペトロは、すぐに質問しました。「あなたたちは、あの土地をこれこれの値段で売ったのですか。正直に言いなさい。」彼女は言いました。「はい、その値段です。」今度は、サフィラも同じ嘘をついたのです。そして、夫と同じようにたちまち息が絶えてしまいました。

正直に言うと、お話している先生自身も、とても怖い気持ちになります。たった一度だけ、神さまと教会の前で嘘をついただけで、死ななければならないとしたら、どうだろうかと思います。たとえば、先生は、洗礼を受けたとき、神さまに最

善を尽くして従ってゆきますと誓いました。神さまと教会の前で誓約したのです。だったら、アナニアさんたちはかわいそうだとすら思います。でも、アナニアとサフィラさんたちは死んでしまいましたが、神さまに永遠の怒りをもって滅ぼされたとは書いていません。先生は、この二人は神さまの裁きを受けましたが、永遠の裁きを受けたのではないはずと考えています。

それなら、神さまは、ここで、僕たち私たちに何を教えようとなさっておられるのでしょうか。この恐ろしい出来事は、聖書を読む人たちに何を伝えたいのでしょうか。それは、神さまは何でもご存知であられるということです。神さまの御前に隠し事をしてはそれは、明るみに出されてしまうのです。イエスさまはこうお教えくださいました。「隠れているもので、あらわにならないものではなく、秘められたもので、公にならないものはない」(マルコ4:22)。もともと、神さまのまえに隠す必要はないのです。正直に言えば良いのです。どうして神さまの御前に正直になれないのでしょうか。それは、僕たち私たちが、まだまだ神さまの本当のすばらしさ、どれくらいすばらしさを知らないからです。神さまは、僕たち私たちの悪いこと、良くないことも全部ご存知で、その上で、愛して下さっています。誰にも言えないこと、嘘でごまかしていること、それは、神さまの御前には、もう分かれています。今朝、この説教を聞いて、自分が嘘をつき続けていることがあれば、それを先生か、分級の先生に教えて下さい。一緒にお祈りしましょう。神さまは、イエスの十字架のゆえに、どんな罪でも赦して下さいます。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句]

出エジプト記20章16節

隣人に関して偽証してはならない。

〈ねらい〉

嘘をついてしまった時も、神様はすべて真実をご存知であることを知り、神様の前で悔い改める。

〈展開例〉

みなさんは、嘘をついてしまったことがありますか。先生も含めてここにいる全員、嘘をついてしまったことがあるはずです。どうして嘘をついてしまうのでしょうか、考えたことはありますか？

自分が悪いと分かっているのに、お父さんお母さんや先生に叱られなくて、兄弟やお友だちのせいにしてしまうことがありますね。お父さんお母さんや先生に叱られなくても、神さまは本当

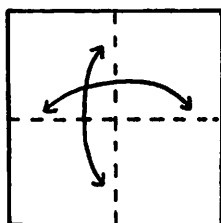
のことを全部よく知っていて、わたしたちが嘘をついたことをとっても悲しんでおられます。もし、今、嘘をついてしまっていることがあれば、後で先生にそっと教えてください。一緒に神様にお祈りして、神様に赦していただきましょう。

〈お祈り〉

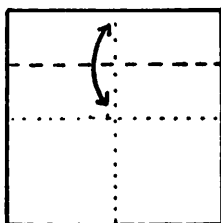
天の父なる神さま、言いにくくても本当のことが言える子どもにしてください。嘘をついてしまったときは、正直にごめんなさいと言えるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

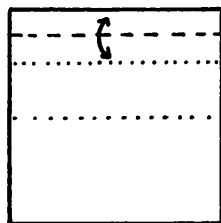
「おりがみで」
えんぴつを作ろう!



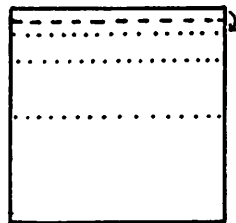
① 点線部分に
折り目をつける



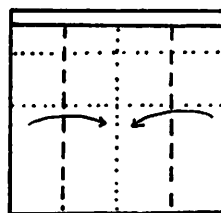
② 点線部分に
折り目をつける



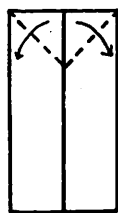
③ 点線部分に
折り目をつける



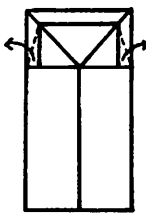
④ 点線部分で谷折り



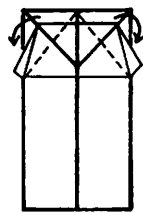
⑤ 点線部分で谷折り



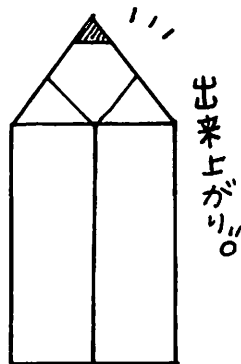
⑥ 谷折り



⑦ 谷折り



⑧ 山折り



〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ① アナニアとサフィラは教会に何を持ってきた？
(→金)
- ② それは土地を売ったお金の全部だった？ (→一部だった)
- ③ それは良いことだった？ (→良くなかった)
- ④ 献金が少なかったのが悪かった？ (→うそをついたのが悪かった)
- ⑤ サフィラは正直に言った？ (→嘘をついた)
- ⑥ その嘘はばれなかった？ (→神さまはご存じだった)

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

- ① 神さまはうそをつくことがある？ (→いつも真実であられる)
- ② うそをつかなければ、人の悪いところをいいふらしてもいい？ (→いけない)
- ③ 他の人のことはしゃべらない方がいい？ (→正しく、その人のために話すべき)

〈考えてみよう〉

誰かと話をしていたら、そこにはいない自分の大切なお友だちの悪口の話になってしまったということはないでしょうか。そのようなとき、どうすべきでしょうか。自分もみんなに合わせて悪口を言いますか。何も言わないで黙っていますか。神さまはどうすることを願っておられるでしょうか。そのお友だちを守ってあげることでないでしょうか。とても勇気のいることです。でも、神さまが守ってくださることを信じましょう。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。私たちはうそをついてしまうことがあります。ごめんなさい。何でも正直に神さまにお祈りして、お友だちとも楽しくお話できるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

神様はすべてをご存知であり、この方の前でごまかす必要はない。その点で、主の教会の前であざむいたアナニヤとサツピラの例が引かれる。対人関係では、「殺してはならない」が人の命を、「盗んではならない」が、人の所有を重んじることが教えられた。「偽証してはならない」が人の正当な名誉、尊厳を大切にすることが求められる。それは人を立たせる言葉を語ることが求められるということでもある。子どもたちは日常生活において、人の尊厳を傷つけ人を立てなくする言葉に絶えずさらされている。

〈展開例〉

○「偽証」は特に裁判で問題になりました。もし裁判でうそがつかれたらどうなるでしょうか？
考えてみよう。

無実の人が（有罪）になったり、犯人の罪が（ごまかさ）れたりします。人の（名誉）や（信用）が失われます。

○でも私たちは普段、裁判で証言する機会はめったにないでしょう。日常の生活の中で「偽証する」ってどんなことでしょうか？……（人）に対して（不当）な（悪口）を言う。ことや人を（けなし）たり（ウソ）を言ったりして人の（名誉）や（財産）を損なう。人の悪い（噂話）を楽しむ。そういうことが友だち同士でもありませんか？ 考えてみよう。そんなことを耳にしたり自分もしてしまったことはありませんか？

○口に出ることはどこから？（心）から。普段、人に対して思っていることが口から出るのですね（ルカ6:45、マタイ12:33～37、マタイ15:18～20）。

○自分や他人について、（その人の悪い所や失敗）をおおげさに話したり、（その人のよいところ）

を小さく話すこと。人のことを正しくかばう言葉に耳を貸さない。人がみんなに善く思われるのを喜ばない。人が悪く言われるのを喜ぶ心。これが「偽証」の罪です。

○人をけなすこと。その源は（心）。だからその（心）がきよめられていくように祈りましょう。

○言葉で人をおとしめることの過ち。ヤコブ3章1～12節など。（舌）を制御するように、（悪口）を言い合うのを止めるように。

○この戒めに従うのは、どちらでしょうか？

①Aさんはみんなにとてもほめられている。でもわたしはあの子の失敗や欠点を知っている。本当のことだからみんなに話してやろう。

②Aさんはみんなからあまりよく思われていないみたい。失敗や欠点もあるけれど、Aさんがみんなと仲良くなれるように、何か話すことないかなあ。

②のように考えることが、この戒めで求められています。

○この戒めで求められているのは、お互いが仲良く生きることが出来るような心と言葉。相手が励まされ、慰められるような言葉を語ることで。（子どもたちの生活の中での体験を語り合うなどできるとよいでしょう）。

〈祈り〉

天の神様、私たちの心には、人の悪口や悪い噂話を聞いたり話したりしたい罪の心があります。やきもちをやく心もあります。イエス様が私たちと一緒にいてくださって、私たちに、人の幸せを喜ぶ心を与えて下さい。人をけなしたり、悪口を言うのではなくて、人の幸せを願い、人を励ますような言葉を話すことができるようにしてください。

【目標】

第九戒を考える。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？(分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である)

②改めて御言葉に取り組む

→使徒言行録5章1～11節を生徒と読む。

【ポイント】

偽証してはならないとは、逆に言えば真実を語るべきであるということである。すべての嘘は神様によって見抜かれている。たとえ嘘を言うことでその場をうまく収められるような状況でも、口から偽りを発するべきではないだろう(箴言14:25、ヤコブ3:10)。もし言いづらいことであっても、主イエスが反対者を前に堂々と真理を語られたように、自分に悟らされた真実を、たとえ痛みを担いつつも語る。第九戒は私たちがその様な真実の証人になり、咎めなく祝福された内面によって歩んでゆくことへと招いている。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての嘘、偽証の問題を生徒と分かち合う。

Q. 嘘で固めて最後には結局失敗した、などという経験はありますか？

Q. 自分がついた嘘で、心に引っかかっているものはありますか？

Q. 嘘をつくときどんな気持ちになりますか？
人に対して、自分に対して、神様に対して。

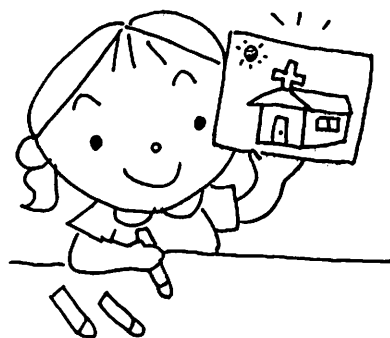
Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. あなたが本当のことが言いづらい時は、たとえばどんなときですか？

Q. どうすれば嘘をつかずに歩めるでしょうか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？



テキスト マタイによる福音書18章21節～35節

〈何回赦すの？〉

ペトロは、「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか」(21)と主イエスに尋ねます。これは当時のユダヤ教のラビたちが三回まで赦しなさいと教えていたと語られています。また、主イエスは「一日に七回あなたに対して罪を犯して、七回、『悔い改めます』と言ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい」(ルカ17:4)と語られていました。つまりペトロが気にしていたのは、人を何回赦すべきかという回数のことでした。

しかしルカ福音書において主イエスが語られる七回とは、回数のことではなく、「七」という数字の持つ無限を語っておられたのであり、「七の七十倍までも赦しなさい」(23)とここでお語りになることにより、ペトロの誤りを指摘します。そして、主なる神様が、いかに私たち人間に対して、忍耐強く罪をお赦し下さり、救いに導いて下さっているかという、神の真理が明らかにされていきます。

〈借金を帳消しにする〉

続けて主イエスは、この主なる神様がどれだけ大きな罪を赦して下さっているのかを、一つのとえによってお語り下さいます。

主イエスが再臨され、最後の審判が行われることにより、私たちの生涯の罪が明らかにされていきます。それが23節で語られている「決済」です。1デナリオンが1日の労賃とされており、約1万円とすれば考えやすいでしょう。そして1タラントとは、6000デナリオンに相当します。ですから1万タラントとは、6000億円に相当します。普通の労働者が一生涯働いても得られないような金額です。そのような負い切れない借金を前にし

て、家来は主君に対して、返済の延期を申し出ます(26)。すると主君は家来を憐れに思い、罪を赦し、その借金をすべて帳消しにして下さいます(27)。まさしくこの罪の赦しこそが、主なる神様が私たちの持っている罪を赦して下さっている姿そのものです。

ところがこの家来は100デナリオンの借金をしている仲間に対して、「捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った」のです(28)。100デナリオン(100万円に相当)ですから、大きな金額です。しかしこの家来が免除された1万タラントに比べますと、取るに足らない金額です。にもかかわらず、「どうか待ってくれ。返すから」としきりに頼む仲間に対して(29)、家来は彼を赦さず、牢に入れます(30)。主君はそのことを知り、家来を牢役人に引き渡します(34)。

〈キリスト者に求められていること〉

私たち自身は、主を信じることにより、すでに背負いきれない借金である罪の赦しを与えられています。主がお赦し下さった罪に比べると、人間相互になされる罪は、小さいのです。もちろん、生命に関わる事柄、財産に関わる事柄など、私たち自身からすれば人生に関わるような重大な罪もあります。しかしそれとて、主の御前で、キリストの十字架による罪の赦しが宣言されることに比べると、小さなことなのです。だからこそ、主の祈りの第五の祈願において「我らに罪を犯す者を、我らがゆるすごとく、我らの罪をもゆるしたまえ」と語るとおり、私たちもまた、悔い改めを表明し、罪の赦しを求めようとする人に対して、罪を赦し、和解をすることが求められているのです。

(辻 幸宏)

カテキズム 子どもカテキズム問61,62

子どもカテキズム

問61 第十戒は何ですか。

答 「隣人の家を欲してはならない」、です。

問62 第十戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 神さまは、私たちに必要なものを与えてくださいます。

しかし、人は、少しでも多くのものを自分のものにしようと欲しがります。

むさぼりの心こそ、偶像礼拝です。それを考え、実行してはいけない、ということです。

むしろ、神さまは、私たちの心を、人の幸せを願うように造り変えてくださいました。

ですから、私たちは神さまから与えられたものに満足し、感謝し、

人に与えることを喜びとするのです。

参考教理問答 『ウ小教理』79～81、『ウ大教理』146～148

『ハイデルベルグ』113、『ジュネーヴ教会』213～216

カルヴァンは、「ここで主はさらに、我々の思いにも律法を課そうと為さるのであります。この思いとは、ある押さえがたい欲望や願いを包含しますが、一定の意欲にまではなっていないものがあります」と語ります。律法は、外面的な行為として表れる事柄だけではなく、思いと欲望として表わされる心の行為に対しても、またそれが「思いや欲望」として外面化される以前の未定形のものに対しても、命じられたものであることを明らかにします。明確な決意や思い、計画や願望として形を成していない、心の奥深くにある「もの」、そのようなものに対する戒めとして、この第十戒を考えるのです。まさにそれこそ「貪り」の正体かもしれません。行為の前に、思いの前に、いまだ思いとして形を成していないドロドロとした欲情そのものが取り除かれなければなりません。思いはかったときには、既に心は欲望に征服されてしまっているからです。この戒めは、心がそのように征服される前に、心を守り、心が潔められることを求める戒めです。

「満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です。私たちは何一つこの世に持って来なかったし、また何一つ持って出ることもできません。衣食があれば、それで満足すべきです」(新改訳、テモテ6:6～8)。神から与えられたもの

によって満足し、満ち足りることがこの戒めで求められています。それは単に物質的なものばかりではなく、衣食住の外的環境の全体や、自分の夢や願望とそれに対する現実の在り方など、多岐に及びます。私たち自身の状態に全く満足することです。

私たちは自分について不満を覚え、様々な夢や希望を抱いて、向上発展をはかります。それが今の自分を励まし、さらなる成長に導くのですが、そこにある落とし穴にも注意しなければなりません。今既に豊かに与えてくださる神の恵みと祝福への感謝なしに、更なる要求を突き付けるということです。私たちが願望の塊となり、欲望の虜である限り、どれほどの祝福に囲まれても、依然として不満足で、欲求不満のままでしょう。そして今を楽しみ喜ぶことなく、夢ばかりを追うこととなります。そうではなく、「今」を満ちたりて喜び楽しみ、感謝して生きるということこそ、神が望んでおられることではないでしょうか。

またこの満足は、自分自身の生活で終わるのではなく、隣人の生活にも及ぼされるべきものです。互いが互いを満たし合い、互いを満足をもって見つめ合う生活、そこに神の豊かな祝福が注がれ、またそれを覚えて満ち足りる、本当の幸せがあるのです。(三川栄二)

テキスト マタイによる福音書18章21～35節

カテキズム 子どもカテキズム問61,62

〔単元のねらい〕

十戒の第十戒を学ぶ。コロサイの信徒への手紙第3章5節に、「だから、地上的なもの、すなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および食欲を捨て去りなさい。食欲は偶像礼拝にほかならない」とある通り、隣人の家を欲すること、むさぼり、つまり食欲こそは、偶像礼拝なのであり、罪の根っこが、食欲であるという理解が成り立つ。第十戒が、罪の親分ということであろう。自己中心、自己保身、自己絶対化、自己正当化……。この罪を罪として認めさせるために、照射できるのは福音の放つ光のみである。しかも、啓示の光は、暗闇を明るみに変えてしまう。十戒を唱えて歩む日曜学校は、常に、隣人に開かれ、隣人の祝福を願って歩む。それが、伝道となり、証となる。ここでも、「受けるよりは与えるほうが幸いである」（使徒言行録第20章35節）と仰せになられた主イエスを紹介する。テキストは、仲間を救さない家来のたとえが選ばれている。ここで、我々がどれほど罪赦され、恵まれた存在であるのかを説得したい。そのためには、むさぼりの罪と戦って完全に勝利した主イエス・キリストを礼拝させることである。そこでこそ、信じることができ、主に倣って主の後ろから戦うキリスト者としての新しい生へと励ますこともできる。

「罪の親分と戦える人、それは誰？」

ある日のことです。イエスさまはお弟子さんたちにもっとも大切な使命についてお教えになりました。それは、やがてイエスさまが天に戻られたとき、地上でお弟子さんたちがつくる教会のもっとも大切なお働きを予告するものでした。教会が心を合わせてお祈りすれば、罪を赦すことができるし、そのようなお祈りしている場所には、イエスさまが共にいて下さるといすばらしいお話でした。

さて、それを聞いていたペトロは、イエスさまのところに来て言いました。「主よ、兄弟が私に対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回まででしょうか。」このようなことを申し出たペトロさんの心の中には、どのような思いがあったのでしょうか。それは、イエスさまにほめてもらいたかったからです。「イエスさま、わたしは、兄弟が自分に罪を犯しても、赦すことができます。それも一回や二回我慢するのではなくて、七回位まで、平気です。」するとイエスさまは、厳かに仰せになられました。「七回どころか、七の

七十倍までも赦しなさい。」掛け算のできるお友達はすぐに計算してしまっただしょう。490回。つまり、悔い改める人には、どれだけでも赦し続けてあげなさいと命じられたのです。

そして、このようなたとえ話を話し始められました。1万タラントンつまりざっと6000億円の借金をつくって返していない家来がご主人様の前に連れ出されたのです。主人は、家来に自分も妻も子も持ち物全部を売り払って返済するように命じられました。考えてみれば、持っている物全部を投げ打っても、どうてい返せる当てなどありません。でも家来は頭を地面にこすりつけて、言います。「どうか、待って下さい。きっと全部お返しします」と、何度も何度もお願いしました。するとどうでしょう。ご主人様は、彼を憐れんでくださって、なんとそのすべての借金を帳消し、なかったことにして下さったのです。

家来は「やったあー」とばかりに外に飛び出して行きました。スキップしたり飛び跳ねながら、嬉しくてしかたがありません。しかし、そこに家

来仲間と行き合いました。実は、彼は、その仲間に100万円貸していたのです。家来は仲間を捕まえて首を絞めて言いました。「借金を返せ」。仲間は、さっきの家来のように地面に頭をつけて「どうか持ってくれ、返すから」と頼みます。ところが、家来は赦そうとしません。返すまで牢屋に入れてしまったのです。これを聞きつけたご主人様は憤りました。そして、この家来を借金を返すまで牢屋に入れるように命じたのです。主人は言いました。「不届きな家来だ。お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか。」

皆はどう思いますか。この家来がしたことをどう思いますか。ご主人が、この家来のしたことに怒り、牢屋に入れてしまったことは当然とは思いませんか。

イエスさまは、このたとえ話をどのような思いでお語りになられたのでしょうか。自分がどれだけ、神さまに赦されているのか、そのことを忘れて生きる時、人は、罪を犯すことになるということです。自分がどれだけ、神さまからの恵みを受けているのかが分からなくなってしまったときは、仲間の持っているものがうらやましくなるのです。自分の方が少ないと思ったり、自分の方が多くなくては気がすまなくなってしまったりするのです。むさぼる心とは、自分の持っているもの

で満足できない心です。自分は、神さまから豊かに祝福されていると信じられないとき、むさぼりの心はあふれ出すのです。動き出すのです。そして、ときに、相手の首を絞めてでも、返せ、返せと怒りまくるのです。相手の方が少なくしかもっていないなくても、それでも相手のものを奪おうとするのです。

この家来は、自分がご主人様からどれほど赦されているのか、言葉を換えれば、どれほど、豊かな恵みを受けているのかを考えれば、晴れ晴れとした思いで、仲間を赦してあげられるし、それで損したと考えられるより、もっともっと比べられないくらいに自分が得している、祝福されていることに気づくことができるはずなのです。

僕たち私たちは、それくらい神さまから豊かに得ている、恵みを受けていると信じていますか。日曜学校に来て、まことの神さまを礼拝できて、神さまの子どもにさせていただいていることは、お金に換えられない宝です。イエスさまは、僕たち私たちの罪を赦す為に、御自分のお命を十字架におさげくださいました。イエスさまは、いつでも、どんなときでも、僕たち私たちの幸せを願って働かれました。そのイエスさまを信じている僕たち私たちです。自分の持っているもので満足し、人に分かち与えることができますように。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句]

出エジプト記20章17節前半

隣人の家を欲してはならない。

〈ねらい〉

神さまから与えられているあふれる恵みを感謝し、満足することをおぼえる。

〈展開例〉

生まれたばかりの赤ちゃんを見たことがありますか？ 手も足も小さくてかわいいですね。赤ちゃんは生まれてくるときお洋服を着ていますか？ お母さんのおなかの中でおもちゃで遊んだりしているのでしょうか？ そんなことはありませんね。赤ちゃんは何にも持たずに生まれてきます。でも、赤ちゃんが生まれるとみんな喜んでお洋服やおもちゃをプレゼントして、赤ちゃんは急にいろんな物を持つようになります。赤ちゃんから大きくなったみなさんはどうでしょう。もっとずっとたくさんの物を持っていると思います。お片づけできないくらいたくさんおもちゃを持っていても、お友だちの新しいおもちゃがうらやまし

くなることがありますね。テレビを見ていてお母さんに「あのおもちゃ買って!!」と言ったことはありませんか？

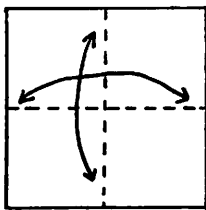
十分に持っているのに「まだほしい。まだ足りない」と思うことを、神様は悲しみます。みなさんが持っているものは全部、神さまがお父さんお母さんを通してくださったものです。住むおうち、着る物、食べる物、全部が神さまから十分に与えられていることを感謝しましょう。

〈お祈り〉

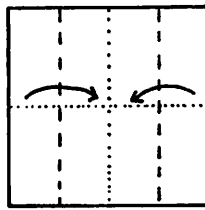
天の父なる神さま。いつもわたしたちに必要なものを十分にあたえてくださってありがとうございます。神さまの恵みを忘れないで、困っている人がいたら分けてあげられる子どもにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

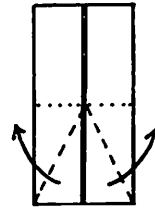
ありがみで
Tシャツを作ろう!



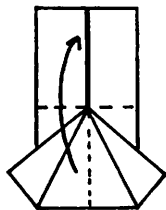
① 点線部分に
折り目をつける



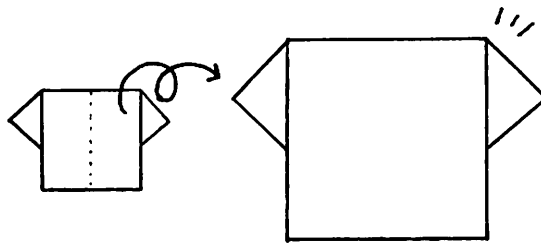
② 点線で谷折り



③ 谷折り



④ 谷折り



⑤ うらがえすと...

できあがり!!

〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ①家来は主君にいくら借金をしていた？（→一万タラントン）
- ②王はどうした？（→借金を帳消しにしてあげた）
- ④家来の仲間は、この家来にいくら借金していた？（→百デナリオン）
- ⑤それは一万タラントンより多い？（→少ない）
- ⑥家来は仲間を教してあげた？（→教さなかった）
- ⑦それは正しいことだった？（→ずるいこと）
- ⑦このたとえ話の借金は何のこと？（→罪）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

- ①むさぼりとは何？（→人のものを何でも欲しがること）
- ②そのような、何でも欲しい、自分が大事、という思いを何という？（→偶像礼拝）
- ③私たちは何を求めるべき？（→人の幸せ）
- ④神さまは必要なものをどれくらい与えてくださる？（→十分に満足できるだけ与えてくださる）

〈考えてみよう〉

人と自分を比べて、うれしくなったり、くやしくなったりすることがあるでしょうか。ゲームや遊び道具を自分よりもいっぱい持っているお友だちがうらやましくなるときがあるでしょうか。自分も欲しいなあと思うこと自体は悪いことではありませんが、お友だちのものをとってやろうと思えば、それはむさぼりです。あるいはまた、スポーツなどで相手に負けて、次はもっとがんばろうと思うようなくやしきなら悪いことではないでしょうが、相手が失敗したらいいのと思うようなことはいいことでしょうか。自分の不満を相手にぶつけるようなことは、むさぼりの罪なのです。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。神さまはいつも必要なものを私たちに十分に与えてくださっています。神さまに感謝して、また、この恵みをお友だちにも与えてあげることができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

人の欲望はあくことのないもので、それが満たされることを追求しても本当の幸せはないことを理解する。与えられているものを神の恵みとして感謝することを覚える。ナボトの畑の話は典型的な事例である。また、「偽証してはならない」に反する罪の例でもある。

〈展開例〉

○「むさぼり」ってどういうことでしょうか？
ヘブライ13章5節を読んでみよう。「むさぼり」の心は（自分に与えられた）もので（満足）しない心です。ここからどんなことが出てくるでしょう。

○他の人がたくさんもっていたら（ねたましく）思う。（人のもの）を（横取り）したくなる。そんなときは、自分がほしいものを手に入れても満足（出来）ません。いくらでもほしいと思って（手に入れ）ようとします。（欲望）の（とりこ）です。

○列王記上21章で、アハブは、ナボトの畑がなければ困るのでしょうか？（そうではありませんでした。王様でしたから。でも満足できませんでした。）ナボトの畑をどうしても欲しいと思ったのです。人のものまで欲しいと思ったのです。これがむさぼりの心です。

○申命記5章21節を読んでみよう。

○自分がもっと成長するよう願って努力すること

は大切です。でも気をつけなければならないことをこの戒めは教えます。あなたは、どんな気持ちでいますか。

①今持っている物ではまだまだ足りない。ゲームソフトも、貯金も、ほかにもいろいろ。もっと欲しい。友だちは私が持っていない物ももっている。私が欲しいものを持っている。私だってどうしても欲しい。

②今住んでいる家も、着ている物も、買ってもらえる物も、とても不満です。もっともっと豊かな生活がしたい。今あるものでは感謝する気持ちになれない。

○上の①と②のどちらも大切なことが欠けています。それは何でしょうか。

・（神様）に、（感謝）する心。

・今あるもので（満足）する心。

今それぞれが持っている物は、（神様）が与えて下さったものです。（神様）はちゃんと私たちに（必要なもの）を与えて下さいます。与えられたものを（神様）に感謝していただき、（満足）するとき、（むさぼり）から守られます。

〈祈り〉

天の神様。むさぼりの罪をお教し下さい。誘惑からお守り下さい。あなたは私たちに必要なものをいつも備えて下さいます。私たちが、まずあなたが与えて下さったものを心に留めて感謝する心を持つことができるようにして下さい。そして満足して、あなたが与えてくださるものを喜ぶことができますように。

【目標】

第十戒を考える。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？(分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である)

②改めて御言葉に取り組む

→子どもカテキズム問61～62を生徒と読む。

【ポイント】

むさぼりとは、あくなき追求である。その引き金は自分と他人との比較、そこから生まれる不満足である。思春期の少年少女には特にこの劣等感、コンプレックスが強くある。自分には神様からかけがえのないたくさんのもが与えられていることの発見へと導かれたい。私には私だけに用意された道が備えられている。それを備えてくださったのは、私をかけがえのない者として愛して、私に最善を為してくださる神様である。このことを知る時、私たちは他人との比較から安心して解き放たれて自由になれる。自分が持っているもの、人格、特徴、体、性別、興味、神様からの愛等々に感謝できるようになる。すなわち自分が自分自身の今を喜んで生きることができるようになる。第十戒はこのような生き方への招きである。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての他人から奪いたいと思うような経験、むさぼりとの葛藤とその問題への向き合い方について生徒と分かち合う。

Q. 人と自分を比べてしょんぼりしてしまうような経験はありますか？

Q. 逆に自分に無い部分を、自分のオリジナリティーと考えることはできませんか？

Q. 自分が自信を持っているもの、これは自分に与えられているなあと思える部分は何ですか？

Q. 神様からあなたは何をもらいましたか？
自分を見ながら数え上げていきましょう。

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. あなたが今本当に足りなくて、どうしても他人からむさぼり取らなければいけないものは、本当にあるでしょうか？

Q. 今週も神様はあなたに必要なたくさんのもを与えてくださっていますし、これからも与えてくださいます。この一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト 詩編119編97節～104節

〈主による人間の創造〉

主なる神様は、「我々にかたどり、我々に似せて人を造」られました（創世記1:26）。だからこそ、主なる神様の知識と知恵は、どの様な人間が考え出した知識や知恵にも勝ります。

そして私たちは、この神様の知識と知恵を、今、神の御言葉である聖書によってのみ、手に入れることが出来ます。新約の時代に属する現在では、顕現など他の啓示はすべて閉ざされており、聖書こそが、神の唯一の啓示の書となっているからです。

〈律法のとらえ方〉

ところで、神の啓示の書である聖書、特に神の戒めが語られている律法を、私たちが読む時、読み方によって全く異なったとらえ方をすることとなります。

第一の読み方は消極的な意味で、主が戒めを私たちに命令しているから、それを私たちが守らなければならないと解釈することです。この様な読み方をしますと、神様から戒めを押しつけられ、強いられる行いとなり、神様に対して、戒めを守らなければ裁きを行う恐ろしい方である印象を与えます。この様な読み方を、聖書は求めていません。

他方、主が私たちに救いに導くための道を指し示すことが聖書に語られていると、積極的に読むことです。まさしくここで与えられている詩編は、そのことを説き明かしています。

〈心を砕いて読む〉

詩編は「(律法に)心を砕いている」(97,99)と語ります。「黙想、祈り、思いにふける、ロザさ

む」といった意味があり、ヨブ記15章4節では「嘆き訴える」と訳されている言葉です。全く疑うことなく主なる神様を信じ、全てを主なる神様に委ね、主がお語り下さる律法を全き道として受け入れている詩編の作者の姿がここに示されています。主の戒めは、どの様な敵の知恵、あらゆる師、長老たちの英知に勝っています。なぜならば、それらは、神の戒めを根源にもっているからです。

また、神の戒めは、罪のない聖・義・真実なる神様から発出しているからこそ、これに聞き従うことにより、悪の道に逸れることはなく、またあらゆる罪からも守られるのです。だからこそ裁きを行う恐ろしい神が語っている言葉としてではなく、あらゆる敵と罪から私たちを守るための道をお教え下さっている愛と恵みに満ちた言葉として神の戒めを読むことにより、密よりも甘い味を味わうことが出来るのです。

〈神の武具〉

パウロは、エフェソ書において次のように語ります。「だから、邪悪な日によく抵抗し、すべてを成し遂げて、しっかりと立つことができるように、神の武具を身に着けなさい。立って、真理を帯として腰に締め、正義を胸当てとして着け、平和の福音を告げる準備を履物としなさい。なおその上に、信仰を盾として取りなさい。それによって、悪い者の放つ火の矢をことごとく消すことができるのです。また、救いを兜としてかぶり、霊の剣、すなわち神の言葉を取りなさい。どのような時にも、“霊”に助けられて祈り、願い求め、すべての聖なる者たちのために、絶えず目を覚まして根気よく祈り続けなさい」(エフェソ6:13-18)。

(辻 幸宏)

カテキズム 子どもカテキズム問63

子どもカテキズム

問63 あなたは、この十戒を喜んで生きるのですか。

答 はい。聖霊なる神さまの助けの中で、御言葉を喜んで守り、生きます。

参考教理問答 『ウ小教理』85～90、『ウ大教理』153～160

『ハイデルベルグ』86～91、『ジュネーブ教会』224～226

十戒を学ぶ前に「福音」、つまり「罪からの救い」を学んだわたしたちには、この神の恵みに応えていくことが求められています。神の恵みに対する感謝の応答、それが信仰生活です。それは律法でも義務でもない、わたしたち自身からほとばしり出てくる神への感謝と賛美なのです。

ここでいわゆる律法（その中心が十戒）が、福音（使徒信条に要約）の「後」に置かれていることに注意してください。ここに改革派信仰が顕著にされています。改革派信仰によれば、「律法から福音」ではなく、「福音から律法」なのです。律法は、人間を断罪し、恐怖と混乱におとしめるものではなくて、人間の生きる道筋です。律法によって罪に絶望して人間が、キリスト（福音）へと追いたてられていく（律法の第一用法、カルヴァンの区分による）というだけではなく、福音によって生きる者とされ、神の恵みによって救われた者が、どのようにして神への感謝をあらわすかという、神への感謝のささげものとして生きていく生き方の道筋（律法の第三用法）として与えられたということです。

ここにわたしたちの「善い行い」があります。善い行いを功績として、その報いとして自分の救いを勝ち取るということではなく、先に神の救いがあり、救われた者として、神への感謝と賛美のうちに、神の御心に応えていくあり方です。「それは、わたしたちがその恵みに対して、全生活にわたって神に感謝を表わし、この方がわたしたちによって賛美される」ということです（ハイデルベルグ問86）。わたしたちが喜び感謝して救いの人生を歩むこと、それが神の栄光を表わすことにほかなりません。

「感謝」とは、具体的には「十戒」と「主の祈り」に生きることです。それによって、わたしたちは心からの感謝と賛美を神に捧げ、その喜びの中で生きることによってその祝福にあずかりながら、恵みの中で生きていくことができるのです。

そこでの神の恵みに対する感謝とは、まず自分の悲惨さ（罪）を自覚して、悔い改めることから始められます。真実な感謝は真実な悔い改めから生み出されます。そこでまず「悔い改め」が語られます。この「まことの悔い改めまたは回心」は、「古い人の死滅と新しい人の復活」（同88）の二つから成り立ちます。「古い人の死滅」とは、「罪を心から嘆き、またそれをますます憎み避けるようになる」（同89）ことで、「新しい人の復活」とは、「キリストによって心から神を喜ぶこと、そして神の御旨に従ったあらゆる善き業に、心から打ち込んで生きること」（同90）です。こうして「善き業」は、「ただまことの信仰から、神の律法に従い、この方の栄光のために為されるもの」（同91）となります。ウ小教理では、「命に至る悔い改め」によって、「罪人は、自分の罪を本当に自覚しキリストにある神の憐れみを理解して、自分の罪を歎き憎みつつ、罪から神へと立ち帰り、新しい服従をはっきりと目指して努力するようになる」と答えられます。それは救いを得るための人間の業、功績、律法的行為ではなく、救いにともなう恵みとして、神が私たちの心に起こしてくださる働きです。人間の熱心や努力に基づくものではなく、人間の力や意志によって生じるものでもない、このことも神からの「恵みの賜物」なのです。（三川栄二）

テキスト 詩編119編97～104節
カテキズム 子どもカテキズム問63

〔単元のねらい〕

十戒の学びを続けた日曜学校の日々、念頭にあったのは、地域の子らの足が遠のかないように……という切なる思いである。公教育では、心の教育が主張されている。しかし内実は、愛国心以外のなものでもない現実がある。我々こそ、心の教育を施す責任があると信じる。かつて、日曜学校とは、子どもたちに「道徳」を教えてくれる場所であるという期待（信頼）が存在していたように思う。しかし、今、それに応えてみせるように機能させることは、断じてできない。福音が生み出し、育てる人間像は、単なる道徳教育で成し遂げることはできない。十戒を学び終えようとするカリキュラムで子どもたちがますます、御言葉を甘く感じるほどに、主イエス・キリストと親しみ、主イエスを大好きになるように……、これこそ、お互いの心の底からの祈りである。「良い子になりましょう」という道徳では実現不可能なことは言を待たない。詩人の御言葉賛美の秘訣、御言葉の甘さを伝えることは、まさにテクニック・教材などでは果たしえない。教師自らが、この甘さを経験せずには語れない。深く問われるが、我々がここに立っているということは、御言葉によって導かれてきた信仰の歴史（経験）があることに他ならない。それを真剣に、謙虚に伝えたいと願う。

「蜂蜜より甘いもの、それは何？」

僕たち私たちは、これまで三ヶ月にわたって十戒を学んできました。もう覚えられましたか。そして、この十戒を唱えるとき、心の中にどんな思いが湧くようになりましたか？

大人の礼拝式では、毎週、十戒を唱えています。牧師先生は、十戒を唱える前に、こう言います。「十戒は、神さまからの愛の言葉です、私たちを自由にする祝福の言葉です。同時に、悔い改めを与えてくださる御言葉です。十戒をもって、神さまに感謝、賛美しましょう。」

十戒は神さまからの愛の言葉であることは、これまでで良く分かりましたか。今日のカテキズムの答えを自分自身の言葉として、読むことができましたか。今日は、そのおさらいをしたいと思います。

今日、この礼拝式に与えられた聖書の御言葉は詩編でした。詩人はこう歌いました。「わたしはあなたの律法をどれほど愛していることでしょう。」律法とは、神さまの御言葉、御教え、十戒のことでもあります。神さまの御言葉を受すと

は、どんなことでしょうか。たとえば、「何々を愛する」という言い方がありますね。犬を愛すると書いて、愛犬と言います。鳥を愛すると書いて愛鳥と言います。大好きな本を愛読書と言ったり、車を愛すると書いて愛車と言います。皆であれば、どうでしょうか。おもちゃを愛する、お人形を愛する、ゲームを愛する、漫画本を愛するとかになるでしょうか。でも、「何々を愛する」というのは、普通は、人間やせいぜい生き物に使うことが多いような気がします。愛するというのは、モノではなく、人間に対して使う言葉がもともとのような気がします。でも、この詩人は、御言葉を受すると言うのです。まるで神さまの御言葉が生き物のような気がしませんか。

でも、よく考えてみるとどうでしょうか。今先生は、説教をしていますね。言葉が先生の口から音になって、みんなの耳に届いています。届いていますよね。言葉が皆の耳に届いているとき、そこには、いつでもそれを語った生きている人間がいますね。言葉とそれを話す人間とは、その意味

ではばらばら、別々ではないのです。

でも、十戒の第九戒を思い出して下さい。「あなたは偽証してはならない」と学んだとき、僕たち私たちの言葉がいつでも、どんなときでも真実であるわけではありませんでした。都合が悪くなると約束を破るし、嘘をついて自分を守ろうとするし、本当のことは分からないくせに人の悪口や噂話を言ったりします。つまり、自分の言葉と自分自身が、一つになっていないのです。これが、僕たち私たちの姿です。それを罪人というのです。

でも、神さまだけは違います。神さまは、嘘をつかれません。神さまの御言葉は、神さまを裏切らないのです。僕たち私たちは、自分の言ったことを平気で破ったり、約束を忘れてしまったりできるのです。けれども、神さまは御自分の御言葉を破ったり、忘れてしまうことはおできになりません。つまり、神さまの御言葉は、神さま御自身なのです。やがて、学ぶカテキズム問69にこうあります。「御言葉とは何ですか。」答、「生ける神の言葉、イエス・キリストです。」

今日の詩人は、こうも歌います。「あなたの仰せを味わえば わたしの口に蜜よりも甘いことでしょう。」神さまのお話を聞いて、それを耳だけで聞くのではなく、心で聴いて、それをまるで食べ物のように何度も噛んで噛んで飲み込むと、蜜よりも甘いと感ずることが出来ますというのです。

十戒を読んで、声にだしてみても、そのように感じますか？ 甘いですか。「してはならない、してはならない」とお父さんやお母さん、学校の先生に言われると、だんだん、いらいらしてきますよね。「うるさーい、分かってるよー」と叫びたくなることもあるでしょう。そんなときの気持ちは、苦いでしょう。でも、ちょっと落ち着いて考えてみると、「そう言われるのは、やっぱり、僕のため、私のためになるのかもなあ」と思えるかもしれませんよ。そして、何よりも、神さまは、僕たち私たちに十戒を与えて下さったのは、神さまが僕たち私たちをいつまでも神さまの子どもとして、神さまを信じ、神さまを見上げられる場所に置いてくださるためなのだと思えます。事実そのとおりなのです。十戒を忘れてたり、破ったりすると、神さまが見えなくなるのです。信じられなくなるのです。だから、神さまは、この十戒を僕たち私たちのために与えて下さったのです。

御言葉は神さま御自身と一つです。ですから、僕たち私たちは、聖書を大切にします。聖書を甘くなるまで、読めるようにするのです。そのためにも、日曜学校で、先生のお話を聞き続けてください。必ず、先生のように皆にも御言葉は甘い、神さまはすばらしいと歌えるようになります。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] テトスの手紙2章14節

キリストがわたしたちのためにご自身を献げられたのは、
わたしたちをあらゆる不法から贖い出し、
良い行いに熱心な民を御自分のものとして清めるためだったのです。

〈ねらい〉

キリストによって心から神を喜び、神のみ心に従ったあらゆる善い行いに心から打ち込んで生きる。

〈展開例〉

礼拝の時のお祈りで、先生はいつも「みことばを心の耳で聴いてよくわかるようにして下さい」とお祈りします。

教会学校では、小学校のように国語や算数といった何冊も教科書はありません。中学、高校のお兄さんやお姉さんたちも幼稚科のわたしたちも一緒。ただ一冊あるのは聖書です。

この聖書を読んでみことばを学びます。聖書には、主がわたしたちを救いに導く道を指し示すこ

とが書かれています。みことばを心の耳で聴いて、みことばが心の中でいっぱいになって、そこから、神様への感謝と賛美があふれて出て来ます。

わたしたちのような小さな子どもでも、イエス様の恵みによって、大きな愛のわざが出来るようになります。

〈お祈り〉

救い主イエス様を信じ、従う生活をする事が出来ますよう、お導き下さい。今日は敬老の日です。わたしたちのおじいさん、おばあさんや教会の高齢者の方々に、イエス様がいつも一緒にいて下さり、お元気で豊かな恵みの内にありますように。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。

〈やってみよう〉

☆牛乳パックでお皿を作ろう☆
～高齢者へのプレゼントにどうぞ～

○用意するもの

牛乳パック、1人1枚

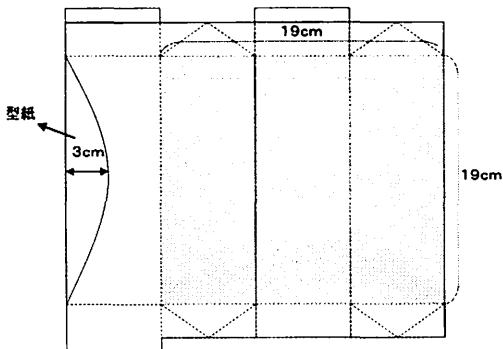
(きれいに洗って開き、乾かしておく)

和紙、千代紙、きれいな包装紙

表側は1辺25cmの正方形

裏側は1辺15cmの正方形

のり

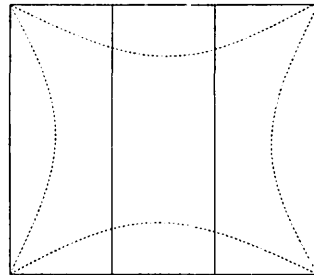


○作り方

①牛乳パックから、周囲を切り落として、一辺19cmの台紙をとる。

②切り落としたものを利用して、型紙をとる。

型紙を利用して目打ちで折り線をつけ、皿に深さを出す。



和紙を貼り付ける

③型紙を利用して折り目をつけ、皿の深さを出す。

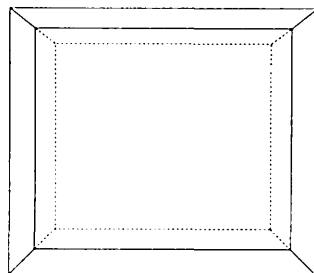
④皿のかたちを整え、表側の和紙を貼り付ける。

はみ出る部分は裏に回す。

⑤裏返して、裏の和紙を貼る。

☆忘れな盆にしても、お菓子をのせてもよいでしょう。

皿の裏側



顔縁のように折り、裏の和紙を上から貼る。(手ちぎりにするとよい)

〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ①わたしは何を愛している？（→律法）
- ②律法とは誰の戒め？（→神さま）
- ③律法はどこに書いてある？（→旧約聖書）
- ④それは何よりも甘い？（→蜜）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

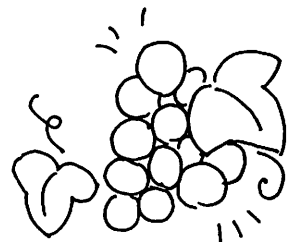
- ①十戒は今でも守るべきものですか？（→はい、これからもずっと守るべきもの）
- ②きれいな物でも食べなければいけないように、律法もいやいや守るものですか？（→喜んで守るもの）
- ③自分の力で喜んで守ることができるでしょうか？（→聖霊なる神さまが助けてくれる）

〈考えてみよう〉

聖書の中で、覚えている御言葉、好きなお話などがあるでしょうか。そういう箇所は、読んでみると心がとてもうれしくなります。毎日、少しずつでも聖書を読んでみましょう。好きな言葉をノートに書いていってもいいかもしれません。もう十戒の言葉は覚えたでしょうか。心がうれしくなりましたか。それとも、こんな大変だなあと思ったでしょうか。でも、十戒は、恐い神さまが語られた言葉ではなくて、みんなを守ってくださる神さまの言葉です。繰り返し読んで、お祈りして、喜んで守れるようになりましょう。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。十戒や、たくさんの聖書の御言葉を与えてくださって、ありがとうございます。聖書を読むのが好きになって、喜んで教えを守ることができるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

これまで学んできた十戒がどのような性格のものであるかを伝えること。すなわち

- ・人を縛る戒律ではないこと。
- ・神様から愛されていることを自覚し、その愛に応えていく道が十戒であること。
- ・人が神と、そして人と人が愛しあって生きる道が十戒に示されていること。
- ・したがって十戒に聞き従うことに本当の幸せがあるということを伝えること。

今回は、これまで学んできた十戒のまとめとしての意味を持つ。

〈展開例〉

○これまで十戒を学んできました。これは神様からのご命令です。「律法」を代表するものです。この律法を、私たちはどんなふう思ったらいのでしょうか。今日の聖書箇所、詩編119編97～104節を読んでみよう。著者は、神様の律法をどう考えているのでしょうか。

「わたしはあなたの律法をどれほど

①（愛している）

②（うるさがっている）

③（こわがっている）

ことでしょうか。」。

もちろん答は①「愛している」。ではどうしてでしょうか。

○十戒に代表される律法を、どう思っているからでしょうか。

①神様が命令しているから、私たちは守らないといけない。破ったら神様は私たちの敵になって罰を下す。十戒を読んだら神様がこわい方のように思える。

②十戒を守ったら神様は私たちのことを好きになって、愛して下さる。だから十戒を破らないように気をつけよう。

③神様が私たちを愛して下さっているから、十戒を下された。私たちが神様と人を愛するようこの言葉を下された。だから、十戒の言葉に従っていくことを通して、ますます神様と人のことを喜んで、一緒に生きることが出来るようになる。とても嬉しいことです。もちろん③ですね。

だから神様の言葉を味わえば、わたしの口に（蜜よりも甘い）ことでしょう（103）。

○十戒を振り返ってみよう。第一戒をロズさむと、聖書の神様だけが（本当）の神様で、私たちのことを熱心に（愛している）からこそ、「わたしをおいてほかに神があってはならない」とおっしゃっていることが分りますね。神様がわたしや他の人の命を大切に下さっているからこそ（殺してはならない）とおっしゃっていることが分ります。神様の戒めは、私たちを敵より（知恵ある者）にします（98節）。

神様の律法を、十戒をいつも心に覚えよう（97節）。

〈祈り〉

天の神様、あなたの戒めをいつも私たちが心に覚えていることができるようにしてください。あなたが私たちを愛して下さいました。私たちも喜んであなたを愛し、人を愛していきたいと願っています。その道を十戒で教えて下さいました。ありがとうございます。この言葉には、あなたから私たちへの愛がつまっています。味わえば、蜜よりも甘いものです。あなたの戒めを愛します。

【目標】

主の御言葉について考える。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→詩編119編97～104節を生徒と読む。

【ポイント】

主の御言葉、これほど真実で、嘘のない、変わらない、重みのある言葉はない。このことを考える機会を得たい。テレビで話される言葉、新聞の言葉、教科書の言葉などと聖書の御言葉を比べて考えてみるならば、その圧倒的な質の違いは歴然としている。それはどういう質の違いなのか？ 踏み込んで議論できれば面白い。御言葉が蜜のように甘いのは、それが私たちを永遠の命の救い、罪とその報酬である死から救う言葉だからである。それは全てのみ言葉について妥当することであり、これまで学んできた十戒の言葉もちろん、私た

ちの救いのために語られた、甘い言葉、私たちに潤し喜ばせる言葉であることを知りたい。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての御言葉の甘さ、その価値について生徒と分かち合う。

Q. 聖書はあなたにとって何ですか？ 教科書？ 参考書の中のひとつ？ 困ったときの人生マニュアル？

Q. 聖書の言葉は特別だと思ったことはありますか？

Q. 聖書の御言葉を、ほかのテレビや新聞や教科書などの言葉と比べてみましょう？ どこか違うところはありますか？

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. あなたが今持っている聖書の御言葉を、今週どのように使っていったらよいでしょう？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？



テキスト マタイによる福音書19章16節～30節

〈まことの自由〉

この青年が十戒のひとつひとつを、幼い時から落ち度なく守ってきたことは確かであったでしょう。しかし、問題は彼の信仰理解にありました。つまり、彼は人はおのがよきわざによって、自力で神の義を勝ち取り、永遠の命を手にする事だと信じていたのです。主イエスの、財産を売り払って貧しい人々にほどこせとのみ言葉は、彼がこれまで行ってきたよきわざにもうひとつ、とりわけ厳しい行いを付け加えよということではなかったはずですが。そうではなく、これは彼の生きかたの根本的な転換、悔い改めを求めるものであったのです。神のみ言葉は、時として聞く者の存在の根底を揺り動かすようなかたちで語られます。そういう経験を経なければ見えてこない大切なものが、私たち人間にはあるのです。

十戒を表面的に守り行うだけでは、人は永遠の命を得ることはできません。真の魂の平安に至ることはできません。それが律法主義の限界です。いくら善行を積んでも、財産をはじめこの世のさまざまなものにとらわれているかぎり、またおのが罪の奴隷となっているかぎり、真の自由はありません。

すべてを捨てて主イエスに従っていくことができる人こそが、何者にもとらわれない真の自由人でしょう。この自由こそ、すべての主イエスの弟子たちが生きるべき自由なのです。

〈神にはできる〉

主イエスは、金持ちが神の国に入ることのむずかしさをお語りになります。人が金銭や財産から

自由になることがきわめてむずかしいことは、世に金銭がらみのトラブルがいかに多いか、金銭のために人生を損ねてしまう人がいかに多いかを考えてもわかります。主イエスに従うという人生において最も大切なことが、財産によって妨げられてしまうほどに、金銭の魔力は根強いのです。

しかし、神には何でもできるとのみ言葉は、私たちに大きな励ましを与えます。人は、それでは誰が救われるのかと人間の側の資格や条件を問題にします。けれども人は信仰によって義とされ、恵みによって救われます。信仰によって主イエスに従って生きる喜びと祝福は、資格なしに神からの恩恵として人間に与えられるものなのです。

自分を義として生きるかぎり、人はできないことばかりです。しかし人にはできないことも神にはおできになります。主イエスは真理なるお方であり、真理は人を自由にします。信仰による自由の中でこそ、私たちは神の戒めを十分に守り行う者とされます。聖霊の恵みにうながされて、十の戒めをまっとうして生きることができるのです。キリストが十戒の完成者であられるとはそのような意味なのです。

財産のみならず、家、妻、兄弟、両親、子供等、この世のあらゆるものが偶像となり、私たちを支配し束縛するものとなりかねません。しかし、主イエスに従うときにこそ、私たちはこれらのものからも自由にされ、真に神を神として生きることができるのです。神のみ言葉を人生の中心に置くことこそが、永遠の命を得る道なのです。

(木下裕也)

カテキズム 子どもカテキズム問64

子どもカテキズム

問64 神さまの戒めを完全に守れる人はいますか。

答 真の人であられるイエスさまのほか、だれもいません。

私たちは、毎日、思いと言葉と行いによって破っています。

私たちは、完全に神さまに背いている罪人なのです。

参考教理問答 『ウ小教理』82、『ウ大教理』149、『ハイデルベルグ』114

私たちはこれまで、十戒と律法が求め、また禁じることは、外面的な行為だけではなく、内面的な心の動機や思い、対人的な態度においてもそうであることを見ていきました。そもそも神の戒めを守り行なうことへの義務感において、欠如している私たちは、戒めを破っていることに対する罪責感も乏しく、それに対する責任感も希薄ですから、律法を破っているという罪認識も希薄です。自分が罪人であるという事実に対して、どこかで割り引いて考え、それを当然であるかのように振るまっています。律法に対しても、そこそこ守っている位にしか考えていません。

しかし問答は神の戒めを「完全に守れる」かと、完全さを要求します。完璧に守っているか、律法が要求する基準は、この完全さです。しかもその完全さは、「思いと言葉と行ない」における完全さなのです。この基準で律法を完全に守り行なう人は、一人もいないというのが聖書の主張です。「善のみ行なって罪を犯さないような人間は、この地上にはいない」(コヘレト7:20)のです。ウ小教理では、「神の戒めを完全に守れる人が誰かいますか」との問いに、「ただの人は、墮落以来、この世では、誰も神の戒めを完全には守れず、日ごとに思いと言葉と行ないにおいて破っています」(問82)と答えます。ウ大教理では、「だれも、自分自身でも、あるいはこの世で受けたどのような恵みによってでも、神の戒めを完全に守ることはできない」(問149)と断言します。またハイデルベルクでは、「神へと立ち返った人たちは、このような戒めを完全に守ることができるのですか」との問いに、「いいえ。それどころか最も聖なる

人々さえ、この世にある間は、この服従をわずかばかり始めたにすぎません。とはいえ、その人たちは、真剣な決意をもって、神の戒めのあるものだけではなくそのすべてに従って、現に生き始めているのです」(問114)と答えます。

なぜでしょうか。墮落した人間は原義を失い、「人の性質全体の腐敗(原罪)」を負ってしまったからでした。罪の歪みが人間性の全体に及ぼされ、完全無欠な部分は一つもなくなってしまったからです。腐敗した心から生み出されるものは、腐敗した思い、言葉、行為です。神が受け入れることが出来る傷のない純粋な善い行ないは、一つも生み出すことが出来なくなってしまったのでした。そしてこの「腐敗の残部」がどの部分にも残っており、「そこから絶え間のない和解できない戦いが生じ」「この戦いにおいて、残っている腐敗が、一時大いに優勢になることもある」のです。聖化は「この世にある間は未完成」なのです。

この日ごとに罪を犯し続ける自分について、どれほど深く自覚し、罪を悲しんでいるのでしょうか。「罪を悲しみ、憎み、捨てる」努力をどれほどしているのでしょうか。そのことにおいて、まことに鈍い者であることを告白せざるを得ません。「私は何と惨めな人間なのでしょうか」と、心の底から叫ばずにはいられない、深い罪認識を与えられたいものです。それだけが私たちを、真実の救いへと至らせる養育係なのです(ガラテヤ3:24)。

私たちは、主イエス・キリストに目を向けます。キリストこそが律法を守り抜き、完成されました。このお方に結びつけられていることが、私たちの幸いです。(三川栄二)

テキスト マタイによる福音書19章16～30節
カテキズム 子どもカテキズム問64

〔単元のねらい〕

2002年のカリキュラムでは、問64を二回にわけて取り扱った。今回は、罪人の頭であるとの自覚が与えられることと、その罪からの救い主イエス・キリストを一息で語る。これもすばらしいことである。使徒パウロはローマの信徒への手紙の第1章のなかで、福音において神の義が現され同時に神の怒りも示されたと書いた。十戒においても、我々は自らの罪深さ、徹底的に墮落した状態であることを呼び覚まされる。しかし、同時に、福音において明らかにされた主イエス・キリストにおける神の義、神の救いの力をも鮮明にしていただける。問65では聖霊のお働きによって新しくされたキリスト者の恵みを語るが、ここでは、その恵みを成就された主キリスト・イエスの勝利を高らかに歌う。このときには、主の御許を去っていった金持ちの男性も、この後、十字架の主イエス・キリストを信じたかもしれない。

「100点満点の人間なんているの？」

ある日のこと、イエスさまのところに、それはそれは立派な身なりをした男の人が近づいてきました。見るからにとってもまじめそうな人です。その男の人は、言いました。「先生、永遠の命を得るにはどんな善いことをすれば良いのでしょうか。」見るからにまじめな人だけあって、やっぱりすごくまじめな質問です。僕たち私たちにとっても、この質問はとても大切だと思います。なぜなら、「永遠の命」以上に大切なもの、尊いものはないのですから、永遠の命を得るためには、どうすればよいのかという質問、関心は大切です。

さて、イエスさまは、どのようにお答えになられたのでしょうか。「もし命を得たいのなら、掟を守りなさい。」このお答えは、とてもびっくりします。なぜなら、僕たち私たちは、日曜学校で繰り返し、永遠の命はイエスさまを信じること、イエスを信じれば、ただそれだけで、罪が赦されて、永遠の命が与えられて、神さまの子どもにさせていただけると教えていただいて来ましたね。だったら、これまでの教えは間違っていたのでしょうか。永遠の命を得るためには、やっぱり掟を守るように努力しなければならないのでしょうか。今日のカテキズムのなかで、「私たちは毎日、思いと言葉と行いによって破っています。私たちは、

完全に神さまに背いている罪人なのです」と言いました。だったら、イエスさまは、掟を守れていない僕たち私たちをお救いくださらないのでしょうか。永遠の命はいただけないのでしょうか。

さて、この男の人は、このイエスさまの御言葉になんと答えられるのでしょうか。「どの掟ですか。」うーん、やっぱりすごく思います。先生だったら、イエスさまにそう言われたら、それだけでうつむいてしまうしかないなあと思うからです。ところが、この人は、「そんなことはわざわざ言われなくても当たり前のことです」という感じでした。

イエスさまはなんとお答えになられたのでしょうか。「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、父母を敬え、また隣人を自分のように愛しなさい。」これは、みんなももう分かったのではないですか。これまで学んできた十戒のなかの掟です。

さて、男の人は、なんと答えたのでしょうか。「そういうことはみな守ってきました。まだ何か欠けているのでしょうか。」うーん、すごすぎると思います。十戒くらい当然守ってきました。そんなことを聞くためにわざわざ来たわけではないのです。それだけで、よいなら、何もイエスさまの

ところまで尋ねてきません。わたしは、まじめに生きてきたから、きっと永遠の命をいただけたと思っています、でも、絶対、確実に大丈夫なように確信を持ちたいのです。

そこで、イエスさまはこの人の顔をじっと見つめてこう仰せになりました。「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。……それから、わたしに従いなさい。」

するとどうでしょう。それまでの男の人の自信満々の顔つきは見る見る間に、暗く険しい顔つきに変わって、今にも泣き出しそうです。それだけではないのです。黙って、イエスさまのもとから立ち去ってしまったのです。マタイによる福音書を書いたマタイさんは、こう書いています。「たくさんの財産を持っていたからです。」

永遠の命を受けるためには、完全にならないとだめだとイエスさまは仰せになります。そしてこの人も、お弟子さんたちも、僕たち私たちも、誰一人自分の力で完全になれる人などいないことをお教えくださるために、掟を守りなさい。全財産を捧げなさいと仰せになられたのです。

この会話を聞いていたお弟子さんたちも、顔つきが険しくなりました。しかもイエスさまは、こんどは、お弟子さんたちに向かって仰せになりました。「金持ちが神の国に入るよりも、らくだ

が針の穴を通る方がまだ易しい。」これを聞いたお弟子さんたちの顔はもう引きつっています。思わず言ってしまいました。「それでは、だれが救われるのだろうか。」お弟子さんたちも今、これまでの自信がぐらぐらになってしまったのです。

イエスさまはお弟子さんたちを見つめて、仰せになりました。「それは人間にできることではないが、神さまはおできになる、神さまがして下さるのです。」つまり、永遠の命は、人間の努力によって獲得することは絶対にできないこと、ただ神さまが恵みによって与えて下さるものだという事です。イエスさまはこれをはっきりとさせるために、男の人に、掟を守ることをお命じになられたのです。

掟を完全に守れた人は、イエスさま以外におられません。イエスさまは、その義を、信じる人にお与えくださるのです。だから、大切なことはイエスさまを信じ、従うことです。そうすれば、僕たち私たちでも、このままで、永遠の命を受けることができるのです。たとえ掟を守ろうとして出来なかったとしても、イエスさまのおかげで永遠の命を受けられることは確実なのです。だから、安心して、罪人でいられます。安心して、罪と戦えます。掟を守る努力に励めるのです。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙 8章 1節

従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、
罪に定められることはありません。

〈ねらい〉

十戒をまっとうされたイエス様を信じ生きる喜びをつたえる。

〈展開例〉

これまで、神様がわたしたちにくださった戒め、十戒のお話を聞いてきましたね。神様が私たちに、こうなさいというきまりのことでしたね。おおきくいうと神様を心から愛しなさいということと、わたしたちの周りの人を愛しなさいということでしたね。

さて、これを私たちはどれだけ守れるでしょうか。百点満点守れるでしょうか。

神様を愛しなさい。「そうだ、教会学校に行って神様のお話を聞こう」と思っている、お友だちに誘われると、よそに遊びにいってしまったり、わたしたちはすぐ神様のことを忘れて、自分のことだけ考えたりします。また、お父さんやお母さんのいうことをきかなかったり、お友だちとけんかしたり、ときどきいじわるしたりもしますね。とても百点はむりです。このままでは、神様に叱られっぱなしで、とても喜んでもらえないし、悪

い子だといって神様の子どもにしてもらえないのでしょうか。悲しいですね。

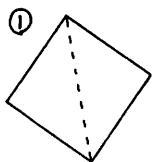
ところが、たった一人だけ百点満点守りきった人がいました。それはイエスさまです。わたしたちは頑張ってもできないことをイエス様が代わりにやってくださったのです。そして、「悲しまなくていいよ。わたしを信じる人は百点とれなくても合格だよ。神様の子どもになれるよ」と言ってくださったのです。嬉しいですね。イエス様は出来ないわたしたちを愛して、だめでも赦してくださいました。だからわたしたちは、神様に喜んでいただけるようにがんばるけれど、失敗してもだいじょうぶ。イエス様がいらっしゃるから安心です。イエス様が大好きになりましたね。イエス様を信じて喜んで進んでいきましょう。

〈お祈り〉

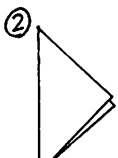
天のかみさま。イエス様はわたしたちができないことをかわってしてくださいました。ありがとうございます。いつもイエス様がだいすきになりますようにしてください。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。

〈やってみよう〉

ありがみで
パタパタわしを作ろう!



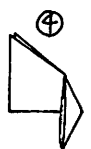
① 半分に折る



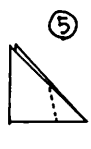
② さらに半分に折る



③



④ 折り線を
つけて開く



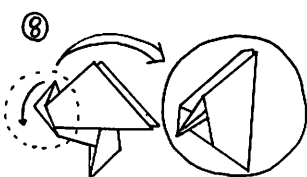
⑤ 折り線に
合わせてかぶせあり



⑥ 谷折り

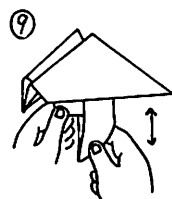


⑦ なかわり折り

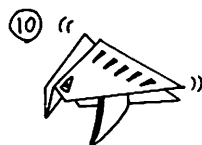


⑧ 口ばしが出るように
なかわり折り

口ばし部分
の折り方



⑨ 矢印のように
重かすと羽はたく



⑩ 目と羽をかいて
出来上がり!!

はねをパタパタ
させてあそぼう!!

〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ①金持ちの男の人は、何をほしがっている？（→永遠の命）
- ②どうすればいいとイエスさまは言われた？（→掟、十戒、律法を守ること）
- ③それらを守ってきたという男に、イエスさまは何を求められた？（→持ち物を売って貧しい人々に施すこと）
- ④男の人は喜んでそうした？（→悲しんだ）
- ⑤立派な人なら自分の力で永遠の命を得ることができる？（→できない）
- ⑥誰にならできる？（→神さま、イエスさま）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

- ①神さまの戒めは少しだけ守ればいいのか？（→完全に守らなければいけない）
- ②イエスさま以外の人で、戒めを完全に守れる人がいる？（→いない）
- ③私たちはどんなふうに戒めを破ってしまう？（→思いと言葉と行いで）
- ④神さまの戒めを守れない人のことを何と言う？（→罪人）

〈考えてみよう〉

先週、一度もうそをつかなかった人はいるでしょうか。お友だちとけんかをしなかった人はいるでしょうか。いないのではないのでしょうか。それでは、昨日一日ではどうだったのでしょうか。たった一日でも、何か悪いことをしてしまったのではないのでしょうか。私たちは、とても完全には神さまの教えを守ることができません。でも、それだけに、私たちはいつも、イエスさまのことを思い出すことができます。自分は完璧だと思っていたら、イエスさまのことなど忘れてしまうでしょう。いつも失敗してしまう自分に、いつもイエスさまと一緒にいてくれるのです。先週、あるいは昨日、イエスさまのことを思い出しましたか。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。私たちを愛してくださり、イエスさまを与えてくださってありがとうございます。イエスさまが流してくださった十字架の血を忘れることなく、いつもイエスさまを信じてことができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

永遠の生命を得るのは、十戒を守ることでではなく、信仰によること。十戒を守りきれない私たちの罪のためにキリストが十戒を完全に守り、十字架にかかって下さった。だから私たちは主を信じ、救われた感謝から罪から離れ、十戒に生きる努力をする。自分がこれだけ立派だからという自己義認から自由になること。

〈展開例〉

○今日の聖書箇所に登場する青年は、永遠の命を得るためにどうすればよいと考えていましたか(マタイ19:16~30)。

①十戒を完全に守ることのできない自分の罪を認め、神様に罪の赦しをいただく。

②自分で善い行いをして永遠の生命を得る。

16節から、②であることが分ります。

○この人は自分で十戒をちゃんと守ってきたと思っていたのでしょうか。それとも十分に守ることのできない罪人だと思ったのでしょうか。イエス様の言葉(18,19)に、何と答えているのでしょうか。

(そういうことは、みな守ってきました)、20節。この言葉から、自分のことを(立派)な人間だと思っていたことが分ります。

○ではそれでこの青年は永遠の生命を得ていると思って安心できたのでしょうか？(出来ませんでした)。何か(足りない)と思ったのです。

○イエス様は「もし命を得たいのなら、掟を守りなさい」(17)。「もし完全になりたいのなら、……」(21)とおっしゃいました。ではイエス様は、十戒を完全に守らなければ永遠の命は得られないとおっしゃったのでしょうか。

(そうではありません)。21節。この青年が結局完全になれない罪人であって、自分の財産を捨てることのできないことを明らかにされたのです。十戒を守ることで永遠の生命を得ようとしても、この人にはそれが出来ないことを示したのです。ではどうしたらよかったですでしょうか。

○完全に善い方は(おひとり)です。その方は(イエス様)ですね。だから、ただ一人完全なお方(イエス様)が、(わたし)のために(十戒)を(完全)に(守って)下さいました。つまり、(完成)して下さいました。この方を信じて、永遠の命をいただけるのですから、感謝して、罪から離れ、十戒を守る努力をしましょう。

〈折り〉

私たちは神様の戒めを完全に守ることはできません。罪人です。でも、イエス様が、私たちのために十戒を完全に守って完成して下さいました。だから私たちは永遠の命を得ることができます。ありがとうございます。私たちは少しでも十戒を守って神様の愛に応えて生きたいと思います。そうやって救われた感謝をあらわしたいと思います。自分の罪を悲しみ、罪を悔い改めていくことが出来るようにしてください。

【目標】

主の御言葉について考える。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→マタイによる福音書19章16～30節を生徒と読む。

【ポイント】

青年の質問の仕方は「何をすれば良いのか」という問いかけだった。神の恵みを求める質問ではなかった。自分の努力によって永遠の命をつかもうとしている。彼の心を捉えていたのは上昇志向であり功績主義だった。しかし大事なのは善いことをすることではなく、たったおひとりの善い方を受け入れることである。そもそも十戒は、青年が思っていたように、これをこなしたら救われるという救いの条件ではなく、救われた民に向かって与えられた掟だった。言うなればそれは、永遠の命に入会した後の入会後の会員規則のようなものである。十戒を条件として完璧に守れたのは主イエスだけだった。しかし唯一永遠の命の資格を持った主イエスが、十字架で死んでくださっ

た。それは命の資格のない私たちが救われるためだった。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての自分が救われているという事実の、そのらくだが針の穴を通るような驚きを、生徒と分かち合う。

Q. 完璧に見えた青年にひとつ足りなかったものの、彼がそれを欲しがったものとは何ですか？

Q. 青年にとってお金を手放すことは、自分の何を否定することだったのでしょうか？

→救いについての自分の力と功績の否定

Q. 自力で何でもできた青年は、永遠の命を自力でつかめませんでした。ではどうすればそれを得ることができるのですか？

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 何でもできる神様は、あなたにどんな良いことをしてくださると思いますか？ 神様にさせていただきたいことは何ですか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

第4課 明治のキリスト教会（その二）

3. 日本基督公会の信仰規準と教会政治

教会をたてあげていくときに、信条と教会政治がどれほどしっかりしたものかということがとても大切です。日本の教会史を見ていくときにも、それぞれの時代に生み出された教会をこのふたつのものでさしによって検討していくことは不可欠のことです。

では、日本最初のプロテスタント教会である日本基督公会の場合、この点ではどうであったのでしょうか。

まずこの教会が信仰規準として採用していたのは、1846年にロンドンで結成された万国福音同盟会という教派をこえた伝道団体がかけていた、九か条からなる教理基礎でした。万国福音同盟会はアメリカで起こった大覚醒と呼ばれるリバイバル運動の中心勢力ともいべき団体で、日本に来た宣教師たちの多くも大覚醒運動の影響を受け、この団体にも好意的でした。前回見た日本基督公会誕生のきっかけとなった祈禱会も、実はこの福音同盟会によるものだったのです。

九か条の教理基礎の中味ですが、いちおうプロテスタントの信仰の要点をおおまかにとらえてはいるものの、あまりにも簡便に過ぎ、ひとつの教会が信仰規準として持つにはいたってたよりないものと言わざるを得ません。万国福音同盟会は教会ではなく、あくまでも教派をこえたリバイバル運動のための団体であったことを考えるなら、それは当然のことでしょう。

教会政治はというと、設立にかかわった宣教師たちが改革派、長老派に属していたこともあって、おもてむきには長老主義政治を採り、治会長老や

執事もおかれましたが、実際には長老主義と会衆主義とがまじりあったような、きわめて不徹底な長老主義政治でした。

このように、信仰規準の面でも教会政治の面でも、日本基督公会は決してしっかりしていたとは言えませんでした。無教派の路線を願い、教会のもととして「一家親愛の情」（日本基督公会条例）をにかけていたこの教会が、はたしてほんとうに教会と呼べるのかという点については、今も議論がかわされています。

4. 日本基督公会から日本基督一致教会へ

1877（明治10）年10月、いくつかの改革派、長老派のミッションと日本基督公会とが合同して、日本基督一致教会が誕生します。

この教会は、日本基督公会の時代とは大きく様変わりします。まったく別の教会ができたと言ってよいほどです。というのも、無教派の路線をすてて、厳格な長老主義教会としての体裁を整えることとなったからです。

信仰規準としては、ウエストミンスター信仰告白、同小教理問答、ドルト信仰規準、ハイデルベルク信仰問答の四つを採用しました。教会政治においても政治規則、懲戒条例、礼拝模範（私たちの教会の政治規準、訓練規定、礼拝指針に相当するものと見ることができます）をそなえ、小会、中会、大会会議の段階性も確立されました。

さらに、教会員にもしっかりとした訓練をほどこしたようです。よくとどのえられた礼拝式文や祈禱文を持ち、主日礼拝や祈禱会への出席が奨励され、聖書日課もそなえられていました。日本基督公会の時代とくらべていかに大きく変化したかがおわかりいただけると思います。（木下裕也）

第5課 明治のキリスト教会（その三）

5. 一致教会についての見方

信仰規準においても教会政治においても厳格な長老主義教会であった日本基督一致教会は、日本の教会史の初期の段階で、法が教会を治めるのだという事実を教え、信条と政治が教会にとってどれほどたいせつなものであるのかを示した点で、おおきな意味を持ちます。この一致教会時代の訓練は、その後の日本人信徒たちの信仰と教会生活によき実りを与えたにちがいません。今にいたるまで、日本の教会には今ひとつ法的な感覚がとほしいとの指摘がなされることから言っても、一致教会の持つ意義は小さなものではなかったはずです。

しかし一方で、いまだ教理や教会政治についての理解も浅く、教会人としての経験もじゅうぶんではなかった当時の日本人信徒たちにとっては、このような教会形成の方向はかなりの重荷であったことも事実です。

たとえば植村正久は、一致教会時代は外国宣教師たちがつくる西洋料理を出されるままに食べていたような時代だったと述べています。また一致教会が採っていた四つの改革派諸信条を四筋の鎖と表現し、これらの鎖にしばられて首も回らないありさまであったとふりかえています。こうした感情は植村のみならず、当時の多くの日本人信徒たちが分け持っていたものだと思います。彼らは一致教会の時代に教会にしっかりした足場がすえられたことを評価しつつ、あくまでもそこを通過点と見なし、公会時代の無教派の路線をなお理想の夢としていたのだと思います。

6. 日本基督教会と植村正久

日本基督一致教会は1890（明治23）年の大会の

おりに憲法を改正し、名前も日本基督教会とあらためて、教会のすがたを一新します。とくに信仰規準がおおはばに見直され、それまでの四つの改革派諸信条にかわって前文をつけた使徒信条を採用します。つまり厳格な信条教会がここで一気に簡易信条の教会に生まれ変わるのです。

ここには、まだ歴史の浅い日本の教会に外国の教会の重すぎる信条をお仕着せにただけでは、ダビデにサウルの鎧をあてがうのにも似てどうていなじむものではない、今は簡素にして信仰の要点を的確につかんだ信条を採って、将来の進歩と改良の余地を残しておくべきだとの判断が働いたでしょう。また、機が熟したなら日本人みずからの手で信条を制定しようとの思いもあったことでしょう。

ともあれこのようにして成立した日本基督教会は、1941（昭和16）年に日本基督教団の第一部として組み入れられるまで、五十年の長きにわたって日本を代表するプロテスタント教会としての歩みを重ねていくことになります。のちに日本キリスト改革派教会の創立にかかわっていく人々も、もとはこの教会に属する教職、長老たちでした。

日本基督教会の文字通りの大黒柱であったのが植村正久です。彼は日本基督教会を国民的自由教会としてたてあげることを願い、そのために戦うことをいといませんでした。

国民的自由教会は、三つの性格を持つものとされました。第一に、聖書に忠実な正統的福音主義の信仰に立つことです。ただしその福音主義は教派や神学の厳密さにはこだわらない、広い意味での福音主義です。第二に、外国宣教師から自立した、日本人の手になる教会です。第三に、国家権力からも自立した、キリストの主権のあざやかな教会です。（木下裕也）

第6課 明治における教会と国家

ここで明治期における教会と国家とのかかわりの問題について見ておきたいと思います。

先にも触れましたように、日本は明治維新によって急激な変化をとげました。明治国家は強力な中央集権国家です。富国強兵のスローガンのもと、西欧諸国にならった近代的な国家のシステムの整備が急ピッチですすめられました。しかしそのような急造国家である以上、混乱や動揺もともないました。これに耐えるためには、国家と政府をささえ、国民を統率するための新しい権威が必要とされました。そこで維新政府が着目したのが天皇の権威です。

近代天皇制とは、明治維新のおりに政治的な意図によって作りだされ、1945年の敗戦のときまで存続した天皇制を言います。古来から天皇は国のためのまつりごとを行う祭祀でしたが、ここで現人神と呼びうる存在となったと言えます。

明治政府はこの天皇の宗教的性格を国家支配に利用するため、国家神道なるものをつくりだします。ただし帝国憲法がかたちのうえでは信教の自由を定めていたため、国家神道は宗教ではないとされました。これを神社非宗教論と言います。

さらに1889（明治22）年に制定された大日本帝国憲法では、天皇は皇祖天照大神の子孫、万世一系の家系にあたる天皇が統治するのであって、その統治は神聖であり、絶対不可侵であると規定され、翌年に発布された教育勅語は国民に天皇の臣民としての道を示す文書とされました。このように近代天皇制が確立されていく1890年代から、教会と国家との関係に緊張が高まってきます。

1891（明治24）年1月、当時第一高等学校で

教えていた内村鑑三が、天皇自筆の教育勅語への最敬礼をこばみ、非国民として各方面から激しい非難をこうむり、ことは内村個人の問題をこえてそもそもキリスト教は日本の国体に合致するものかいかという論争に発展するにいたりました。これはまさしくキリスト者として十戒の第一戒を守りぬく信仰を問われる問題であり、もちろん内村自身もそのことをわきまえていたと思われます。

しかし、当時の教会指導者たちの応答の多くは、むしろ内村に自省をうながすものでした。宗教は人間の内面のプライベートな領域であり、勅語への最敬礼は社会的儀礼にすぎないのだから、むしろ奨励されてしかるべきだとの論調が主でした。教会がすでに国家神道体制にのみこまれつつある消息を見てとることができます。

内村不敬事件の余波もさめやらぬ中、東京帝国大学教授であった井上哲次郎がキリスト教を勅語に背く宗教であるとして攻撃し、キリスト教陣営もこれに応戦して教育と宗教の衝突論争がまきおこります。しかし教会はここでも井上の批判に対して、近代天皇制の問題を指摘するよりも、むしろキリスト教こそ勅語の言う忠孝の徳をまっとうに行うものだとの弁明に終始した感があります。

もうひとつは日清、日露戦争と教会との関係についてです。いずれも朝鮮を植民地にするプロセスにおいてなされた侵略戦争ですが、教会はこれを文明国日本が朝鮮を啓蒙し近代化するための正義の戦争であるとして、戦意の高揚や軍隊の慰問、軍人遺族の慰安などにつとめました。植村正久らは日本が朝鮮を植民地としたことをイスラエルがカナンの地を得たことになぞらえています。しかし日露戦争になると、内村や柏木義円らは非戦論に転換しています。（木下裕也）

2005年10～12月カリキュラム (第19号)

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単 元 の 目 標			
10月2日	教会に生きる (一)	問65	ハイテ64、ウ告白17章
		エフェソ4:12-16	コヘレト4:12
聖霊によって結ばれた教会共同体と一つにされて、信仰の喜びの道を歩もう			
9日	教会に生きる (二)	問66	ハイテ65、ウ告白14章
		エフェソ4:17-24	テモテ1:7
教会の恵みを通して、キリストの真理に基づいた信仰生活を送ろう			
16日	信仰と悔い改め	問67	ウ小教理86, 87、ウ告白15章
		使徒言行録26:12-18	使徒言行録26:17
信仰を強くし、絶えず悔い改めて、神の御前に生きる人生を歩もう			
23日	恵みの手段	問68	ウ小教理88、ウ告白14章
		使徒言行録2:37-47	使徒言行録2:42
御言葉と礼典と祈りが教会生活の土台である。教会の恵みの内に生きよう			
30日 宗教改革記念	生ける神の御言葉	問69	ウ告白1章
		ルカ8:4-8	ルカ8:8
生ける神の御言葉の力への信頼を強くしよう。福音的に聴き取ることを			
11月6日	御言葉への聴従	問70	ウ小教理89, 90
		ルカ8:11-15	ルカ8:15
神への愛と奉仕として、御言葉によく聴き従う歩みに励もう			
13日	礼典	問71	ウ小91-93、ハイテ65-68
		ルカ24:28-35	ルカ24:33b-35
礼典を通して豊かな祝福が与えられる。礼典の恵みを知ろう			
20日	洗礼	問72, 73	ウ小94-95、ハイテ69-74
		マタイ3:13-17	ローマ6:3b
洗礼の恵みを知り、信仰告白と洗礼・入会への志を強めよう			
27日 アドベント	聖餐	問74, 75	ウ小96, 97、ウ大168-177
		マタイ26:26-30	マタイ24:27b-28
聖餐の恵みを知り、聖餐共同体へのまなざしを持つことに努めよう			
12月4日 アドベント	平和の君	—	—
		イザヤ9:1-6	イザヤ9:5
平和の君キリストを待ち望み、平和の完成のために仕えよう			
11日 アドベント	柔和の王	—	—
		ゼカリヤ9:9-10	ゼカリヤ9:9
柔和の王をかしらにする者として、へりくだった柔和の道を喜んで歩もう			
18日 アドベント	ヨセフへの告知	—	—
		マタイ1:18-25	マタイ2:1-12
ヨセフの信仰の姿勢に学び、キリストの降誕を喜ぼう			
25日 クリスマス	東方の学者たち	—	—
		マタイ2:1-12	マタイ2:10-11
キリストの降誕を喜び、東方の学者のようにキリストに自らをささげて歩もう			

2005年度 年間カリキュラム

(2005年4月～2006年3月)

二年サイクル第2年 (子どもカテキズム問34～85)

月 日	教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム
2005年			
4月3日	進級式	神の民の祈りの家	問34
10日		キリストの体なる教会	問34
17日		再臨の約束	問35
24日		再臨に備える	問35
5月1日		死のときの祝福	問36
8日	母の日	復活のときの祝福	問36
15日	聖霊降臨祭	聖霊降臨・教会の誕生	
22日		第三部 生活の道 一、感謝について 感謝……神の求め	問37
29日		感謝としての服従	問38
6月5日		第三部 生活の道 二、感謝に生きる道 十戒……感謝の道標	問39
12日	花の日	十戒の要約……神と人への愛	
19日	父の日	贖いのみわざ……過ぎ越し	問41, 42
26日		過ぎ越しの成就……キリスト	問41, 42
7月3日		第一戒 神を神とする	問43, 44
10日		第二戒 刻んだ像	問45, 46
17日		第三戒 神の御名	問47, 48
24日		第四戒 主の日の安息	問49, 50
31日		第五戒 父母を敬う	問51, 52
8月7日		第六戒 殺人の禁止	問53, 54
14日	(平和)	平和について	
21日		第七戒 姦淫の禁止	問55, 56
28日		第八戒 盗みの禁止	問57, 58
9月4日		第九戒 偽りの禁止	問59, 60
11日		第十戒 むさぼりの禁止	問61, 62
18日	(敬老の日)	神のおきてを喜ぶ生活	問63
25日		律法に背く人間	問64

月 日	教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム
2005年		第三部 生活の道 三、教会に生きる道	
10月2日		教会に生きる（一）	問65
9日		教会に生きる（二）	問66
10月16日		信仰と悔い改め	問67
23日		恵みの手段	問68
30日	宗教改革記念日	生ける神の御言葉	問69
11月6日		御言葉への聴従	問70
13日		礼典	問71
20日		洗礼	問72, 73
27日	アドベント	聖餐	問74, 75
12月4日	アドベント	待降節	—
11日	アドベント	待降節	—
18日	アドベント	待降節	—
25日	クリスマス	降誕祭	—
2006年			
1月1日	新年	一年の感謝と新たな始まり	
		第三部 生活の道 四、祈りに生きる道	
8日		祈りとは何か（一）	問76
15日		祈りとは何か（二）	問76
22日		祈りのお手本……主の祈り	問77
29日		呼びかけ	問78
2月5日	（信教の自由）	第一の祈願	問79
12日		第二の祈願	問80
19日		第三の祈願	問81
26日		第四の祈願	問82
3月5日	レント	第五の祈願	問83
12日	レント	第六の祈願	問84
19日	レント	頌栄	問85
26日	レント	アーメン	問85

『教会学校教案誌』発行のための 自由献金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげめます。

中部中会教育委員会は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに5年目を迎え、第18号まで発行して参りました。中部中会では7割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ40教会で採用されています。先の第59回定期大会の教育委員会報告にありますように、大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会教育委員会では、あわせて皆様からの自由献金によってご支援いただきたいと願っています(2005年4月中部中会第一回定期会にて自由献金願いを可決承認)。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと献金のご支援をいただきたく、よろしくお願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額	30万円
送金先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由献金」と明記してください。

〈編集後記〉

●やさしい言葉で聖書の御言葉を伝える難しさと大切さを学ばせていただきました。感謝です(横浜教会教会学校教師会)。●十戒の言葉が恵みの言葉として子どもたちに届けられることを祈ります(石原知弘)。●小学生に伝わるように書くのは、なかなか難しいですね(鈴蘭台教会日曜学校教師会)。●執筆作業を通して、わたし自身たいへん恵みをいただいております(吉岡契典)。●高2の娘が聖霊降臨祭に信仰告白しました。開拓伝道の激務に追われ、わが子に向き合っていることができなかつた拙い親であることを、学び会の折、悟られました。それにもかかわらず……。ただ恵みのみです(相馬伸郎)。●回を重ねるごとに、聖書の奥深さを感じます(辻幸宏)。

〈あとがき〉

第18号をお届けいたします。今号では、十戒を

取り扱います。十戒を主の恵みの言葉、福音の言葉として聞きたいということが、編集部的心愿です。祈りをもって取り組んで参りましょう。第七戒を扱うことにあわせて、『性について話そう』の著者である長谷川はるひさんに寄稿していただきました。良書ですので、長谷川さんの著書をぜひお読みください。お勧めいたします。

〈購読の申し込み〉

『教会学校教案誌』をぜひご購読ください。別冊『子どもカテキズム』(300円)、バックナンバーの在庫もあります。

津島教会気付 春名義行まで

〒496-0038 愛知県津島市橋町2-30

Tel/Fax. 0567-26-4221

Soli Deo Gloria!

☆ 本文執筆者一覧 ☆

聖書研究

春名義行(津島教会牧師)

潮田純一(西鎌倉教会牧師)

望月信(高蔵寺教会牧師)

辻幸宏(大垣伝道所協力牧師)

木下裕也(豊明教会牧師)

カテキズム研究

久保浩文(高知教会牧師)

岩崎謙(神港教会牧師)

小野静雄(多治見教会牧師)

三川栄二(稲毛海岸教会牧師)

説教展開例

小野田雄二(上野緑ヶ丘教会牧師)

千ヶ崎基(草加松原教会牧師)

木下裕也(豊明教会牧師)

相馬伸郎(名古屋岩の上伝道所宣教教師)

分級展開例

幼稚科 横浜教会教会学校教師会

小学科下級 石原知弘

(北神戸キリスト伝道所宣教教師)

小学科上級 鈴蘭台教会教会学校教師会

中学科 吉岡契典(仙台カナン教会牧師)

成人科 木下裕也(豊明教会牧師)

表紙イラスト

坂野知子(松戸小金原教会日曜学校教師)

イラスト・作画協力

平尾信子(高蔵寺教会教会学校教師)

望月邦子(高蔵寺教会教会学校教師)

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎(長)

木下裕也

辻幸宏

春名義行

望月信

名古屋岩の上伝道所宣教教師

豊明教会牧師

大垣伝道所協力牧師

津島教会牧師

高蔵寺教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』
2005年7・8・9月号(季刊)
第18号
2005年5月29日発行

発行 日本キリスト改革派教会 中部中会 教育委員会
発行所 日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部
名古屋岩の上传道所 宣教教師 相馬伸郎
〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座 00890-2-148183「伊藤治郎」
編集・印刷 株式会社あるむ
〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田3-1-12 第三記念橋ビル3F
頒価 900円(本体価格)
